琉球大学学術リポジトリ

教員養成最終段階におけるプラクティススクールによる総合的力量の形成とその明示的な確認に資する事業：平成19年度文部科学省教員養成改革モデル事業(教職実践演習の試行)

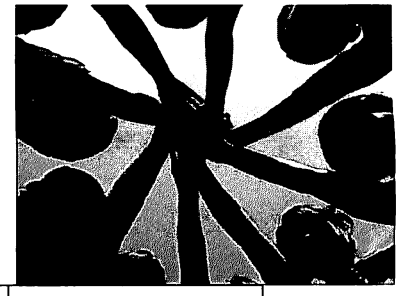
メタデータ	言語:
	出版者: 會澤, 卓司
	公開日: 2009-01-20
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: -
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/8847

第２部　実践編：各プラクティススクール（PS）の実践

第３章　「フルピースポーツスクール」の実践

第１節 フルピースポーツスクールの軌跡

(1) FPSS の設立と理念



FPSS とは，フルピースポーツスクール（Full Peace Sports School）の頭文字をとった名称のプラクティス・スクール（以下，PS と示す）である。FPSS の参加学生は，以下の**表５**の通りである。参加学生は，様々な専修および異学年からなり，学部の４年生５名，３年生以下４名の合計９名であった。

表５　FPSS の参加メンバーと校務分掌

No.	専修名･学年	氏名	校務分掌	担当学級
1	保健体育専修・4 年次	K.K.	校長	KY
2	学校心理学・4 年次	M.R.	運営・管理	フルピー3 組
3	学校心理学・4 年次	Y.M.	運営・管理	フルピー3 組
4	国語教育専修・4 年次	S.N.	運営・管理	KY
5	技術教育専修・4 年次	A.H.	庶務	LEP
6	保健体育専修・3 年次	T.M.	連絡	LEP
7	生涯健康教育・3 年次	K.K.	生徒指導	LEP
8	教育学専修・2 年次	O.M.	生徒指導	フルピー3 組
9	技術教育専修・1 年次	K.A.	広報・記録	KY

FPSS の基本理念として，学校目標は「身体で感じるピースフル」（身体を使って平和を表現する）と設定した。これは，総合的な学習の時間で取り扱うことになっていた平和学習と体育の融合を意図した学校目標となっている。次に，学校経営方針としては，①体力・技術の向上などの達成感を味わう，②平和について身体を使って表現する，③コミュニケーション・協調性の育成の３点を掲げた。

(2) FPSS の子ども集めの背景

本来，この PS では土曜日の午前中に子どもたちを集める予定であったが，FPSS では実際の学校現場とタイアップする形で実施した。なぜなら，今回のモデル事業における短期間での実践において，模擬学校の創造の方法論を多角的に検討する必要性があると考えたからである。

FPSS では，R 大学附属小学校６年生の総合的な学習の時間を活用した。２クラス計 78 名を対象に，児童を新たに３クラスに配分し，そのクラスごとに４年生を中心として担任と副担任を配属した（**図４**）。ただし，３年生以下の学部生に限っては，各クラスに１人ずつ配置させ補助的な役割にまわってもらった。なぜならば，本来「教職実践演習」は，４年次の後期に実施する予定の必須科目であるからである。加えて，３年生以下は，教科の専門的な授業の履修途中でもあり，教育実習の経験もない中で，学級経営や教科指導をするのは困難を要すると判断したためであった。

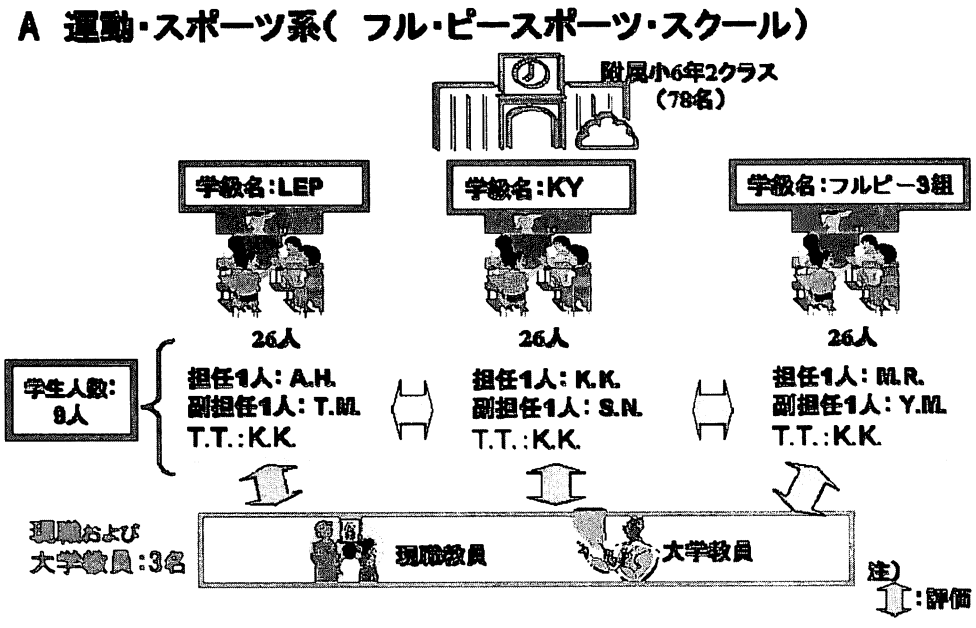


図４　FPSS の運営に関する概念図

第２節　FPSS における企画・運営

写真１は，FPSS における企画から運営に関する学生たちの様子である。

(1) 企画の内容

第１回の会議では，メンバーの顔合わせやどのような学校にするのかということを話し合った。第２，３回の会議では，具体的に，学校名，学校理念や学校方針，そして校務分掌を確定した。校務分掌は，校長，運営・管理，庶務，連絡，生徒指導，広報・記録の６部門を設けた。さらに，第４，５回の会議では，オリジナルの校章やポロシャツ，そして各学級の担任と副担任等を決定した（表６）。第６,７回の会議では，授業実践の評価規準の策定（表７）や評価方法のための学習ファイル，そして目標に到達した児童へのライセンス・カードなどを検討した。加えて，各学級において，指導計画や学級方針等も検討した。

表６　FPSS としてのオリジナル必須アイテム

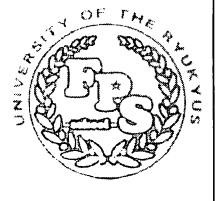
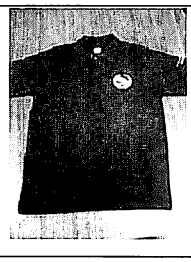
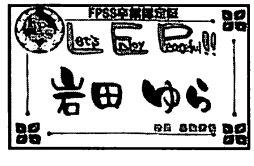
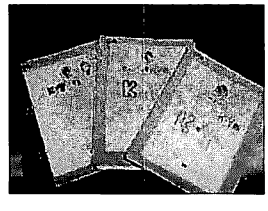
校章	ポロシャツ	ライセンス・カード	児童用の学習ファイル
		 ※カードはラミネートしている	

写真１　学生たちの FPSS の企画から運営（授業実践）の様子

学級目標や校務分掌の策定	会議中の様子①	会議中の様子②

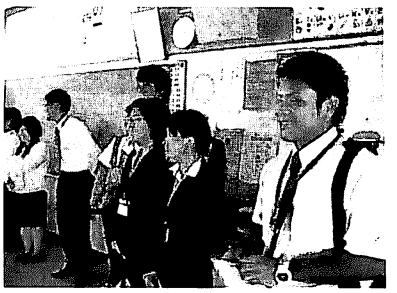
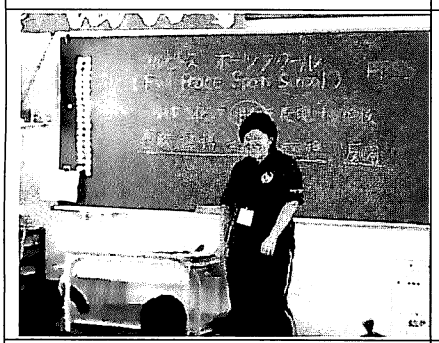
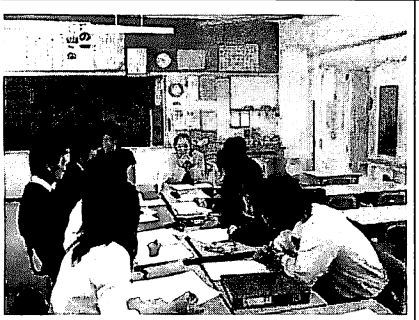
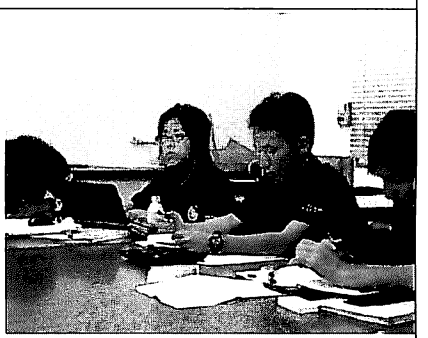
校務分掌の記録係りが議事録をとる	オリジナルの「ポロシャツ」での集合写真（第１回目）	子どもたちと顔合わせ
		
一教師としての挨拶場面	授業実践	各学級ごとの様子
		
附属小の先生方にアドバイスをいただく様子（総合リフレクション）	学習カードの記入（評価のため）	授業後はデジタルペンで評価そして会議・
		

表７ FPSS の評価規準および基準

1. 評価規準

身体・学びへの意欲・態度	身体・学びへの思考・判断	身体・学びに関わる知識・理解	身体・学びに関わる技能・表現
・仲間と協力して助け合ったり，互いのよさを見つけたりして仲良く運動に取り組んでいる	・練習や発表会では，互いの良い所を批評したり，成果を確かめ合ったりしている	・平和について理解し，それを表現することが楽しい運動であるという特性やその練習の仕方を知っている	・大きな動き，音楽に乗った動きなど，平和へのつながりを持って表現できる

2. 評価基準

	A（十分満足できる）	B（おおむね満足できる）	C(努力を要する)
ア 身体・学びへの意欲・態度	①お互いに見合って練習しており，必要なときには補助をして練習している	①仲間と協力して助け合っている ②互いのよさを見つけて運動に取り組んでいる	①与えられた運動や課題に取り組んでいない
イ 身体・学びへの思考・判断	①お互いの演技の良い点，悪い点を指摘しており，また，自己反省している ②他のクラスの演技で良い点を見つけそれについて自分の感想が言える（書ける）	①お互いの演技の良い点，悪い点を指摘している ②他のクラスの演技の良い点を見つけることが出来る	①感想しか書いていない ②他のクラスの演技をみていない
ウ 身体・学びに関わる知識・理解	①平和及び（表現の運動の）実践を通しての作文によって 5 つのキーワードのうち 3 つ以上を含んで書いている	①平和及び（表現の運動の）実践を通しての作文によって 5 つのキーワードのうち 2 つを含んで書いている	①平和及び（表現の運動の）実践を通しての作文によって5つのキーワードのうち 1 つしか含んで書いていない
エ 身体・学びに関わる技能・表現	①技能（表現）5つのポイントのうち 3 つ以上がクリアできている	①技能（表現）の 5 つのポイントのうち 2 つがクリアできている	①技能（表現）の 5 つのポイントうち 1 つ以下しかクリアできていない

FPSS の評価規準においては，学生たちの中でも，とりわけ 4 年生のみで「アセスメントチーム」をつくり，この単元を通して身に付けさせたい知識や能力に関して検討を重ねた。4 年生といっても，実際に学校現場にて単元全体を指導したこともなければ，授業課程において評価（評定）をしたこともない。ましてや，総合学習と体育の融合系の教科とあって，学生たちは，観点の設定や具体的な「のり準」と「もと準」の策定に苦労していた。なお，この評価規準のルーブリック（採点指針）に即して，それに到達できた子どもにライセンス・カードを配布した。

(2) 運営の内容

下記の**表 8** は，FPSS の運営内容とりわけ授業実践の 16 時間の単元計画についてである。そして**表 9** は，各学級の具体的な学級目標と授業内容（単元計画）の概略を示している。

第 8 回から第 15 回までは，実際の附属小学校での授業実践である。運営は，1 回の授業実践（大学の 1 コマに相当する 90 分）で 2 時間の授業（小学校の授業時間 45 分×2）を行った。体育という教科の特性上，授業を行なうための施設（運動場や体育館など）等の確保が重要である。この点においても，その学校現場との他の授業あるいは行事と兼ね合いも考慮して，指導計画案を検討しなければならなかった。

なお，本授業実践の最終日には，授業参観として保護者を招き，学習成果の発表会を実施した。

表８　FPSS の時間割と単元計画の詳細

	時間	学級名	1 (10/11)	2 (10/25)	3 (11/1)	4 (11/8)	**5** **(11/29)**	6 (12/4)	7 (12/6)	8 (12/7)
場所			体育館 教室	体育館 教室 音楽室	体育館 教室 音楽室	体育館 教室 音楽室	体育館○ 教室△ 音楽室■	体育館 教室 音楽室	体育館 教室 音楽室	附属中 体育館
										発表会
1	14:25 ～ 15:10	LPE	全体オリエンテーション（クラス分け）	学級オリエンテーション	ダンス・気持ちあてゲーム	ダンス（愛唄と創作ダンス）	△○シンクロマット（エトピリカ）	ダンスの練習	学級ごとのリハーサル	9:45 ～ 11:30 **発表会本番**
		KY			マット運動	ボディーパーカッション	○マット運動と跳び箱	ボディーパーカッション		
		FP3			マット運動と組み体操	絵を使って平和を表現	■発表会にむけての話し合い	発表会の構成練習		
2	15:25 ～ 16:10	LPE	全体集合（担任等の紹介）	マット（前転・後転・開脚前転）	マット（側転・倒立前転）	ダンス（愛唄創作ダンス）	○シンクロマット（エトピリカ）	発表の通し練習	学年全体によるリハーサル	
		KY		体つくり運動	マット運動と跳び箱	マット運動と跳び箱	■発表会にむけての話し合いと活動	発表会の通し練習		
		FP3		マット運動	エイサー	組み体操	○発表会の流れ確認	エイサー 組み体操		
琉球大学保健体育教官棟にて反省会（評価）と会議　pm5～pm6:30										

表９　FPSS の各学級の目標と授業内容

クラス名	LEP 組	KY 組	フルピー3 組
学級目標	Let's Enjoy Peaceful!（平和を楽しもう）	①連続技ができるようになる。 ②男女仲よくする。	「戦争から平和へ」をテーマに，それを身体で表現する。
学習形態	児童を 3 グループに分け，グループごとに教員を配置する。	男女に分けて，男子グループは男性教員，女子グループには女性教員が配置する。	授業者を 1 人決めて，他の 2 人が T.T として支援する。授業者の役割を 1 週間ごとにローテーションする。
授業内容	＜前半＞： ・マット運動の自分の能力にあった技能を習得することができる。 ＜後半＞： ・グループで演技を考えることができる（シンクロマット）。 ・表現運動	＜前半＞： ・器械運動の跳び箱（男子）とマット運動（女子）を習得する。 ・ボディーパーカッションを創作する。 ＜後半＞： ・全員による「BELIEVE」（合唱）の練習。	＜前半＞： ・器械運動のマット運動 ※授業がうまく進行できずに急遽内容を変更 ＜後半＞： ・組み体操（全員，男子，女子） ・平和の舞（エイサーに近い表現運動）

第３節　学生たちの直面した課題と形成された資質能力

このPS を通して，学生たちが直面した課題と教師として身に付けた資質能力の一端を述べたい。そのために，2 つの視点から考察することにする。1 つ目は，デジタルペンで評価された「リフレクション・シート」の数値の変動を参考にする。紙幅の関係上，とりわけ教育実習では育成しにくい「子ども理解と学級経営等の能力」の事項に関する推移に着目する。2 つ目は，このPS 中に学生たちに作成させたティーチング・ポートフォリオ[iij] の一部を参照しながら述べる。

まず，「子ども理解や学級経営等の能力」における学生 A の数値の変動を図 **5** に示した。自己評価に限っては，第 13 回目まで評価値の変動は横ばいであるが，第 14 回と最終日には高値を示した。一方，教員評価と他者評価では，授業回数を重ねるたびに高値を示している。学生 A は，自己評価は厳しくつけているが，第三者からの客観的な評価としては，授業中の子どもの実態把握や掌握する姿勢に対しての成長が明確に観察されたためにそのような評価を受けている。

次に，PS 前後におけるティーチング・ポートフォリオの「教育哲学」の一部を抜粋したものが**表 10** である。「教育哲学」は，このPS の実践前後における自己の「教育に関する考え」を自由記述してもらったものである。ただし，学生 A から E までは，4 年生の記述例に限定している。表 6 を概観してみると，目立つキーワードとしては，「同僚性」，「子ども理解に立った指導計画」，「児童の掌握（とりわけ，叱る技術）」の 3 点である。第 1 に「同僚性」では，具体的な記述として「教師はチームである」や「教師(同僚)間の共通理解及び信頼関係」などが挙げられる。多専攻かつ異学年で集まった学生たちが，PS を企画・運営する中で，不安や悩みを共に克服したり，多様な考え方や価値観を共有したりする中で，コニュニケーションや対人関係能力といった「同僚性」を育成させたと考えられる。第 2 に「子ども理解に立った指導計画」では，具体的な記述として「子どもの様子・状態・状況などを合わせて授業を進める」，「しっかりした児童観を持つことの必要性」などが挙げられる。学生たちは，子どもの実態を把握した上での教材研究の重要性や単元計画の在り方に気づいている。この点は，決められた単元の一部における授業を数回こなす教育実習とは大きく異なるように思われる。第 3 に「児童の掌握（叱る技術）」では，「子どもを叱ることに罪悪感を覚え，本当に嫌になってきた頃，子ども達を信じて授業を任せてみたら，意外にいい

感じだった」や「決まり事をしっかり守らせる」や「子どもを叱るときは怒ることを演じなければならない」などが挙げられる。当初，学生たちは「児童に嫌われたくない」などの理由から，児童を「叱る」ことが困難であると発言していた。しかし，授業をうまく進められない初期の段階において，現職教員や大学教員のアドバイスを受けながら，児童に対する理解を真剣に悩み考え，児童の実態に応じた指導方法を工夫するようになった。すると，吉崎（1997）の指摘する「初任教師の発達課題の 3 つの側面」に類似した授業ルーティンの確立や児童を把握した上で授業を設計するようになっていった。この現象は，この実践における大きな特徴であると思われる。

以上，「子ども理解や学級経営等の能力」における数値の変動に対応して，学生たちの「教育哲学」の記述内容も変容している。また，始めは困難であった子ども理解や掌握を克服しながら，その反省を授業内容に反映していく教科指導力を身につけていく傾向を示した。さらに，それを共に乗り越えていく学生たちの「同僚性」が，今回の PS の実践で大きく育成された資質能力であると思われる。なお，学生のリフレクション・シートに記載された数値の総合得点表を参考までに**表 11** に示しておく。

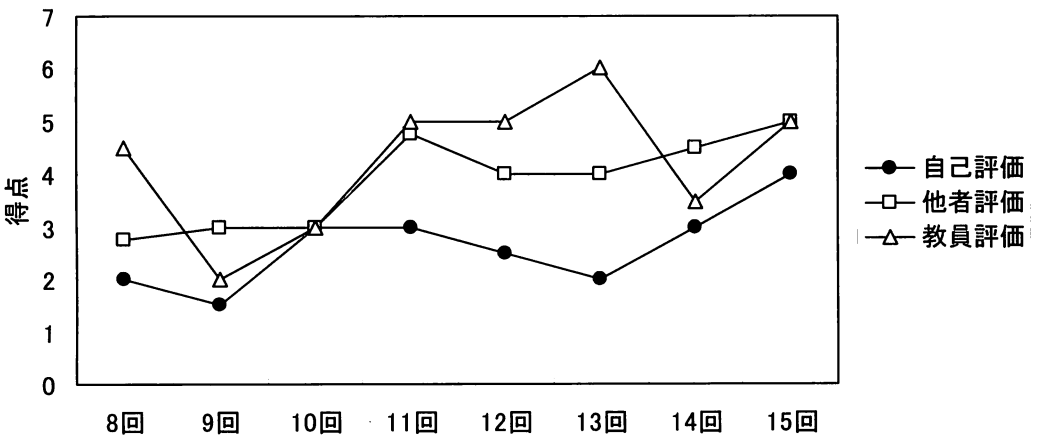


図５ 学生Ａの「子ども理解と学級経営等の能力」における自己評価・他者評価・教員評価の推移

表 10　学生たちの「教育哲学」の記述例

	PS 前の記述	PS 後の記述
学生A（4年生）	私は教育は，「子どもたちが生涯の人生を楽しく幸せに生きていくための方法」と考えている。教師はその方法である教育を，教科指導（授業）や生徒指導，部活動指導という手段を用いて子どもたち１人１人を導く存在の１人であると考える。 学校教育ということに限定すると，私の専門である保健体育の授業では，健康であることや運動の楽しさを味わうための行動変容につながる指導をしていきたいと考えており，その実践のために積極的に研究と修養に取り組みたい。 また私自身，小学校から 14 年間野球に従事し，そのなかで主将をしてきた。その中で培ったリーダーシップと集団を統制するマネジメント力を発揮して子どもたちと向き合っていきたい。	私はＦＰＳＳという学校で，教師として大事ではないかと思ったことが 3 つある．１つ目は，「教師理解（同僚性）」である．これは私が１番感じたことである．（中略）．それなくして，今回の成功はなかったと思う．２つ目に「演じる」ことである．（中略）例えば，子どもを叱るときには怒ることを演じないといけない，子どもたちを引き付けるためにパフォーマンスをして演じないといけないなど様々に演じる場面がある．最後に「子どもと共に感動できる」ことである．子どもが，何が苦手で，何ができないかを知っていることで，それが克服できた時に一緒に喜ぶことができる，感動することができるのが教師ではないかと思う．これは子ども理解にもつながるが，やっぱり教師という職業の，１番最高の瞬間ではないかと思う．
学生B（4年生）	「教育」とは何かといわれたら，文字通りに読むと教え育てるという意味になると思いますが，私は物事を教えるというよりは，色々な知識等を習得するための手立てを示したり，手伝ったりして成長させていく事だと思います。生きる糧を造っていくことではないかな，と感じます。私は，小学校の教師を目指していますが，特に小学校段階は，人格形成・学業の基盤になるため，手立てをする教師の存在がとても大きなものになると思います。教育は，その教育者にかかっているといってもいいのではないかと思います。だからこそ，私は，自分自身が「先生」と呼ばれても本当に良いのか，時々とても不安になります。私が小学生の頃，先生＝何でも出来て，曲がったことはせず正義感の強い立派な人というイメージがありました。もちろん，完璧な人間など何処にもいないと思いますが，「先生」という言葉は，どうしても“模範的な人”というイメージがついてまわります。でも，それとはかけ離れて，とても未完成な自分が，本当に子どもに教育ができるのか，教育をしても良いのかと迷うことがあります。	ある授業で，「あなたが目指す“きょう育”は何か」を訊ねられた。プラクティススクールを終えて，様々な“きょう育”を知った。“教育”・“強育”・“共育”・“協育”・“響育”一言では言い表せない“きょう育”が目の前に多数存在していた。 PS では，今まであまり悩んだ事がなかったものにたくさん悩まされた。単元計画・児童の実態の把握・生徒指導・子どものモチベーション…。生徒指導では，嫌われたくないという思いも強かったし，どの様に指導すれば伝わるのか(指導方法)，それ以前にどの場面で指導すればいいのか(指導場面)が全くわからずにおり，PS 当初の大きな壁であった。だんだん注意する事はできる様になっていたが，次は注意しすぎて聞く耳をもたなくなったり…その課題は未だにたくさんある。（中略）あと一つの教育は“協育”＝“協力して育てる・育つ”である。私は，同じクラスになった，Ｙや M にものすごく支えられた。多分，一人では途中でくじけていたかもしれない。
学生C（4年生）	教育は，洗脳だと考えています。聞こえは悪いですが，経験の少ない子供たちに考える材料を提供したり，それの考え方を教えることは，子供たちの成長にも必要なことです。だから，教え込みを否定したりしません。逆に，授業に話し合い多用することに不安を感じます。なぜなら，話し合いを多用するということは，必要なピース(知識)を与えずに，「パズルを組み立てる(新しい知識をみんなで作り出す)」ことに重きをおいているように私には映るからです。世界の学者たちが長年かけて発見した定理や公式をすべての子供たちが発見できるとは思っていません。話し合いによって，それらを発見させる…そのような授業は，そのことを考えるための知識をしっかり得ている子ども達に提供すればいいのです。すべての子供たちにこのような授業を行うと，学力格差に拍車がかかると思います。だからこそ，教えることと考えさせることのバランスをきちんと考えなければなりません。	教師はチームである。なので，授業を行うときには，自分のクラスのことだけじゃなく，全体のために自分がどう動くか考えなくちゃいけない。（中略） また，しっかりした児童観を持つことの必要性をひしひしと感じた 2 ヶ月半だった。あたしも R も実習が小3だったため，そのノリで授業してしまった。小3用の授業にノッてくるはず無いのに子どもを叱るという悪循環だった。子どもを叱ることに罪悪感を覚え，本当に嫌になってきた頃，子ども達を信じて授業を任せてみたら，意外にいい感じだった。6年生はこっちが手取り足取り指導しなくても，ある程度自由のある課題を与えて，この子たちが迷ったり困ったりしたときのために課題の解決の仕方の手立てをこっちが持っておけば，自分たちでぐんぐん進んでいくものなんだと悟った瞬間だった。
学生D（4年生）	私たちはこの世に生を受けると，まず家族という名の小さな社会の一員になります。家族との関わりの中で，食事や排泄，言葉，家族のルールなど，生きていく上で基礎となることを学んでいきます。成長や家庭の事情に合わせて，保育園や幼稚園などを経て，義務教育である小学校・中学校を卒業し，今日ではその多くが高校へ入学します。	今回のプラクティススクールを通して，私の教育哲学は大きく変化した。教材研究の重要性に加えて新たな教育哲学が見出され，それは私の価値観や人生にも大きく影響を与えるものとなった。以下はその内容である。①子ども理解の重要性，② 教師(同僚)間の共通理解及び信頼関係が授業に与える影響，③ 地域(保護者)との関わり方
学生E	学校教育は「学校・家庭・地域」の三者の連携がなければ成り立たないものだと考える。この三者の連携をより強く	私が考える教育に対する一番の哲学は，その時々の子どもの様子・状態・状況などに合わせて授業や学校生活を進めていくことである。プラクティス

（４年生）	していくことこそが，学校教育をよりよいものにしていくのである。上に書いたように地域に足を運び積極的に行事に参加したりしていくことで，学校が開かれ地域とのつながりも築かれてくると考える。お互いの共通理解があってこそ，学校における教育があると思う。関わり合いを多く持つようにし，自分の目を外に向ける事も忘れずに，保護者や地域の人々との連携を強めていくようにする考えである。関わり合いがあってこその教育だと考える。	スクールを通して児童観の重要性，大切さが身にしみて実感させられた。（中略） 子どもたちとの関わりで多くの時間を費やすのが授業である。この授業という時間の中で，どう子どもたちと学んでいくのか，子どもたちのモチベーションを上げ勉強への意欲を高めるのか，更には子どもたちとの関わりの中で教師自身が学んでいくのかなど授業の時間はとても重要になってくる。その授業を上手く行うには教材研究をしっかり行うことや子ども理解の上でどう指導していくか，考えても考えても足りないくらいの時間が必要である。しっかりとした教材研究の上で，やることを絞っていく。決まり事をしっかり守らせること，それを無視したときのしかることの大切さがある。しかることで全体を引き締めることの重要性がある。それで終わるのではなくて，なぜしかったのかということを子どもに理解させることが大切である。
学生Ｆ（３年生）	教育とは，教師が授業を通して子どもたちに「夢」を与えることである。 人間は子どもの頃に多くのことを経験し，大きくなるにつれて自分というものを確立し，社会に出て行く。この子どもの頃に経験することが将来大人になって生活する上での財産となるし，自我を確立することで大切であると私は考えている。 その経験の多くは小学校，中学校で経験することが大半である。この多くの経験から子どもたちが自分の好きなことを見つけ将来，自分の職業にすることが「夢」を持つということだと考えている。教師は学校で子どもたちに対して，授業や日々の学校生活の中で「夢」を与えられるような存在にならないといけない。教育をとおして，子どもたちに「夢」を与えることが教育で大切なことだと考えている。 そして，子どもの「夢」に対して保護者と教師が連携して教育を進めていくことが必要であると考えている。	12 月 7 日,子どもたちが去った体育館にいた FPSS のメンバーは充実感でいっぱいだったと思う。10 月から FPSS の授業がスタートし,怒涛のような約2ヶ月間をともに過ごした。私たちにとって,このFPSSの実践は教育実習では養うことのできない能力が備わったと感じている。「どのような授業をしたら,子どもたちが付いて来るのだろうか。」,「どうしら授業がうまくゆくのだろうか。」常にこのようなことを考えて過ごした2ヶ月間であった。この2ヶ月間,私たちは教師であり，FPSS でともに協力し合った同僚であったと切に感じている。私が FPSS を通して学んだり，感じたりした「教師と児童の関係造りの大切さ」「授業計画に関すること」「教師の熱意」の3点を中心に教育哲学を述べる。 まず,はじめに「教師と児童の関係造りの大切さ」から述べていく。LEP の授業のはじめの頃は,多くの子どもたちが私たちを先生としてではなく,お兄さん,お姉さとして接していたように感じる。授業中に全く話を聞かなかったり,注意しても反省している態度を見せないこどもが多かった。しかし,あるきっかけ」でお兄さん,お姉さんの関係は「教師と児童の関係」に発展した。その「きっかけ」とは生徒指導であった。私がダンスの授業で説明している時に,悪ふざけをしている子どもに対して本気で叱ったことがあった。一瞬でクラス内が凍り付くのが自分でもわかった。今まで子どもたちに嫌われたくないという気持ちがあり,子どもたちを叱ったことはなかったが，その時初めて本気で子どもに生徒指導をすることができた。この後から LEP の子どもたちは先生が話している時,耳を傾けて聞いている子どもが多くなった。私は LEP の子どもたちが私たちを先生と見るようになった瞬間であったと感じている。今回,この関係を単元の早い段階で築いていると授業計画もスムーズに進み,もっといい発表会の演技が作れたと考えている。次の教育実習では早く「教師と児童の関係」を築けるようにしたい。 次に授業計画に関する内容を述べる。（中略）。そうすると以前よりも授業へ参加する態度が見られるようになり,マットやダンスを考えたり，教え合ったりするようになった。このようなことから,子どもが自ら考えたり,お互いに学びあったりするようになるには,ある程度の基礎固めが必要になってくることがわかった。これは,今回で言えば,教師がダンスの基礎パターンを与えることが,基礎固めにあたり,教師から与えられた基礎パターンを発展させたり,それから新たなパターンを創造することが,子どもが自ら考えたり,学びあったりすることになる。現場の先生が「子どもの能力はすごい！！」と言うのは,ある程度，基礎固めをし,そこから発展させたりしていく力を見てそのように言っているのだと考えるようになった。この経験から，基礎固めというものは体育だけに限らず，すべての教科に必要なことであると考えるようになった。これは勉強だけに言えることでなく人生において言えることではないだろうか。 最後に教師の熱意ということに関して述べる。この実践を通して,教師が授業を本気で考え,授業を本気でしなければ子どもは付いてこないことがわかった。「これくらいで大丈夫でしょ！！」「どうせ,まだ本物の教師じゃないんだし,こんなに考えなくていいか。」このような考え,気持ちで臨んだ授業は崩壊する。また,子どもは授業にのってこない。教師に「熱意」が感じられない場合,子どもも学んだり,授業に参加する態度は感じられない。この「熱意」とは先に述べた教師が授業を本気で考え,本気で授業することである。（中略）このことから,まず授業で必要なことは,今もっている力で,考えて,考えて,考え抜くことが授業を計画する上で大切なことである。その考え抜くことが,教師の「熱意」につながり,子どもの前では本気で授業をすることに

		繋がるのである。そのような教師には,たとえ教授技術が低くとも,子どもたちは理解しようとして助けてくれる。
学生G（3年生）	教育とは，教師，同僚が力を合わせ，授業を通しながら地域，保護者と関わりながら子どもの人間性を育てていくものである。 「子ども」とは「芽」である 「教師」とは「光」である 「親」とは「水」である 「授業」とは「肥やし」である 「教育」とは「土」である	教育を行う段階で，授業をするに従い，教師間（同僚）の絆が深まるのではないかと私は感じる。一緒に授業を作っていく中で，どうしたら子どもたちの為になるのか，どうすれば子どもたちは理解しやすいのかを試行錯誤し意見を出し合うことで，教師の同僚性が高まってくるからである。また，授業は一人ではできないので，どうしても教師間のコミュニケーション，連携をとることが重要になってくる。教育をすることにより，教師間の信頼性が高まるということが言えるだろう。 教育と地域（保護者）に対して私は，この関係性が非常に重要になってくるのだと考える。なぜならば，学校や教師がどういったねらい，または目的を持って子どもたちに教育しているのかを保護者やその地域に理解してもらうことで，さらに子どもたちに学ぶ意欲が増すのではないかと思うからである。それは，保護者らの意識が学校に重点をおき，学校の教育に対して参加姿勢を示すことにより，子どもたちへの働きかけが生まれるからである。そのことにより，子どもたちは家庭と学校での学ぶというねらいが一致し，よりよい環境ができるのではないかと考える。 子どもたちは無限の可能性を秘めている。その発達段階の中で，どれほどその子どもたちにとって，良い環境を準備することができるか，また，子どもそれぞれに対して良い教育をすることが重要になってくる。教師は教育を行うということは，その子どもたちの未来を左右する力を持っているということを自覚し，考え，行動していくべきである。教師にとって子どもたちの成長は何よりも嬉しいことであり，喜びであり，目標であるということをいつまでも忘れずに，教育に対していつまでも貪欲であってほしいと私は考える。
学生H（2年生）	教育とはいったい何のために行われるものなのか。教育実践も未だろくに経験しておらず，未熟者の私であるがこのことに関して，今現在感じていることを論じてみたいと思う。 教育のとらえ方に関して私は2通りの考え方があると思う。一つは子どもにさまざまなことを直接経験させ，その事に関して子ども達がそれぞれ自分の意見をもちつつ，様々な教養を身につけていくという考え方である。これはいわゆる敗戦直後に日本に取り入れられた J・デューイが提唱した経験主義に基づく教育というものである。もう一つの考え方は子ども達が直接体験する機会をなくし，おおくの専門知識を伝える系統主義というものである。この考え方には子ども達のものごとを直接体験する機会をなくす一方，その分時間ができるので学力があがるというメリットがある。この考え方は日本においては高度経済成長期に主に取り入れられたもので，この方針のもと日本は世界でもトップクラスの学力を手に入れることに成功した。この2つの考え方にはそれぞれ長所と短所があるが，はたしてこれからの教育にはどちらの教育がより適切なものだといるだろうか。このことに関して私が経験したことをふまえて考えてみたい。	私は前回の教育哲学のフォートマットにおいて，系統主義による教育実践を否定し，経験主義に基づく教育実践を提唱した。なぜなら子どもの成長に大きな役割を果たしていた地域という場が，今日では少なくなってきており，その場を子どもに提供できるのはもはや学校くらいではないか，と考えていたからである。この考えは頭ではわかってはいたが，どうも実感がわかず手応えのようなものを感じることができなかった。しかし今回のFPSS（フルピーススポーツスクール）を通しての経験は，このことが一体どういうことなのか，私に分からせてくれた。 私達の担当したクラスで，ピラミッドの練習をしていた時のことである。4段のピラミッドを授業の時間内に作ろうとしたのだが，予想以上に難度が難しかったらしく，結局その時間内には完成することができなかった。しかしその授業内で，私は面白い場面を見ることができた。子ども達はピラミッドを完成させようと必死になり，子供同士でさまざまなアイディアを出し合い，みんなで協力して活動していたのだ。どの子の表情も活き活きとしており，とても楽しそうで，見ている私も楽しかった。さらに驚くべきことが次の授業の時間に起こった。なんと子ども達はどうしたらピラミッドが上手くできるか，授業の時間外に自主的に考え，新たなピラミッド体系を考えてきていたのである。その子ども達の努力のおかげで，本番の発表会では見事なピラミッドを完成させることができた。このときの授業では，体育の技術の習得はもちろんであるが，それ以上のものを子ども達は得ることができたのではないだろうか。それは，自らの考えを固め表現するということ，自主的に学習するということ，そして友達と協力することの重要性などである。このことは他人とのコミュニケーションという経験をする場があってこそ得られるものであり，かつて地域がその役割を大きく担っていたものと同質のものである。知識のみの伝達を目的とする系統主義による実践では，このようなことはけっしてできず，そのことを考えてもこれからの教育のスタイルは，経験主義によるものでなければならないと，改めて実感することができたのであった。 （中略） 経験主義に基づく教育，そして教師が子どもにかかわることの意義をこのFPSSを通して実感することができた。またそれとともに子どもに対して背を向けず真正面からぶつかっていくことの重要性も理解することができた。このようなことは将来教員を目指す私にとって大きな財産になるだろう。しかしこのFPSSを通して学んだことはこれだけではない。 このFPSSという活動は決して楽なものではなかった。授業が上手く進

		行できないことに悩んだり，子どものモチベーションの低さに頭を抱えた日もあった。特に発表会前や，事後報告会前には徹夜の日々が続いた。正直一人きりで乗り切るにはとても困難なものであったに違いない。しかしこの厳しいFPSSを乗り越えることができたのは，いい仲間に恵まれたからだと思う。それぞれが与えられた役割をきちっとこなし，困った時はそれぞれ助け合い，そしてなにより仲がよく，一緒に活動して楽しかったということがあったからこそ，FPSSという難題を何とか乗り越えることができたのだと思う。同じ難題に立ち向かった仲間に感謝したい。またこのことは教師として学校現場でもつながるものがあると思う。つまり教師同士の連携がしっかりしている学校では，さまざまな問題を多くの教師が共有し，学校全体で協力して問題の解決にあたり，そしてよりよい解決策を練ることができる，という風にである。よりよい教育を子ども達に提供するためには教師自体がよりよい環境に身をおくということが，重要なのである。 教師の仲がよい学校ではその雰囲気が伝達し，子ども達ものびのびと学校生活をおくる事ができるであろう。なぜならそのような学校では子どもと教師の関わりが密接なはずであり，子どもと教師が互いに学びあいながら成長することができるからである。そのような学校こそが本当に理想的な学校なのだ，と言えるのではないのだろうか。
学生Ⅰ（1年生）	・教師同士で授業観察をしあったり，悩みを打ち明けあったりしてお互いを高めあう。 自分ひとりで悩みを抱え込んだり，自分の授業に自信がないと，生徒も不安になってしまう。 ・子どもは正しいことを知る権利があるから，あやふやなことは教えない。また，わからなかったり間違ったら素直にそのことを告げ，すぐに辞書や本で確認をとる。 ・地域の人々は登下校時に生徒の安全を見守るなどして，地域ぐるみで子ども達を守ってほしい。 地域の人たちが学校に出向き，子ども達に自分達の仕事やその地域の昔や移り変わってきた様子を聞かせたりして，子どもの教育に関わっていくべき。	**1.教師間の連携の大切さ** 何人かの教師で一緒に教えるとき，教師は全員，共通の考えを持っていないといけない。こっちではこう言う教師がいて，あっちではああ言う教師がいると，子どもたちは戸惑ってしまう。また年齢や経験に関係なく自分の意見を言ったり仲間の意見を聞いたりすることも大事。いろんな意見を言い合うことでお互いを高め合うことができる。年下だから，新任だからと遠慮することはないし，年上だから，ベテランだからと胡坐をかいてもいけない。常になんでも吸収できるようにしておく。 **2. 授業の準備・打ち合わせは納得が行くまで** 授業の準備を怠ってはいけない。TT でやるのなら，1. にもあるように教師全員が授業での役割を把握しておく必要がある。把握がうまくされていないと，子どもの前で確認する羽目になり，授業を中断しかねない。また教師がわからないことは生徒も分からない。T1 の教師の考えを自分でしっかり消化できるまで何度も確認することが大事。学芸会や運動会などの行事で，子どもの立ち位置や動きを教えるときなどに必要。 **3. 子どもとの関わり方** 今の私は大学生だが，小学生の前に立てば彼らの教師である。しっかり注意すべきところは注意し，けじめをつけなければならない。嫌われるとか考えない。どの子にも，同じ態度で同じ考えを持って向かえば，わかってくれる。 **4. 決めたことは守る** 子供たちに話すたびに言うことを変えてはいけない。時と場合によって言うことがころころ変わらないように，常に心の中に最初に決めた考えを持ち続けたい。また，児童との約束ごともすぐ変更しない。1 度決定しても様子を見て子どもたちと話し合った上で変えていく。 **5. 子どもたちに考えさせて作品をつくる** 教師側が子どもに作らせる部分を残して，ある程度作ったあとに子どもたちに考えさせる。逆に，子どもたちに作らせたあと，教師が調整する。どちらでもいいが，教師が少し手を加えていたらうまくまとまった作品にすることができたのではないかと思う場面があった。 **6. 余裕を持って取り組む** 授業の用意をするとき，いろいろ想定するが，それがうまくいかない時が多々ある。時間が余ってしまったり，グッドアイデアだと思っていたものが，思いのほかうけなかったり。授業で子どもたちの様子を見て臨機応変に対応できる余裕もつくっておく。また他の案も用意しておくことも大事。1 つの考えだけに固執してはだめ。 **7. 児童に対する話し方** 「～して下さい」って何度も使ってしまった。何でお願いしないといけないのか。「～します」という風に，言い切ればいいのに。説明もながながとだらだらとしてしまうと，子どもたちの集中力が切れてしまうので，短く簡潔にポイントを押さえて話す。

表 11　学生のリフレクション・シートに記載された数値の総合得点表

能力項目	ユーザID 学年	s0010001 4年	s0010002 4年	s0010004 4年	s0010005 4年	s0010007 3年	s0010010 2年	s0010011 1年
社会性や対人関係能力	コミュニケーション(100点換算)	73.7	55.1	65.7	46.3	56.6	44.3	41.4
	コミュニケーション(自己評価)	3.8	3.3	3.9	3.4	3.6	2.9	2.9
	コミュニケーション(学生評価)	5.4	4.1	4.6	3.8	4.6	3.1	3.3
	コミュニケーション(教員評価)	5.1	3.8	4.6	3.1	3.8	3.1	2.8
	コミュニケーション(教員評定)	A	C	B	C	C	C	D
	協働性(100点換算)	72.6	59.4	60.6	46	60.6	50.9	46.3
	協働性(自己評価)	3.4	3.3	3.8	3.7	3.4	3.1	3.1
	協働性(学生評価)	5.4	4.4	4.8	3.7	4.8	3.4	3.4
	協働性(教員評価)	5	4.1	4.1	3.1	4.1	3.6	3.2
	協働性(教員評定)	A	B	B	C	B	C	C
Factor Basic 教職としての	教育的愛情(100点換算)	65.7	58.9	58.3	48.3	63.4	48.9	50.9
	教育的愛情(自己評価)	2.7	3.5	3.3	4	3.5	2.8	3
	教育的愛情(学生評価)	4.6	4.6	4.4	3.7	5	3.9	3.4
	教育的愛情(教員評価)	4.6	4	4	3.3	4.3	3.3	3.6
	教育的愛情(教員評定)	B	B	B	C	B	C	C
	使命感や責任感(100点換算)	75.1	60	59.1	48.6	60.6	48.3	48.3
	使命感や責任感(自己評価)	3.5	3	3.8	3.9	3.6	2.8	2.6
	使命感や責任感(学生評価)	5.5	4.6	4.7	3.8	5.2	3.3	3.3
	使命感や責任感(教員評価)	5.2	4.1	4	3.3	4	3.4	3.4
	使命感や責任感(教員評定)	A	B	B	C	B	C	C
教科内容等の指導力	教材内容の工夫(100点換算)	66	58	56.3	45.4	53.1	46.9	45.7
	教材内容の工夫(自己評価)	2.4	2.5	3	3.3	2.1	1.8	1.3
	教材内容の工夫(学生評価)	3.9	4.3	3.7	3.1	4.6	3.2	2.8
	教材内容の工夫(教員評価)	4.8	4	4	3.2	3.5	3.3	3.3
	教材内容の工夫(教員評定)	B	B	B	C	C	C	C
	計画・指導・評価スキル(100点換算)	56.3	52.6	50.6	45.4	53.1	42.6	38
	計画・指導・評価スキル(自己評価)	2.4	2.5	2.1	3.1	2.4	1.7	1.3
	計画・指導・評価スキル(学生評価)	3.7	3.2	3.3	3.1	4.6	2.9	2.1
	計画・指導・評価スキル(教員評価)	4	3.8	3.6	3.2	3.5	3	2.8
	計画・指導・評価スキル(教員評定)	B	C	C	C	C	C	D
子ども理解と学級経営等の能力	子どもの実態把握(100点換算)	52.9	58.3	53.1	48.9	57.4	44.3	42
	子どもの実態把握(自己評価)	2.4	3.3	2.9	3.4	2.9	2.2	3.1
	子どもの実態把握(学生評価)	4.1	4.4	3.4	3.9	4.9	3.5	2.7
	子どもの実態把握(教員評価)	3.6	4	3.8	3.3	3.8	3	3
	子どもの実態把握(教員評定)	C	B	C	C	C	C	C
	集団の掌握(100点換算)	55.4	51.4	55.7	41.7	59.7	40.9	41.1
	集団の掌握(自己評価)	3	2.8	2.6	3.3	2.7	1.8	2
	集団の掌握(学生評価)	4.2	3.6	3.5	3.4	4.9	3.1	2.4
	集団の掌握(教員評価)	3.8	3.6	4	2.8	4	2.8	3
	集団の掌握(教員評定)	C	C	B	D	B	D	C
	PS結果平均(自己評価)	3.0	3.0	3.2	3.5	3.0	2.4	2.4
	PS結果平均(学生評価)	4.6	4.2	4.1	3.6	4.8	3.3	2.9
	PS結果平均(教員評価)	4.5	3.9	4.0	3.2	3.9	3.2	3.1
	PS結果平均(教員評定)	B	C	B	C	C	C	C

第４節　まとめと課題

最後に，FPSS の頭文字を活用してまとめと課題を述べたい。

第１に，①Friendship（友情）である。FPSS の構成メンバーの特性として，異学年および多専攻ということが，逆に教師としての「同僚性」を構築させ，社会性や対人関係能力を育成したと思われる。また，大学教員や小学校の現職教員とのつながりもあり，幅広い人間関係の中で PS を実践した点に大きな収穫があったと考えられる。さらに，大学教員においても教科教育と教科専門の教員の協力体制があってこそ成功できたと思っている。加えて，スーパーバイザーとして，大学院生を活用したり退職した教員を雇ったりすることで，一定の大学教員への負担減あるいは経験豊富な知識や技能を学生に還元できるようなシステムの構築も必要であると考える。

第２に，②Professional（専門性）である。従来の教員養成系大学・学部でのカリキュラムの限界としては，

教科指導の一側面を模擬授業や教育実習で習得させるのが精一杯であったように思われる。しかしながら，PS を通して大単元での授業実践に加えて，最終的な評価まで実践することで，教育実習では形成しにくかった教員としての資質能力を育成できたと考えられる。

第３に，③Stress（ストレス）である。学生自身で０から模擬学校を企画・運営するということで，予測していたよりも遥かに多くの時間を費やした（100 時間は越えていた）。そもそも２単位という枠組み内での必修科目が前提であり，この点におけるカリキュラムの工夫等が求められる。さらに，簡便化された評価システムを構築したが，それも毎回の評価に要する時間は１回につき 30 分～40 分は要した。加えて，学生間や教員間の評価のズレも今後検討する必要性がある。なお，４年生だけに卒業論文との兼ね合いも大きな課題である。

最後に，④Special（特別な）である。本モデル事業の学生は，比較的意欲の高い学生が参加していた。したがって，将来的にはそうでない学生たちが参加した際のトラブルや指導・支援の体制も必要であると思われる。

＜注＞

「TP」とは，教師の教育実践の履歴を記録するとともに，その効果がどうであったかを子どもの学習サンプルによって実証し，反省によって，さらなる授業改善や授業力量形成を目指す道具である（Shulman, 1994）。すでに米国においては，現職教師や教職志望学生の「実践的指導力」を示すために作成する「TP」として活用している。またそれらを活用した結果，実習生らの反省的実践（リフレクション能力）への志向を高め（Wade et al., 1996），さらに教員養成カリキュラムでの成績判定や教員資格修得までの基礎資料として利用されている（Dollase, 1996）との報告がある。なお，下記の**写真２**は，実際に FPSS で使用した TP である。

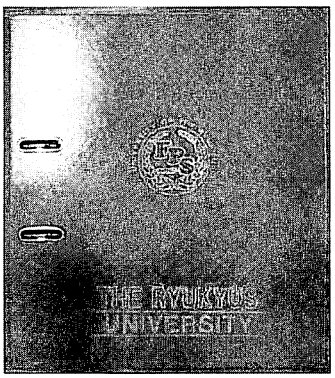


写真２　FPSS のティーチング・ポートフォリオ

（岩田昌太郎、笹澤吉明、小林稔、大村朝永）

第４章　「食べごと学校」の実践

第１節　学校の概要

プラクティススクールの中でも「食」に関する学校をつくりたい学生が13名集まった。その13人で「食べごと学校」と命名し，学校のコンセプトや学校目標を設定した。

(1) 食べごと学校とは

「食べごと」とは，食べることに関する様々な事柄のことをいう。食べ物だけではないことから，食べごととした。食べごと学校は，私たちの生活の中にある食べごとを取り上げ，実践・体験する授業を展開する学校とした。

(2) 学校目標及びキーワード

コンセプトとして考えられたキーワード，それらをもとに設定した学校目標は以下のとおりである。

キーワード：工夫，自然，文化，色，沖縄，体験，ゆっくり味わう，楽しむ
学校目標：食べることに関連する多面的な実践・体験をゆっくり味わうことを通して，日々の営みの中にある沖縄の自然や文化にふれ，工夫する楽しさを発見し，生活を大切にする態度を育てる。

(3) 対象及び実施場所，時間

対象：太陽学童の児童（小学校1～6年生）30～35人

「太陽学童」とは・・学童保育であり，異年齢の子どもたちが放課後の時間を過ごす場である。そこでは「共生，生活，労働･･･」等を大切に，子どもが「共に遊び，笑い，けんかしたりしながら豊かな経験を通じ，一人ひとりの子どもの居場所を見守っていける“場づくり”」が目指されている。（参考：「太陽学童」案内）

場所：太陽学童の屋内及び屋外スペース

時間：月曜日

【実践日の主な活動と時間】

15:00～　　**授業直前ミーティング（@大学）**
15:30～　　**準備・移動（徒歩で学童へ）**
　　太陽学童へ到着，会場設営
16:30～18:00　**授業（@太陽学童）**
　　～18:30　**片付け・移動**
　　～19:00　**授業反省会（@大学）**

第２節　実践の様子

（1）事前会議について

学校の様々なことを決め運営していくために，3回の事前会議を開いた。各回の開催日，内容は次のとおりである。

1）第1回会議（2007年8月26日）

第1回会議では，学生の顔合わせ，講義(教職実践演習)の評価及び進め方の説明，学校の名称･目標・コンセプトの決定，対象の選定，授業内容の提案及び指導計画の立案，教員グループ作り，校務分掌の割り当て等を行い，学校の基本的なことを決定した。

2）第2回会議（2007年9月15日）

第2回会議では，第1回会議後行なった太陽学童との顔合わせ・話合いについての報告，各グループ

による授業案の発表等がなされ，より具体的な実践の計画を行っていった。

3）第3回会議（2007年10月9日）

第3回会議では具体的な指導計画が立てられ，各授業の指導案の検討を全体で行った。

（2）授業内容の検討・教材研究について

授業は教員が3名1グループのグループ単位で教材研究を行い，授業者となることを決定した。

主な授業内容の検討・教材研究として次のようなことを行った。まず学童の指導員の方との授業打ち合わせを通して得られたアドバイスを授業作りに活かした。さらに授業後に授業者が学童の指導員から授業の感想・アドバイスを伺い，それをすぐ後に大学で開かれる授業反省会の中で報告･伝達することによって，それが次回の授業に生かされ授業全体の改善へとつながった。また個々人が専門家から知識や技術を学んだり，大学において教材研究を繰り返すことで授業内容の検討・教材研究を行なった。

（3）各回の授業実践について

各回の授業の題材名及び題材の目標を下表に示す。また、学習指導案、授業の振り返りシートを、（紙幅の都合上、第一回授業のもののみ）次頁に示す。

（4）修了式について

最後の授業が終了した2週間後に太陽学童で修了式を行なった。校長挨拶，児童挨拶を含む式次第のもとに進行され，手作りの修了証書及び記念品，子どもたちの作品を手渡した。

全7回の授業について、題材名・題材の目標等を表に示す。なお、第1回授業の学習指導案及び授業後の振り返りを次ページに示す。

回	月日	題材名・題材の目標	授業者
1	10/15	【たまねぎ染めのランチョンマット作り】 ※ p. 26 に学習指導案および授業後の振り返りを示す。	4 グループ
2	10/24	【お皿をつくろう】 ・陶土からお皿ができる過程を通し、ものづくりの楽しさを実感できる。 ・グループで協力しながら、世界に一つだけのお皿作りを楽しむことができる。	3 グループ
3	11/05	【沖縄のお菓子作り・お皿作り（2）】 ・沖縄の伝統的なお菓子について知る。 ・積極的にお菓子作りに参加し、楽しむことができる。 ・片づけまでグループで協力することができる。 ※「お皿作り（2）」の題材の目標は前回と同様	3・4 グループ
4	11/12	【漬物を作ろう】 ・漬物のことを知って関心を持ち、調理することの楽しさを味わう。 ・安全面、衛生面に気をつけ、協力して調理することができる。 ・時間を掛けてつくるという過程まで楽しみながら漬物を作ることができる。	2 グループ
5	11/19	【紅芋パイをつくろう】 ・ふかして紅芋をつぶす、形を整えて川に包むという簡単な調理に挑戦する。 ・グループで楽しみながら餃子の皮で紅芋パイを作ることができる。 ・沖縄の伝統的な食材である「紅芋」に興味を持つ。	1 グループ
6	11/26	【おにぎりをつくろう】 ・おにぎりを自分の手で握ることで手作りを実感する。 ・衛生面に気をつけ、漬物を切ってご飯に混ぜたり、握るという工夫を楽しむことができる。 ・漬物の変化に気づく。	2 グループ
7	12/03	【沖縄そばをつくろう】 ・沖縄そばづくりを通して沖縄の文化について興味・関心を持つことができる。 ・仲間と協力し、安全に気をつけて楽しく調理することができる。	1 グループ

プラクティススクール学習指導案

日時　平成１９年１０月１５日（月）

授業者　井上麻衣子　伊良皆真子　小林進也

１，題材名　　たまねぎ染めのランチョンマット作り

２，題材の目標

①たまねぎ染めについて，興味を持つことが出来る。

②たまねぎ染めに積極的に参加することが出来る。

③作ったランチョンマットを生活の中に活かすこと出来る。

３，本時の展開（授業実践９０分・片づけ３０分）

	児童の活動	教師の支援	教材・教具
導入	・たまねぎ，月桃，さとうきびで布を染めることができることを知る。	・たまねぎ，月桃，さとうきびで染めたランチョンマットを提示する。（５分）	・草木染めの布 ・たまねぎ ・月桃
展開	・たまねぎ染めの順番を知る。 ・グループに分かれる。 ・たまねぎ染めをする。 ・実践【７５分】 ①　布を輪ゴムでしばる。（１３分） ②　全体を水で濡らす。（２分） ③　布をたまねぎ液で煮る。（１５分） ④　水洗い（５分） ⑤媒染液につける。（１０分） ＊　アルミ媒染　（黄色） ＊　銅媒染　（茶色） ⑥水洗い（５分） ⑦たまねぎ液につける。（１５分） ⑧水洗い（５分） ⑨絞って干す（５分）	・たまねぎ染めの方法を説明する。（８分） ＊輪ゴムでの絞り方の説明 ＊染める順番の説明 ◎薬品と火を使うので安全面の指導をする。 ・実際にたまねぎ液を煮出し，見せる。 （事前にお湯を沸かしておいて，ここでは見本の分だけとる） ・進行把握カードを配布する。 ・グループが協力して活動できるように声をかけながら支援する。 ・待ち時間は児童が交互に混ぜる行程に参加させ，現在行っている作業の補足説明を行う。 ・火の周りで，走ったり，ふざけることがないように注意する。	・たまねぎ ・ランチョンマット ・ホーロー鍋 ・薬品（媒染） ・輪ゴム ・お箸 ・トング ・タライ ・ぞうきん ・ＩＨコンロ ・ガスコンロ ・食器用洗剤 ・スポンジ ・延長コード ・進行把握カード
まとめ	・たまねぎ染めをしての感想 ・みんなで協力して片づけを行う。	・たまねぎ染めの感想を記入させる（２分） ・片づけ（３０分）	

４．授業の振り返り

授業名：たまねぎ染めのランチョンマット作り		参加児童数：３１名
実施日： 2007年１０月１５日（月）	実施場所： 太陽学童（　学童の庭　）	実施時の天候：晴れ
授業者：井上麻衣子　伊良皆真子　小林進也		
時間経過：14：30　３２４教室で打ち合わせ／15：00 太陽学童にて準備／15：30 最終打ち合わせ／16：00 開校式／16：15 授業開始／18：00 片付け／19：00～20：00 反省会		
授業内容に関して		
（良かった点・工夫した点） ・児童が全員積極的に参加した。 ・全教師に協力をお願いしたことで活動がスムーズに進行した。 ・廃棄になる玉ねぎの皮を染料に使用したこと。	（反省点・課題･改善策） ・火を使用する場所が狭く，児童が密集していたことが危険だったので，次回から空間を有効的に使い，作業動線を短くしたい。 ・待ち時間に個人の遊びをしている児童が多かったので，空き時間に別の作業を入れるなどきちんとやることを示せばよかった。	
教材研究･事前準備に関して		
（良かった点・工夫した点） ・染めもの教室に一度訪れ，月桃・玉ねぎ染めを体験し，専門家の方に相談し，アドバイスを頂いた。 ・小学校低学年に対応し，ランチョンマットの縫いしろのしまつを事前に行った。 ・時間内に授業を終わらせるために，事前に染色液を抽出した。	（反省点・課題・改善策） ・媒染剤の種類によって，色が変化する原理を調べていなくて，知識が不十分であった。 ・他の草木染めに関しても，資料を準備する予定であったが，準備できなかった。	
（授業作り/授業実践を通して感じた授業（プラクティススクール）への要望･意見･感想） ・教材研究を抜いても，実践の時間が少し長いと感じた。 ・評価の方法に時間がかかる。 ・買い物の方法が不便に感じた。事前に買い物のしくみや使えるお店が知りたかった。		

第３節　成果と課題

実践を全て終えた後，2007 年 12 月 17 日に最終職員会議を開いた。会議では，教職実践演習「食べごと学校」の実践の良かった点・反省点・改善策・課題について話し合った。授業の実践及び教材研究に関することは，Ⅳの各々の感想の中に述べられているため，ここでは全体に関わることについて記す。

（１）学校の運営に関して

授業にかかわる授業研究会と学校運営にかかわる職員会議の位置づけがきちんと行なわれていなかった。これは，この実践が模擬学校なのか模擬授業なのかということにもつながる課題であり，今後検討が必要である。また，各教員が学校の主体という意識を持って学校づくり，校務分掌に当たる必要がある。未経験の校務分掌をどのように把握するかの方策が求められる。

さらに，他の学校との情報交換の場を設けることが，より良い学校運営のために必要ではないだろうか。

（２）評価について

事前会議及び授業実践後には毎回，リフレクションシートを使用した自己評価，他者評価を行った。これら評価は，教員や他の学生から評価を受けることによって，自己評価と他者評価の相違について知ることができたこと，また自分に足りない力を知ることができ，今後どう改善するのかを考えるきっかけとなった。またレーダーチャートによる表示によって自分の受けた評価を視覚的に見ることができ，よりわかりやすく知ることができた。さらに総合リフレクションは，自分自身の変化を知るのに役立つものだった。しかし一方で，デジタルペンを用いた評価の入力は，機器の不都合等が発生した際にデータ送信のための時間や労力がかかり負担となること。またそのような際には，評価に関する作業が滞ってしまうことなどの課題があげられた。今回のリフレクションシートの項目自体は，上述したように，自分自身の課題を把握でき授業実践における指導の工夫にも役立つものだったため，より使いやすく確実に行なわれるような評価方法の改善の必要性を感じた。

（３）実施時期について

４年次後期という時期は卒業論文や就職活動などがあり，プラクティススクールに充分に打ち込む時間の確保ができなかった。また，思いのほか教材研究，授業時間，会議等に時間がかかる。内容について充分研究できる先行科目が必要であると感じる。さらに，今回はプラクティススクールが学期をまたがる形でスタートしたが，今後は事前会議等も含めて同一学期内で実施されることが求められる。

第４節　実践を終えての学生の感想

学生がまとめた，教職実践演習・食べごと学校を通して得たこと，感想，課題等を添付する。

（学籍番号順）

「プラクティススクールの成功のために」

０４２１０５Ｈ国語教育専修

小林進也

私がプラクティススクールに参加した理由は「小学生と関わってみたい」という安直な理由からでした。実際に参加してみて指導案を書いたり，学校運営のため校務分掌があったりと思ってもみないことがたくさんありました。私の校務分掌は機器担当だったのですが，連携など不十分だったため，反省点のひとつです。今回私たち「食べごと学校」は大学付近にある太陽学童で学校を開いていました。学童でやるメリットとして小学校１年生から６年生まで指導できたという点です。発達段階ごとの指導を考えさせられるなど良い経験になりました。また，低学年への指導を高学年の児童が行ってくれる場面があるなど，授業をしやすい場面もありました。デメリットとして学童という場の使い方がとても難しかったように思いま

す。学校という場では差こそあれど，最低限の施設がありますが，学童では家庭科の授業をするような環境があるはずもなく，授業ができる場の設定が困難でした。私たちの授業ではチンビンを焼くためにホットプレートを用いたのですが，ブレーカーが落ちてしまうなどの事態が起きました。黒板などもないため，他の授業でも同じようなことが言えると考えられます。

「食べごと学校」は私以外の学生が家政科の女性という特殊な状況でした。国語科である私が何か良い意見を言えたらと思いましたが，むしろ学ぶことが多かったです。粘土から食器を作ったり，たまねぎ染めでランチョンマットを作ったりと，面白い発想の授業がたくさん見られました。また，包丁を使うときの安全面などは美術で工具を使うときの安全面などに通じていて，とても参考になりました。今後プラクティススクールがどのようなかたちになるのかは分かりませんが，家政科をメインとした学校に所属したことで，私はたくさんのことが学べました。

評価に関しては様々な意見がありましたが，適切だったように思います。特に自分の評価と他者からの評価が項目ごとにはっきりとわかるのが良かったです。普段自分の授業がどのように思われているか分からないことが多いので，低い項目がはっきり分かると頑張ろうという気力が起こりました。途中デジタルペンの調子が悪くなったのが残念でしたが。

私は国語科と数学科の「コックさん学校」のカメラ係も兼任していて，最初から最後まで彼らの授業や活動を見ていました。「コックさん学校」でもっとも良かったところは保護者だよりを作って，保護者の方々の意見を毎週聞いていたことです。これは他の学校ではやっていないことでした。保護者の意見で「普段学校のことを話さない子どもが家でコックさん学校の話をしている。」「違う学校の友達ができたと喜んで話している。」など学生のやる気がでる意見や参考になる意見が聞けていました。最後のアンケートでは「弟が『次は僕の番だ！』と言っている。来年も是非やってほしい。」などの意見があり，「コックさん学校」の成功が感じ取れました。

私たちの「食べごと学校」では最後の終了式で，普段やんちゃな児童も涙ぐんで賞状をもらっていました。その児童は「今日だけなぜか感動しちゃった。」と嘯いていましたが，その場面を見て私自身プラクティススクールをやっていて良かったと思いました。今後，プラクティススクールは教員免許のための必修科目になるのかもしれませんが，参加する学生は免許のために参加するのではなく，児童や運営する学校の成功のために参加してもらいたいです。その気持ちがないとこのプラクティススクールを突破することができないと思います。私も授業の失敗などで投げやりになった時期がありましたが，児童や仲間のために頑張ろうという気持ちで最後まで乗り切ることができました。この気持ちや経験，仲間や先生から受けた評価やコメントは必ずや将来の糧になると思っています。

プラクティススクール～「食べごと学校」を通して～

042501A　石川ふじの

●○授業を通して学んだこと○●

この授業を通して学んだことは，まず１つめに教材研究の取り組みについて。子ども達の興味関心を惹くためには試行の繰り返しや工夫が必要であることを自分の授業や他の人の授業を通して学んだ。教材研究が密に行われていたグループの授業ほど子ども達の反応や様子が違っていたと思う。また低学年の子ども達に合わせた言葉の使い方や説明の仕方，みぶりや顔の表情などができる力が中学生や高校生の授業であっても惹きつけるという点で必要となると思った。２つめに，授業をつくるためには他の教師や先輩の先生方（太陽学童の指導員の方や大学の先生方）とのコミュニケーションが重要であること。これは教育実習の時よりも教材の準備や評価，反省の時点で周りとの関わりを多くとることができたため強く感じ

た。自分たちで授業を作り出す時に意見を出し合ったり，先生方のアドバイスをいただいたりすることによって改善されて次に活かせることを実感した。３つめに，他者からの評価や自分の評価を比べたため足りない力を確認できたこと。今回のように点数で評価され，レーダーチャートで確認できることは初めてだったので自分がどこに力を入れたらいいのかはっきりわかった。実際に現場に出た経験が少ないため，現場に出た時にもっと必要となる力がはっきりわからなくて自分ができているのか評価できないところもあった。でもその点を，

現場で経験してきた先生方に評価されることで確認できたと思う。授業を良くしたり自分自身を改善するためには，評価者が常にいなくても客観的に自分を評価する力が必要であることを学んだ。

●○私自身の変化○●

初めの頃は小学生でしかも個性を自由にアピールしてくる子ども達にどう対応した方がいいのかとまどったが，慣れていくうちに一人ひとりへの対応の仕方があることに気づいた。個性に気づいたり，それに合わせて接したりすることができるようになったと思う。また評価をみて足りていなかった集団の把握について意識して取り組んだため，個々に対応しながら全体をみるということが少しずつできるようになったと思う。評価をするということについては自分の評価と他者からの評価が徐々に一致してきたので自分を客観的にみることができるようになったし，この作業が自分にとってプラスになったと思う。

●○課題○●

私の課題は授業時に子ども達を惹きつける力を身につけること。話し方や説明の仕方，みぶりてぶりや表情などができると，楽しい授業につながると思う。またそのために授業づくりにおいて改善策や新しい視点で考えて工夫する力も身につけたい。集団を相手にする時の全体をみること，実習においては安全や衛生が重視されるため全体を把握しながら毅然とした態度がとれるようになることが課題。

他の教師や先生方からのコミュニケーションをもっと積極的にすること，他の人とコミュニケーションをとる時の態度や相手の気持ちを考えながら意見交換をする等の関わり方を上手にできるようになること。学校としての活動で校務分掌があったが，その役割を果せなかったこと。仕事内容の把握と自分から進んで仕事を探すなど責任感をもって取り組むこと。

教職実践演習における模擬学校の実践を通して

042502J　伊集章子

私はこの模擬学校に校長として取り組んだ。そのため学校の企画や運営面で動くことや模擬学校の代表やまとめる役としての仕事を多く経験することができた。また今回，他の学生のように教材研究をしたり指導案を書いたり，授業を行なうことがなかったために，校長の仕事である学校全体に関することを進めたり教員が授業をしやすい環境づくりに努めた。今回の模擬学校の取り組みを通して感じたことをまとめる。

1，授業を通して学んだこと

取り組みを経験して学んだことは多々ある。今回の実践の場が学童であったため，始め学童へ依頼に行くことや授業計画等の調整，その他様々な点で連絡や調整の必要な場面があった。実践の内容やこちらの意図することを相手に的確に伝え，理解･協力してもらうこと。また，相手の都合や方針を尊重しながら話しを進めていくこと。実践期間中でも相互の理解が一致するように連絡や確認をこまめに行うことと等，学校外の方々に協力していただいて授業を行なう際の配慮点に気づくことができた。

また，太陽学童という学童の取り組みの場から学んだことが多かった。学童は子どもたち教育の場であると同時に生活の場という要素がとても大きい。そこに私たちが学校としての価値観をもって入っていた

際に様々な違和感が感じられ，そこから学校という場の特殊性に気づくことができた。

そして授業の前後にいただく学童の指導員の方からのアドバイスからは，本物を体験すること（子どもに体験させること）の大切さ，子どもとのかかわり方など，家庭科の教員を目指す上でとても重要なことを学ぶことができた。

２，授業を通しての私の変化

校長としてこの学校に関わる中で，全体をまとめること，学校外の人との連絡・調整，先を見通して計画することなど，今まで経験したことのないことを最後までやり通す中で，自分自身の変化があったように思う。取り組みの中で責任感がもて，周りの協力を得られるようにすることや先のことを考えながら行動することの大切さに気づくことができた。また，集団をまとめて動かす側の立場を理解できたことも変化であると思う。

３，授業を通して感じた教師としての課題

実践の中では，自分自身の教師としての様々な課題が見えてきた。

まず授業の実践面でいえば，安全面・衛生面への配慮を基本に授業を組み立て，どのような対策ができるかという視点が足りないこと，集団でも個別でも目の前の子どもの状態を把握し臨機応変に対応できていないこと。その他，教員としての基本的な知識や技術，発想が不足していることに気づいた。また，授業中の子どもへの対応の仕方に困ることが多くあった。それは，授業中にふざけている子どもへの毅然とした態度であったり，授業に参加したくないという子への対応であったりである。

さらに学校の運営面で気づけた課題としては，運営の中心のところにいたという点で，参加しているみんなが主体となって学校づくりに参加できる雰囲気を作れなかったことがまずあげられる。それぞれが自分の役割を見つけ，それぞれの持っている力や発想を活かした学校運営ができれば，より良いものになったのではないかと思う。

また校長は学校全体を把握する役割でもあるため，一人ひとりのはたらきや努力を意識的に見つけ，全体へ伝えていける場面も設けられれば良かったと思う。

さらに自分自身の，先を見通して物事を進めていく計画性や相手にこちらの思うことをきちんと伝ええる力が充分でないことに気づいた。これからいろいろな経験を積み重ねる中で身に付けていきたいと思う。

そして今回学校運営面で経験したことは，学校での学級運営面の課題にもつながるであろう。教師が学級の中で全体を把握する，生徒がそれぞれの役割を見出して（初めの頃は“教師が与えて”），それぞれの力や発想をいかした学級をつくっていくという集団づくりの過程に，今回の反省点を改善して活かしていきたい。

今回の模擬学校の取り組みでは，教員として自分に足りない様々な資質や能力を実感することができた。また今まで経験したことのないことに挑戦することができた。それは今回，様々な面で協力できる学生同士が一緒に取り組めたこと，周りの先生方や学童の指導員の方々の理解と協力をいただき様々な支えのもとでできたことによって得られた経験である。その経験から，教員になった際にも周りとのつながりを大切にし，先輩方にもアドバイスをいただきながら教育実践に励んでいきたいと強く思った。

また，この「教職実践演習」の授業に関しては，22 日の発表会でも挙げられたように様々な課題も感じられた。しかしこの授業は，学生に貴重な体験の機会を与えるものだと思う。課題が改善され，さらによい形で授業化されればと思う。

「食べごと学校」から学んだこと

０４３５０３G　稲嶺 泰葉

８月末から１２月にかけて行ったプラクティススクールに，私は「食べごと学校」の一教員として参加した。「食べごと学校」は，“食べることの関することを学ぶ”学校である。私の専門である家庭科とも関連した内容の学校であり，より実践的な力を身につけるいい機会となった。私はこの，「食べごと学校」の運営を通し，様々なことを学んだ。ここからは，授業を通しての学び，私自身の変化，教師としての自身の課題について感想を述べたいと思う。

私たち「食べごと学校」は，授業の場を学童とした。小学校１年生から６年生までが放課後を過ごす場である学童に初めて伺った時，まず感じたことは小学生との対話の難しさである。初対面の私たちに対し，子ども達から積極的に声をかけてくれることなどまず無いので，こちらからコミュニケーションを深めるよう声かけを行わないといけないのだが，今まで小学生とほとんど接したことのない

私は，遊んでいる子ども達の中にどの様に入っていけばいいのか全く分からなかった。また，異年齢集団ということもあり，子どもの発達段階に応じ様々な対応が求められることを学んだ。授業を重ね，子ども達とも仲良くなると，ある程度のコミュニケーションを取ることができるようになったが，一人ひとりの発達段階・個性に応じた対応は今でも非常に難しいと感じ，今後の課題である。

毎回の授業が終わるたびに記入したリフレクションシートでは，自身の評価と他の学生の評価，教員評価の比較が行え，自分自身の改善すべき箇所が分かるようになっていた。私は大体は自己・学生・教員評価共に重なりを見せており，自身と他者の評価に一致が見られた。しかし，「集団の掌握」が毎回低い評価を受けていた。授業では授業者は全体を，その他の教員は担当するグループを中心に子ども達の指導を行ったが，始めのうちはグループ内の７名の子どもを見ることさえままならなかった。しかし，リフレクションシートの評価を受け，授業を行う際できるだけ子ども達全員へ目を向けようと心がけた。

このように，他者の目から評価されることで，自分では気付かなかったことについて発見したり，改善しようとする意識が生まれた。こういった指摘というのは，普段の生活で簡単に得られるもではなく，継続した評価を行うことで見えてきたものである。今回のリフレクションシートの評価は，そういった点でも大変参考となった。

プラクティススクール「食べごと学校」を通し，私は多くのことを学び，自身の課題を発見できた。まだまだ未熟な点ばかりであるが，子供たちと接する中で，改めて子どもと関わることの楽しさに気付くことができた。教師としての資質・能力が形成されたか，より実践的な力を身につけたかどうか，というプラクティススクールの目標が達成されたか定かではないが，教師になりたいかという気持ちを再確認し，様々経験を通し成長できたと感じる。施行段階である今回のプラクティススクールの成果を活かし，今後更にすばらしい学校が生まれ，学生が教員として楽しく活動できることを期待する。

『プラクティススクール　～食べごと学校～　を終えて』

０４２５０４Ｅ　井上麻衣子

①授業を通して学んだこと

授業全体を通して一番学んだことは，今の小学生の実態です。今まで小学生に対して授業などをしたことがなかったので，とても良い経験になりました。実際予想していたよりも小学生は素直で可愛いと感じました。しかしそれと同時に，集団になった時のおしゃべりや，騒いでなかなか静まらない元気の良さにも圧倒されました。また，子ども達は私達が前回発言したことや，行動などを覚えていたのに驚かされました。そこから，やはり教師は自分自身の行動や発言に，責任を持ち誠意を持って行動しなけ

ればいけないことを学びました。

②授業を通しての私自身の変化

私自身の変化としては，小学生に対する態度が変わったと感じます。教育実習は中学校で行ったので，始めのうちは小学生にどう話しかければよいのかなど接し方がわからずとまどう事がありました。しかし，授業や授業外の時間などで関わっていくと，気軽に話しかけたり話しかけられても会話が弾むようになりました。これは私自身とても嬉しいことでした。さらに，学童には１年生から６年生もの様々な年齢の子ども達がいます。そこで，様々な年齢の子ども達と触れ合えたことは，その年齢の特徴など実態を知ることが出来たのでとても良かったです。

③授業を通して感じた教師としての課題

私がこの食べごと学校を通して感じたことは，自分自身が集団の全体，さらにはその中の一人ひとりを把握することが出来ていないことです。全体の中で目の前にいる子どもを支援・指導することで手がいっぱいで，周りの状況や他の子ども達，さらには他の先生方の行動などが全然見えていない状況でした。実際の教育現場では，授業中は一人で子ども達をまとめ，動かし，把握しなければいけません。そのためには，日頃から周りの状況などを注意深く観察したりするなど，意識して鍛えなければと感じました。

また，教師として学校を動かしていくことや，授業を行っていくうえで家庭や地域，関係機関との関わっていく機会が多くあると思います。今回は，学童で授業実践を行うということで，自分自身の授業を実践する際に，事前に打ち合わせをしたり，授業の説明をする場が数回ありました。そこで，自分がどのような授業を行いたいのか，どのような目的を持って行っていくのか，さらには準備して欲しいことなどを，明確にわかりやすく説明しなければなりませんでした。しかし，その説明する力が自分自身には不十分であると感じました。このような場を何度も経験するうちに，身に付いていくのもあると思いますが，やはり事前に自分でしっかり教材研究などをして，納得したうえできちんと準備を行ってから説明を行う必要性を強く感じました。

さらに，リフレクションシートでの他者評価から教材研究など授業を作っていく力もまだ不十分であることを感じました。

このプラクティススクールを通して，自分で感じた課題，さらには自分自身の気付けなかった課題に気付くことが出来たのは，これから実際の現場で働くうえで，とても良かったと感じました。

食べごと学校での成長

042505C　伊良皆　真子

今回，プラクティス・スクールの食べごと学校を運営するにあたり，教材研究の大切さを学ぶことができました。今回指導対象者が小学生ということだったのですが，私は小学生の学習指導を行ったことがないので，小学生にあった学習内容，小学生でもわかりやすい言葉で話すことや授業方法を考えることが初めての経験でした。

私たちは，“たまねぎ染めのランチョンマット”と“ちんびんづくり”を行いましたが，とくに，たまねぎ染めはとても苦戦しました。はじめはたまねぎ染めではなく，月桃染めを行うという計画をたて，自分たちで月桃染めを行ったのですが，うまくいきませんでした。そこで，草木染めを体験できる場所をさがし，「野原工房」というところで月桃染め体験を行いました。実際のプロの方に，草木染めの手順や染め方を習うことができましたが，月桃染めは大学生の私たちでもかなりの時間と技術が必要だということがわかりました。そして，工房の方といろいろ相談した結果，対象学年が小学生いうことで，たまねぎ染

めをすすめられました。たまねぎ染めは，他の草木染めよりは簡単で，色がはっきりでるので子どもたちには人気があると教えてくれました。その後，大学でたまねぎ染めの教材研究を行い，90 分という時間内でランチョンマットが完成するように指導計画を立てました。当日の授業では，各工程がなかなかうまくいかずに，かなりの時間がかかってしまったり，作業場の動線の計画がうまく配置することができなくて，子どもたちを混乱させてしまったりして指導する側もとても大変でした。

私自身の変容としては，私が専門とする教科が家庭科ということで，授業だけの実践だけでなく，家庭でも家族の人と実践したり，学習した内容を生活に生かしてほしいという思いが以前より強くなったのを感じます。それが今回の教材研究や一時間，一時間の授業を楽しくしようとする態度につながっていったと思います。

食べごと学校を通して感じた課題は，授業において学級全体を把握することが難しいということです。実習という体験的な学習状況の中，子どもたち一人ひとりの動きや作業の進捗状況を把握することがうまくできなかったのですが，授業方法を工夫しながら，授業全体の把握ができるように努力したいとおもいます。また，今回校務分掌の活動を理解できておらず，活動することができなかったのですが，自分が責任持つべき役割をしっかり把握し，責任をもって活動できるようになりたいです。さらに，与えられた課題や役割だけでなく，校務において気がついたことがあれば進んで状況改善に努めたいと思います。

これまでの食べごと学校での経験を活かして，これからの教育現場でがんばっていきたいと思います。

食べごと学校を通して

上原あゆみ

プラクティススクールを通して，学んだこととしてまず挙げられることは，複数の学年の児童を一斉指導することで，複式学級の経験が得られたことである。

沖縄県は離島へき地が多く存在するが，大学ではなかなか学ぶ機会が無いまま現場に出てしまうということが課題になっている中で，今回このような経験が得られたことは，自分の教師としての能力育成にとてもよかったと思う。また年齢が違うのは児童だけでなく，学校を運営する側の教師である大学生も３年次と４年次と学年がまたがっていたので，それぞれの意見やアドバイスを貰いながら授業を作り上げていくことができた。

一番印象に残っていることは，自分のグループの担当であった授業である。食べごと学校最後の授業で，「沖縄そば」を取り上げたのだが，教材研究の段階で，児童がどのようにしたら活動しやすいか試行錯誤を重ねた。その結果，低学年でも力が入りやすいように，また衛生面から考えて，ビニールを重ねて足でこねるという工夫をした。しかし，工夫をした上で，試食をしてみたら，麺が固い，だし汁のコクがない，など味に関する課題がたくさん出てきてしまった。その時に，学部の先生や４年次にも試食をしてもらいアドバイスを生かしながら，何度も試作を行った。その試作会のときに「調理実習は生徒が，美味しい！また作りたい，家でも作りたいと思わないと意味が無いよ。」という先輩の言葉で，渇が入り，出汁も３日間煮込み完成させ，麺も強力粉から中力粉に変更し，無事美味しい沖縄そばを作ることが出来た。授業当日，児童たちはとても楽しそうにそばを作っており，低学年の児童は，高学年のリーダーがサポートしながら麺を細く切ったりと，活動の内容も高度になっていた。食べごと学校の感想にも，「沖縄そば楽しかった」などがあり，児童の心に残る授業に近づいたのではないかと，教材研究をした分，授業もうまく行き，児童に与える影響も大きくなることが学べた。

食べごと学校では，評価シートを用いて自分自身だけでなく，他の学生に対しても評価を行っていた。はじめは，自分自身の評価を甘くみていた傾向にあり，他者からの評価も数値が高いものであった。しか

し，リフレクションを行いグラフ化されたものをみると，学生，自己，教師の評価に相違が出ており，自分にはどのような力が足りていないのかを具体的かつ客観的に考えることができた。とくに相違がみられた項目は，教材研究や生徒の実態把握などである。第３回の総合リフレクションでは，３者の評価が一致するようになり，自分自身の評価が適当になってきた。また数値自体もあがってきていて，課題であった教材の工夫や実態把握力も向上してきた。評価をするということは，自分自身の変化が数値となって分かるのでとてもよかったと思う。

プラクティススクールは，教育実習と異なり「学校を運営する」ということにも重点を置いていた。校長を中心に，毎回の反省会は当初２時間以上にも及んでいたが，改善され短縮することができた。学校現場の職員会議に当たる反省会では，時間をコンパクトにすること，また校務分掌の活動報告をもっと活発に行うことが課題となった。また今回協力していただいた学童の指導員の方には，毎回の授業の反省会のほかに，授業に関するアドバイスを貰うことができたことも，「教師」以外の視点で児童をみている人との交流も，児童理解にとても役に立った。

食べごと学校を終えて，教師として備えなければならない力は，多面的な力かつ深い教育的愛情だと感じた。児童一人ひとりと触れ合うと授業では違った表情を見せたとき，何かあったのかなと声をかけてみたり，自分の得意なことを授業で披露したい高学年の児童たち，なかなか集中できない児童は実はかまってもらいたかっただけなど，たくさんの児童の様子を見ることができた。授業を作り上げることはとても時間がかかる事で，児童を全て把握することはとても困難である。しかし，大変なことはあるけれど，児童の一生懸命に活動する姿や，少しずつの成長を短い期間ではあったが，ともに過ごすことが出来て，教師になりたいという気持ちは更に高めることができた。食べごと学校で得たたくさんのことを今後，教師を目指すものとしての糧にして更に頑張っていきたい。

模擬学校を終えて

０５２５０２Ｃ　賀数さゆり

教師になるための資質・能力を確認しそれを伸ばすことを目的とし，私たちは約３ヶ月間，模擬学校という実践を行ってきました。実践を通して，先生や学童の指導員の方々に助けてもらいながらではありますが，自分たちで授業や行事などの学校を運営していくという大変さが学べたのではないかと思います。学校運営は必ずしも満足のいく状態だったとは言えず，校務分掌や職員会議など教師の連携がうまく機能していないために，仕事が偏ったり，つい授業作りだけに集中してしまう，ということもありました。現場の先生方から聞くところによると，教師は授業以外の仕事が大変多いようです。今回，私はやるべきことが「授業作り」の中でしか見えておらず，学校全体を見渡すことが出来なかったので他の仕事に対する教師との連携を今後の課題にしていきたいです。授業実践においては，学童で実践だったので，異年齢児童の集団が対象になります。各学年の発達段階や，こどもたちの中でのグループや組織など，現場に出なくては学ぶことができない貴重な経験になったのではないかと思います。また学校とは違い，学童でのこどもたちの雰囲気は緊張感がほぐれ，とても子どもらしいのびのびとした印象を受けました。まるで家にいるときのようなありのままの姿を見ることが出来たのではないかと思います。そこへ私たちの模擬学校を持ち込んで授業実践をするわけですから私たち以上に子どもたちもはじめ戸惑ってしまったのではないかと思います。まず，授業を開始するときに，なかなか子どもたちが集まってくれなかったり，作業の途中で遊びに行ってしまったり，最後の片づけをしないでどこか行ってしまうなど私たちの思い描いていた授業の様子とはかけ離れていため，頭を悩ませました。私たち教師同士の会議に持ち帰り話し合いをすすめた結果，学童の生活があるにせよ，私たちは授業という意識で取り組もうという姿勢を確認すること

ができました。私たちグループの授業実践は，実施日が後だったので先の授業者からたくさんのアドバイスをもらうことができたので良かったです。そして学童の指導員の方にアドバイスをいただき，授業を改善することができました。いろいろな意見やアイディアを参考に授業づくりできたのも食べごと学校での大きな収穫ではないかと思います。より良い授業をつくるためには，情報収集しアドバイスをもらい，それを自分たちで吟味し，授業の中で活かしていくことがとても大切になってくると思います。この模擬学校をはじめ私たちをいつも支援してくださる大学の先生から「何かするとき，（自分たちのやり方だけではなく）先に経験した人に聞いたり，情報を交換し合えばいいのに」と言われ実践しました。私はこれまで，とにかく一生懸命にやることや仕上げることだけにとらわれていましたが，他の意見を取り入れたり，情報を集めればもっと魅力的な授業につながるのだということを身をもって学ぶことが出来ました。

時間はかかりましたが模擬学校を通して，教育実習や模擬授業とは違い，授業実践を超えた広い視野での学校教育について考えることが出来たのではないかと思います。

「私の成長～プラクティススクールを通して～」

３年次　０５２５０３Ｂ　川内　文

私が，このプラクティススクール「食べごと学校」で学んだことは，まず１つめに授業を作るということは沢山の教材研究を重ねなければならないということです。教師の立場からではなく対象とする子ども達がどうすればスムーズに，そして解りやすく授業に取り組めるかを念頭に置きながら行わなければならないということ，また，学童という異年齢集団を対象に授業を行うということは，低学年に合わせた指導をすることで全体に伝わるということも学びました。そして２つめに，子ども達に仕事を任せることが大切だということです。私たちが授業を考える際，「まだこの子達にはこの仕事は難しいだろう」と勝手に課程を立て，何もかも教師が準備し，子ども達が作業をするのはとても簡単な作業ばかりになってしまいがちでした。しかし，学童の指導員の方から「何でも子ども達にさせて下さい。」というアドバイスを頂いたこと，実際に子ども達に作業をさせてみて，簡単な作業よりも楽しそうにしている姿を見て，時間配分も念頭に授業を行わなければならないけれども，子ども達はどんな事をしているときが１番楽しいのか，どんなことに興味や関心を持っているのかなどを考慮して授業を作ることも大切だということも学びました。

次に，私自身の変化についてですが，私は授業をすること，子ども達とのコミュニケーションに自信がありませんでした。「子ども達に嫌われたらどうしよう。上手くしゃべれなかったらどうしよう」など不安ばかりが頭にあり，子ども達が授業中にふざけていてもあまり注意ができませんでした。しかし，子ども達と一緒に授業を重ねるたびに，だんだんとコミュニケーションがとれるようになり，授業中の注意もできるようになったことが私の１番の成長だと思います。今考えると，コミュニケーションが取れたからこそ，子ども達は，私の言葉に耳を傾けてくれるようになったのではないかと思いました。また，最初の事前会議などでなかなか発言が出来なかったのですが，最後の会議では，自分の意見を言えるようになったことも私の成長ではないかと思います。そのことは，教員同士の信頼関係が出来上がっていること，そして私自身が自分の意見に対して自信を持つことが出来るようになったということではないでしょうか。

最後に教師としてのこれからの課題は，リフレクションシートにも表れているのですが，子どもの実態の把握ができていないことです。グループの子ども達を見るのが精一杯で他のグループ，そして他の教員が何をしているのかを見ることができていませんでした。現場では，教師１人に対して児童・生徒は約４０人です。今のままでは，クラスを把握することは出来ず，事故が起こる可能性が大きくあり，そしてその事故にさえ対応できないということになってしまいます。私が今後つけていかなければならない，子ど

も達の実態の把握，そして全体を見渡す力，臨機応変に動くことができる力。まだまだ課題が多く残っていますが，その課題に気づくことが出来たのも，このプラクティススクールのおかげだと思います。残り少ない大学生活ですが，現場に出て実践力になる教師を目指して日々の努力，意識して生活することが大切であると感じました。

食べごと学校を通して

052504K　金城良枝

私が食べごと学校を通して一番勉強になったことは，教材研究をすることで内容が深まるということです。私達の授業グループでは当初，第 6 回の授業に野外炊飯を取り上げる予定でした。それは，火起こし器で火を起こすところから炊飯までという内容でした。しかし，何度か授業を見ていくと，火を起こすことを除いても 90 分で収まるような内容ではないと感じたために，やむをえず諦めることにしました。
学童に，炊飯からおにぎりへ変更したということを伝えたのは授業をする 1 週間前のことでした。学童の先生方におにぎりの指導案を見せたとき，「子ども達に何を伝えたいのか，情熱みたいなものが見えない。」と言われました。そして，「授業内でやらなくてもいいから，教材研究してみたらいいよ。もしかするとできるかもしれないし，または野外炊飯でつくったご飯を用意しておいておにぎりを作らせるだけでも感じるものが違うはずだよ。」との言葉をいただき，私達は週末に野外炊飯をしてみることにしました。炊飯器として用いたものは，アルミ缶です。おにぎりへ変更する前に，炊飯器として用いる道具を調べたのですが，アルミ缶が最も手軽に手に入り，身近なものだったので炊飯器として用いることになりました。

アルミ缶炊飯の教材研究は 2 度やりました。1 度目では火加減がよくわからなかったのですが，2 度目は 1 度目の経験もあってスムーズに進みました。アルミ缶炊飯をしているときは本当に楽しくて，ご飯が炊きあがったときはとても嬉しかったです。味も炊飯器で炊いたご飯とは違っていて，普段とは違う美味しさを味わいました。この感動も教材研究してわかったことです。一方，時間の方はぎりぎりでした。

結局，天候の悪さが気になっておにぎりにしようと決めたのは当日になってからでした。しかし，教材研究をしてアルミ缶炊飯で炊いたご飯の美味しさを，この食べごと学校という機会に活用した方がいいと思ったために，授業の前に教師みんなでアルミ缶炊飯をすることにしました。ですが，あまりにも突然のことだったので，教師陣も戸惑っておりました。私達は 2 度もやっていたのですが，彼女達には初めてのことであり，説明も不十分だったので火が消えたりしてなかなかスムーズにはいきませんでした。また，風の向きを考えないで缶を置いてしまい，煙をうまくかわすことも支援もしにくかったです。教師だったからよかったものの，本番で子ども達がやるとなると危険だったと思います。安全や場所の配置，支援のしやすさを考えることはとても必要なことだと思いました。授業の導入時に，おにぎりに使うご飯がアルミ缶で炊いたものだということを子ども達に伝えたのですが，反省会のときにアルミ缶炊飯の工程を絵などを使って見えるようにするとわかりやすい，教師達の苦労や楽しみを伝えきれていないなどと指摘がありました。前回の漬物のときもそうですが，私は説明力が足りないと思います。子ども達の意欲が湧き，わかりやすく説明し，伝える力を伝えていくことが今後の一番の私の課題だと思います。

今回のアルミ缶炊飯のご飯を使ったことでただのおにぎり作りではなく，どこか私達教師の気持ちが入り，伝えたいという思いのある授業を作ることができたと思います。それは，やれるかどうかわからないアルミ缶炊飯を実際に試して教材研究したことにあると思います。興味ある教材は授業時間内にできるできないにかかわらず，授業に関連するのならばまずは教材研究をしてみることです。そうすることによって，内容に深みが出てくるということを，この授業だけでなく食べごと学校の様々な授業を見て学ぶことができたと思います。

「食べごと学校の教員となって学んだこと」

052505H　西千賀子

教職実践演習の授業で，家政科は食べごと学校を開校すると聞き，是非参加しようと思いました。実習の授業を多くするということで，自分の力試しになるということと，もっと子どもと関わる場がほしかったからです。

太陽学童を対象に７回の指導計画をたて，私は，漬け物作りとご飯炊きのグループになりました。最初の漬け物では，沖縄野菜を使うということで，単純にゴーヤーの漬け物にしようと考えました。作業工程も，教師側がやりやすいように組み立てていました。しかし，その案を会議に提出した際に，他の教員の方からほんとうにゴーヤーでいいのか，子どもたちがゴーヤーに対してさらに悪いイメージを持ってしまわないか，作業のさせ方についても様々な意見をもらいました。

改めて，指導案を振り返ってみて，包丁を使う作業は初めてとなるのに時間が短かったり，ゴーヤーについても教材研究をしたわけではなく，もっとおいしいものに変えようということになりました。この時は，子どもたちにどんな学びをさせたいのかなどまったく考えておらず，ただ作業がスムーズに流れるように指導案を作成していました。

それから，漬け物はゴーヤーから大根に変えて，教材研究を重ね，指導員の方や食べごと学校の教員にも試食をしてもらい，自分たちがおいしいと思えるものができました。

授業の前日，前々日もたくさん話し合いをし，道具の準備などもすませておきました。私達の前の授業から，子どもたちは騒ぎやすいということが分かっており，静かになるまで待って説明しようということを，グループの共通意識として確認しました。

授業を終えてみて，包丁を使用する時は毅然とした態度で挑まなければいけないということを学びました。危ないと思う子がいると注意はしていたのですが，そのグループに座っている教員に少し遠慮してしまうこともありました。子どもたちを自分一人で見ているのだというくらいの気持ちで，積極的にならなければいけないという課題がみつかりました。

２回目の授業はご飯炊きでした。しかし，学童の子どもたちの様子を見て，絶対に１時間でご飯を炊くことはできないだろうと自分たちで決めて，焼きおにぎりに変更しました。指導員の方にはご飯炊きで計画を出しており，授業する１週間前になって意思の疎通が出来ていなかったことに気付きました。指導員の方から，焼きおにぎりで何を学ばせたいのか，指導案としてはいいのかもしれないが意図が弱いという指摘を受けました。そして，ご飯を教材研究として一度炊いてみてはどうかと言われました。

グループで話し合い，アルミ缶を使ってのご飯炊きをやってみることにしました。実際にやってみると，とても楽しくて，ご飯がきれいに焼けた時には，とても感動しました。アルミ缶炊飯を子どもたちにさせたいということで，準備を進めていきました。しかし，ここでも学童の方には連絡しておらず，当日の朝にアルミ缶炊飯について説明しにいくこととなりました。指導員の方からは，このスペースで出来るのならやってもいいですよという言葉をもらったのですが，私達のグループ以外は実際に炊いたことがない中で，指導するのは危険だということで，教員が前もって炊くということにしました。

当日は風が強かったので，そんな中ご飯炊きをしたことに疑問だという声もありました。確かに危なかったと思うのですが，子どもたちにどうしてもアルミ缶で炊いたご飯を食べさせたいという気持ちもあり，安全な所を確保して行うべきだったと反省しました。授業では，ご飯を炊いているのをみたり一緒にやった子もいて，最初からみんなが集中してやる気があるのを感じました。いつもより，説明を聞いてくれてとてもやりやすかったです。この日はゆったりと授業を進め，全員でいただきます，ごちそうさまをして，おにぎりを味わうことができました。

２回の授業を通して，指導員の方との連絡をしっかりとることと，教材研究を重ねることによって，自

分も自信を持って授業ができるし，子どもたちにも楽しんでもらうことが出来るのだということがわかりました。最初の頃は，授業作りがあまり楽しくなかったのですが，教材研究を重ねるうちにやる気が出てきて楽しくなりました。

食べごと学校の教員となって，子どもとの関わり方，授業の作り方などたくさんの事を学びました。このような経験ができたことをとても嬉しく思います。この経験を糧にしてこれからも様々なことに挑戦し，生かしていきたいです。

「食べごと学校と私」

船附友美　０５２５０６Ｆ

教師が楽しまないと始まらない。初めの頃は，子ども達からもやる気のない声がたくさん聞こえ，私もただただ実践をこなしているという感じでした。しかし，せっかくやるなら楽しみたい，子ども達にも楽しんでほしいという気持ちになり，どのようにすれば子ども達が取り組みたくなるような内容になるか，これからもやってみたい活動になるかと考えました。そこで，まずは私自身が楽しんで取り組もうと思うようになりました。そうでなければ，教師が楽しさを伝えることは難しいと考えたのです。たとえ年齢が離れていても，私たちが楽しい活動は子ども達とも一緒に取り組みたいと感じ，それは子ども達にとっても良い経験になるものだと思いました。そこで，教材研究がとても重要なものだと実感しました。初めは，授業に対して軽く考えていて，ただ体験ができれば良いのではないかとも考えていました。しかし，実際に授業を行うのは一回だけであり，その一回の授業で具体的に何をどのようにして子ども達に伝えるか，という点について実践を通して考えさせられました。そのためには何度も何度も教材研究をし，子どもの気持ちを考えながら，その場を想像して説明・活動がわかりやすいよう，流れがスムーズにいくよう授業を構成していくことが大切でした。教材研究を重ねていくと，この内容に自信がついてきて，また楽しくもなりました。ますます子ども達にも取り組んでほしい，一緒に活動したいという気持ちも大きくなっていきました。

子ども達は一人ひとり特徴がありますが，学童で実践を行ったことで学年が特定されず，学年それぞれの特徴もつかむことができました。その点をうまく活動の中に取り入れ，上級生を中心に，子どもたち同士でも教えあう環境づくりができることなど，とても勉強となりました。教師が教えることだけが，良いことではないと感じています。子ども達自身が積極的に行えるような声かけや，成長を見守る大切さも知りました。今回は，年齢幅も広く成長の著しい小学生を対象とし，学年での特徴が良くわかりました。６学年にまたがっていたため，説明は高学年の子に対してするのではなく，低学年の子ども達にも伝わるように配慮し，全体にわかりやすく伝わったのではないかと思います。

また，授業の評価だけでなく，教材研究の段階から指導や使命感など，教師に必要な資質がわかりやすく大きな内容でまとめられており，自分にはどのような能力が足りないのか明確にわかりました。そのため，今後はどのようにしたら良いかと具体的に考えることができました。また，今回は１３名の教師で33 名の子ども達を対象とし，授業では周りにいる５，６人の子ども達にしか目が行き届いていないという状況でした。実際の教育現場では一人で対応しなければならず，クラス全体の把握がとても難しいことを実感しました。実践を通して少しずつ改善できた面もあると思いますが，それ以上に感じたことが，現場に出るには何十倍もの成長が必要だということです。できない自分，気づかない私に自信をなくしたこともありましたが，もっと頑張ろうと教師に向けての意欲が高まったことは良かったです。今回の実践で，自分を見つめ直すことができ，今後の課題も見つかりました。この経験を活かし，これからも私自身を磨いていきたいです。

「食べごと学校」とわたし

０５２５０７Ｄ　　前里　奈央子

■授業を通して学んだこと

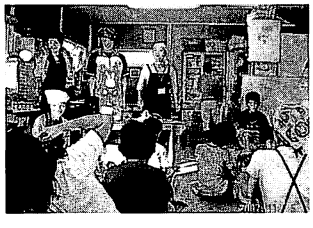
私は授業を行うグループを４年次と組みました。はじめて，４年次と授業づくりをするということで緊張しながらのスタートでした。４年次と授業を行い，児童が活動しやすくるための教材工夫や児童への言葉かけなど，授業者として同じ立場にありましたが，隣にいる４年次から学ぶことがたくさんありました。また，この授業を通して教材研究の大切さを感じました。学童という異年齢集団の中で授業を行う際，低学年の子でもわかりやすい説明をし，活動を安全かつ楽しく参加できるようにするには言葉や教材の工夫がとても大事でした。例えば，お皿の厚さを示すためにダンボールを使用したり，手作りの包丁で包丁の使い方を説明したり，リーダーにはリーダーバッジを付けてもらいリーダーとしての自覚を持たせたりと各グループの授業は毎時間勉強になるものでした。

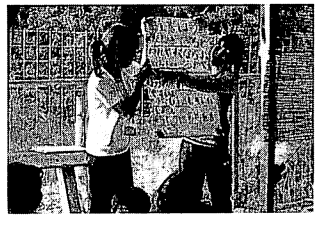
■授業を通しての私自身の変化

授業を通しての私自身の変化は，児童理解です。私は主に３班（７人）の担当をしていました。３班はとても元気で明るい児童が多く，にぎやかな班でした。しかし，人の話を最後まで聞くことが苦手だったり，いたずら好きな児童がおり，私は授業中彼らへ注意ばかりしていました。そのため，初めの頃は彼らへの注意にエネルギーを注ぎ，本来の彼らの姿を見れていませんでした。しかし，班の児童の名前を覚え，一緒に活動を進めていく中で児童一人ひとりの良いところに気づくことができました。いつもやんちゃな児童が，自分たちで漬けた漬物とおにぎりを食べながら「お父さんは料理が上手いんだよ」と自慢げに話してくれたり，「お箸を各班に配ってきて」とお願いすると一生懸命その仕事をこなしている姿に感動し，もっと児童のことを知りたい，と思うようになりました。活動の説明をしている授業者に対し，困惑させるような言葉や態度をとったかと思うと真剣に活動を取り組む児童や「つまらん，はぁー」といっていた児童が楽しく活動をしている姿を見て，当初はどのように接していこうかとまどいました。しかし，児童のさまざまな面もきちんと受け入れながら児童の学びを支援していこう，ありのままの彼らの姿と向かい合っていこうと思うようになりました。

■授業を通して感じた教師としての課題

私は，この「食べごと学校」の授業を通して教師としての課題が多く見つかりました。児童の前でわかりやすく説明したり，静かに聞かせる雰囲気を作ることも教育実習を経験したので少しはできているか，と思っていましたがまだまだだと痛感しました。そして，一部は把握できていても全体を把握できていない自分にも気づきました。これからは，自分で気づいた改善点や教員や学生のみなさんからいただいたリフレクションシートを参考にしながら一人前の教師になれるようがんばりたいです。





（浅井玲子、國吉真哉、真喜志昇）

尚、本報告書は実践演習の一部として校長（伊集）が作成した。

第５章　「SATT」の実践
－社会科教員としての総合的力量を図る模擬学校の試行－

第１節　SATT ゼミのめざす世界とその準備

（１）社会科教員として必要な総合的力量とは何か

社会科教員に求められる総合的力量とは何であろうか。

社会科学習指導要領は，教育基本法をうけて，「国際社会に生きる民主的，平和的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質」の形成という目標を小中共通に設定している。この目標からするならば，社会科の教員は自分が受け持つ教室はもちろんのこと，学校，学校が属する地域社会における民主的，平和的な国家・社会の形成者でなければ，教室において指導（GUIDE）することが論理上到底できなくなる。ところが，社会科に関する多くの知識と，効率よく教える能力をもつことが，社会科教員として求められている力量だと体験から判断している学生が多い。こういう学生の判断は学習指導要領の目標と社会科教育界の実体との乖離によるものである。だからと言って大学がこのような学生の意識を投げ捨てておいていいわけはない。

琉球大学社会科教育教室では1996年以来社会科教育調査という科目を二年次学生に通年で全員履修指導科目と位置づけている。内容は授業の実際に学校で使用できるような教材を作成するために地域調査を行うというものである。眼目は，学生の作った教材といえども，優れた教材であれば授業で使用される可能性があり，社会の形成者たりうるということを意識させることにある。実際，社会科教育調査で作成された教材は，2002 年以来竹富町の社会科副読本『むすびあうしま島』として活用されている。琉球大学教育学部では2005年教職体験Ｉ（１年次附属学校），2006年教職体験Ｉ（2年次公立学校）という科目が設置された。それに伴って，社会科教育調査科目も教材を作成するための調査から，学校における実際に参加することを前提とした調査科目に変化してきている。2006 年は西原町立坂田小学校３年生との地域見学の手伝い，4 年生との地域調査への導入授業を担任集団との連携で実際に行った。2007 年は那覇市立識名小学校において，社会科クラブの授業を現場教員との連携のもとに編みだすことができた。最近 2 年は意味ある教材を世の中に提案するというだけではなく，実際の授業を作るという中で，学校の教師集団との合意を「形成」して行かなければならないというというハードルが生まれている。従来はこの調査を経て，社会科教育研究・社会科教育法 ABCD，附属学校教育実習，卒業論文という形で社会科教員としての力量を形成してきた。

社会科教員養成最後の総まとめとしての教職実践演習はどのようなカリキュラムを用意すべきなのだろうか。琉球大学教育学部教職実践演習検討 WG は，模擬学校（プラクティススクール）を設立・運営させ教員候補生としての最小限必要な総合的力量の形成を図ると同時にそれが習得されているかどうかをみる教職実践演習科目を設置してはどうかという答申を2006年に出した。それを受けて本モデル事業に応募し採択されたのである。教職実践演習検討WGのWG長であった関係で教員養成改革モデル事業 WG の一員となり，社会科教育系の模擬学校（プラクティススクール）の設立を引き受けざるをえなくなった。

この教員養成改革モデル事業には宜野湾市教育委員会の後援を得て，また琉球大学のある宜野湾市・西原町の先生方が WG メンバーとして参加した。したがって，社会科教育系の模擬学校（プラクティススクール）も，琉球大学が属する宜野湾市・西原町を意識することが条件の一つであった。

社会科教育系の模擬学校（プラクティススクール）を作るという行為そのものが形成者としての営みであり，社会科の教員として力量を図り習得されているかを判断するのに適した営みである。

(2) 模擬学校創立者たち

社会科教育系の模擬学校（プラクティススクール）対象学年である社会科４年次は，２年次の調査の時は過去に竹富町で勤務していたすぐれた諸先生方の教育哲学や指導方針を学び取り，それらを生かす形で，実践を現状に合わせて再構成し，指導案やワークシートという形でデータベース化し『竹富町DVD教材集』に掲載してきた。調査と授業に役立つ報告書の作成までは経験しているが，実際の学校での体験は３年次の教育実習でしかないという学年である。模擬学校（プラクティススクール）の対象である社会科教育学生Ｍさんに模擬学校を作らないかという話をしたところ，模擬学校という方法に興味をＭさんは示した。そこで，参加呼びかけをＡさんにお願いした。Ｍさんはすぐに「里井学校」に参加しませんか？というコピーを作り出しポスターを張り出した。「里井学校」という強烈なメッセージ性は効果をあげ，学生のみならず教員からも「里井学校」とは何かという質問を受け，模擬学校（プラクティススクール）の説明をすることになった。期せずして教育学部における模擬学校の試みへの理解をはかることにつながった。卒業論文を作成しなければならない４年次にとって模擬学校（プラクティススクール）開設は時間との関係で極めて難しいと考えていたが，さらにＫさんが学校を一から作るという話に興味をもってくれた。Ｋさんは自然地理を専攻する中で発見した宜野湾の海岸の面白さを表情豊かに子どもと分かち合いえる学校にしたいと話してくれた。やがてＫさんが社会科教育系の模擬学校（プラクティススクール）の校長先生になる。ＭさんとＫさんに，今回は４年次必修の教職実践演習という科目ではないので，さらに学年の範囲を広げることが可能であるというモデル事業WGの方針を伝えた。その結果，市民性教育の卒論を昨年書き，株式会社沖縄TLOに就職し，かつ小中学校で市民性育成の出前事業をしているＳさんが学校を作るという企画に共感したという。彼は株式会社沖縄TLOのある琉球大学地域共同研究センターに勤めている教員志望のＥさんを誘い４人が創立のメンバーとなった。その後，模擬学校を作っていくプロセスの中でさらに４年生２人，３年生１人が仲間に加わることになる。

模擬学校（プラクティススクール）を作ることそのものに意味を感じたメンバーが揃った。模擬学校は，個人がみずからの判断で共通の事業に意味を感じ，社会的な営みを始める場である。３年次までのシステム化された中での訓練される教育実習等とは異なる場が生まれたのである。

(3) SATTゼミの発足

社会科教育系の模擬学校（プラクティススクール）は何を目標として，何をする学校にすれば，宜野湾の子どもたちはこの学校に来てくれるのか。学校でやっているような社会科の授業を受けるために子どもたちは，そしてその親たちは子どもを連れて琉球大学に足を運んでくれるだろうか？答えはNOであると判断した。では，社会教育がやっているような宜野湾の名所旧跡見学や歴史講座，視点を転換して泉や海岸探検はどうだろうか。社会教育に子どもが参加しているような事例があるだろうか。子ども会や学童などの組織的な参加はあるようだが自主的な参加はあまりないようである。また参加があったとしても，結局「教える」ということになってしまう。このような難問に挑むところから，模擬学校職員会議は８月13日に始まった。メンバーは議論の結果，宜野湾市の観光・ガイドブックを作るという目標を設定した。「教える」のではなく，「作る」のである。「作る」という営みの中に，子どもと教師の学びが包含されている。教師の学びが包含されていることに，模擬学校職員はこの時点では気づいていない。

宜野湾市の観光・ガイドブックを作るという目標をうけて学校名をSATTゼミという名称に決定した。SATTとは察度王からとったもので沖縄で始めて中国に朝貢した王様で現在の宜野湾市を拠点とする王様である。その察度を分解したSATTの頭文字に意味を付した。いくつかの候補の中から，ガイドブックを作るという目標に即したＳ：さぁ行こう！,Ａ：あそんで，Ｔ：楽しく，Ｔ：つーりずむ　を決定した。子どもを集めるためのポスターと８時間分の指導計画と分担も決めた。

最後に校長にＫさん，副校長にＭさんを選出し，参加の意志を伝えてきた４年生のＴさんと３年生のＹさんも名簿に加え，メーリングリストが沖縄TLOのＳさんの発案で作成された。このメーリングリストによって連絡と情報が共有され，模擬学校修了までに200通近いメールが行き交うことになった。

(4)　本づくりをやってみたい！・SATTゼミへ行ってみたい！

SATTゼミ職員会議は，宜野湾市内を取材し，本を作りあげることのできる発達段階として中学生を対象にすることにした。集落内における行事において，小学生は参加するが，中学生は参加しない。参加するような層はほとんど部活動に吸収されてしまっている。もっとも子どもを集めるのに困難な層に挑戦することにしたのである。中学生を集めるために，絵の上手なＥさんを中心にポスターを作成した。８月21日，ＥさんとＳさんは，SATTゼミを代表して，８時間分の指導計画とポスターをもって私（里井）の研究室に来て，SATTゼミの今後について相談をした。

私はこの相談の中で次のようにアドバイスした。中学生が本づくりを『やってみたい！』，SATTゼミ『行ってみたい！』と思うかどうかが重要である。ようするにどのように集客（生徒を集めるか）をするか再検討が必要である。アピールポイントをハッキリさせる。・『学校とはココが違う』というところはどこなの？「Ａ：あそんで」を強調しているけど，遊んでならば土曜日に中学生どうしで遊んだ方が楽しいのではないのか？むしろ『プロのような』作品を作ることを強調してはどうだろうか。プロのようなガイドブックを作成することを目標とし，集客を図ることがよいのではないか。

このようなアドバイスをし相談していく中で二人の議論はさらに煮詰まって行った。その様子は彼らがメーリングリストにまわしたメモから再現すると次のようになる。

▼プロのようなガイドブックを作成することは，製本・出版業に興味を持っている生徒たちを引き付けることができるのではないか。

▼そうこれは現在中学校でさかんに行われているキャリア教育に繋がるね。

▼プロのようなガイドブックとはJTAの機内誌のようなもの。

▼写真（イラスト）半分・本文半分のようなインパクトのあるもの。

▼　子どもに始めから写真（イラスト）半分・本文半分のようなスペースを与えてはどうか。

▼　現在ある観光ガイドブックをみて，『これだから観光客が来ない』等，魅力がないと思う点をあげ，それを改善したものを作成するのはどうか。

この相談によって，ポスターが大きく変更されることになった。しかしＥさんが精魂をこめて生み出したキャラクターは最後までＳＡＴＴゼミのシンボルとして生き続けることになる。

上記の相談を受けてSATTゼミは次のような方針に転換した。ポスターを作りなおし，作りたいもの（ガイドブック）のイメージがハッキリわかるもの，すなわち見本ガイドブックを作成することである。魅力あるガイドブックを作ることが子どもにわかり，このことによって，中学生がSATTゼミに参加したくなることになると考えたのである。そのためには現在ある宜野湾市関係のガイドブックのの改善点，問題点を見つけることにも学生たちは気がついた。

(5) イメージ　見本冊子づくり

はじめは，本を作らせる側だと思っていた模擬学校職員がここで作るという状況に直面したのである。中学生にとって，魅力ある見本ガイドブックとは何であろうか。この命題を考えることになった模擬学校職員たちは，すでにある宜野湾市関係のガイドブックを集めた。そして，現存するガイドブックを読みとり，議論する中で，現存するガイドブックと同様のものを作成するのでは意味がないということになった。そこで，【宜野湾市の人々】に焦点を当て，その人たちが生活する，思い入れのある【宜野湾市】を紹介し，宜野湾市の良さを伝えようと考えたのである。焦点は【宜野湾市の人々】である。見本ガイドブックには人を登場させることになった。中学生が興味を持つであろう宜野湾の人々が列挙され，さらに連絡先

を調べる作業がＥさんによって行われ，名簿が作成された。さらに名簿から何人かの方々にアポイント依頼をし，最終的に宮里涼子さんから取材することになった。このプロセスで子どもが体験するであろうアポイント依頼の難しさ・大変さを実感することになった。中学生が興味をもつであろう人は直接依頼することができず，マネージャーもしくは所属するプロダクションを通さねばならずきわめて有名人は難しいということを学んだ。

いよいよ宮里さんへの取材である。9月5日の職員会で次のような取材要旨が決定された。観光地ではなく，『宜野湾の人』に焦点をあてる。人の繋がり・口コミ・素朴感・身近さ・人の温かさ・人の魅力などの要素がみえる地域を取材したい。

そのために決めた宮里さんへの質問事項は次の通りであった。

・思い出の場所（何して遊んでいた？誰と？お勧めの場所）

・その場所にまつわるエピソード　・仕事のキッカケ　・ターニングポイント

・将来（今後について）　・宜野湾市（地域）の好きな点

・宜野湾の好きな人（思い出の先生・記憶に残っている人・憧れた人）

この段階で，さらに『宜野湾の人』に焦点があたり，SATTゼミが作り上げようという本の理念は，観光を意識した従来のパンフレットからは完全に離脱したのである。一方，後述するように宜野湾市内の中学生勧誘の日程も日々近づいていた。そのため，宮里さんの取材は間に合わないという危機感から，SATTゼミ内の有名人Sさんの取材記事が作成されるが，9月11日宮里さんへの取材が行われ，Sさんの記事は日の目をみなかったのである。

(6)「作る」体験が，SATTゼミの理念を進化させた

「作る」という営みの中に学びが包含されていると前述した。SATTゼミの学生たちは見本冊子を作りあげた。そして，SATTゼミの学校目標を教員養成改革モデル事業WGから求められた時，彼らは次のような模擬学校（プラクティススクール）コンセプトをつくりあげたのである。

Planning

コンセプトをはじめ，取材，原稿作成等を生徒自らで行うことを通して，企画力や文章構成力を高める。

Comunication

取材や現地調査にでかけることで地域における新しい発見や体験をしたり，さまざまな人との関わりを通したりして，コミニケーション能力を高め，コミニュティの輪を広げる。

Creation

誌面づくりや原稿作成を通して，創造力を働かせ，伝えたい内容をイラストでわかりやすく表現し，発表したり交流したりする。

この三つのコンセプトは，作るという営みによって，どのような能力が身に付くのかを示すものとなっている。そして，その形成される能力が決して個人的なものではなく，交流しコミニュティの輪を広げる中で豊かになることが意識されている。職員会議の中で取材目標が観光ではなく，人と地域に焦点があたる中でこの理念が醸成されたのである。

そして，「SATTゼミとは」のSATTという子ども像も次のように進化したのである。

S　すてきなぎのわん見つける子

S　明るいあいさつ元気な子

T　楽しくみんなで学べる子

T　地域をつなげるねたって子

「ねたて」とは，「おもろそうし」に表された言葉で宜野湾の呼称の一つであり，「物事の根元」または「共同体の中心」等を意味しているという。子どもたちがつくりあげる宜野湾の本が地域をつなぐ根本

になるようにというメンバーの思いをここに見ることができる。

社会科の教員として必要な社会を形成する能力，その機軸として人間関係形成能力を自らの学校の目標にしたということもできるであろう。 (里井洋一)

第２節　SATT ゼミの子ども（中学生）集め

（1）人集めについて

「人集めは難儀な方が良い」

ゼミの対象は中学生。普通なら附属中学校に依頼すれば即 OK である。歩いて数分。日頃から交流学習が盛んで，実習もそこで行う。生徒も一応優秀なはずで，誰が応募しても問題ない。たまに見かける生徒はちゃんと制服を着こなし，ミニスカやだぼズボンは皆無で，流暢に日本語を話す。利口そうな顔立ちで，朝夕は送迎車も付く。もし自由応募で外れたら，教師に依頼すればさらに学校推薦のとびっきりの子が即，用意される。万事問題なしである。でも・・・「ときめかない」。そこには学生の出番がない。学生は何のためにゼミに応募したのか？将来教師を目指して勉学に励んでいるのではないか。さらに，地方においては公立校が，その大部分ではないのか。附属校や私立の進学校ではいわゆる「優等生」が簡単にゲットできるが，それは全体のごく一部ではないのか。「学力問題」の大部分は普通の公立校の課題ではないのか。

もっと簡単に言えば「振られる」ことも，学生にはぜひ体験してほしい。自分の足で直接声をかけ，参加を促す。無論琉球大学の学生であることは事前に知らせてある。それで貴重な休み時間(昼休み)に，準備したパンフを片手に，通りがかりの生徒を呼び止めて，勧誘を行う。この場合，あえて学級まわりはしない。学級で待機させた生徒では，意味がない。 ストリートでパフォーマンスする若者の勇気よろしく，ゼミの趣旨を「わかりやすく」しかも「ていねいに」しかも「応募」する気にさせるのである。

少し話を変えるが，訪問セールスは何軒で１つのセールスにつながるのか。路上のティッシュ配りは，何個で１件の売り上げになるのか。全く飛躍するが，エレベーターガールは一日の中でまともに視線を合わせて会釈してくれる客は何名いるのか。多分その殆どは「外れ」。でもその積み重ねの中から自分なりの意義を見つけ出し，地道に励んでいるのではないのか。 ということで学生との話しあいの結果，市内４校の公立中学校巡りということとなった。そして目標は「若干名」。学生自体数名と少ない中で，さらに少ない目標値となってしまった。あくまでも公立校にこだわって，とりあえず「やってみる」こととなった。

我ゼミの悲壮な決意をよそに「００さん学校」は市内公立小学校からの応募が予想を上回り，急遽附属小からの応募をキャンセルしたと聞いた。某学校は附属小６年生２クラス，某学校は近所の学童保育学校と提携と，なかなか順調な滑り出しで，羨ましい限りであった。 まあ目標は「若干名」，わかってはいても，その数名が不安・・予想以上に楽しい出発となった。(とほほ・・)

（2）市内公立中学校①M 中にて

「まずは聞き役，でも・・・」

市内トップを切ってＭ中。西海岸に位置し，コンベンションセンターやラグナガーデンホテルに隣接。夏は海岸沿いにパラソルが林立し，湘南海岸といった風情か。参加はＳ先生，私，学生３名。最初で緊張気味のはずが，応対に出た教頭先生がなかなかのダンディーで，女学生人気。さらに通りかかる生徒にイケメンが多いらしく，女学生そわそわ緊張感ゼロ。昼休みの廊下で早速営業開始。通りかかる生徒は比較的服装も整っていて，全体的に好印象。声かけにも素直に応じて，話も熱心に聞いてくれる。学生もリラックスして声をかけていた。持って来たパンフも１０分ほどで半分売り切れ。でもふと思案？こんなことで本当に生徒がゲットできるのか。ただ冷やかしなのではないか。それでいかにも応募しそうな生徒に絞

って声かけを開始。その途中「保清部隊？」なる面々が通りかかる。１０名ほどの生徒で，脚立持参で蛍光灯取替作業を行っていた。後で聞くところによると「生徒のボランティア活動」だという。校舎内の修繕作業に積極的に取り組んでいるという。羨ましい限り・・・。丸刈りのいかにも「青春情熱系」的男子に遭遇。早速声をかける。やはり柔道をやっているという。そしてさらに聞くと突然「190 センチの友だち」を紹介したいという。本人を説得するつもりが・・。しかし無下に断るのも気が引け「まあいいっか」と３年某組へ。S 先生，私，学生３名揃ってゾロゾロ，最初の目的はいずこ　そこに彼はいた。ハーフかな？大きな瞳にカールした髪。すらっと伸びた足は体の半分以上かも。突然携帯の写真撮影会となり，「教頭先生隣へ！」イヤです。自分の欠点をさらけ出す２ショットは絶対！という次第でかの丸刈り君の紹介のカッコいい彼を必死に説得。このイケメン君がゲットできれば，後は生徒はおろか女子大生も大いに期待できる。 結果，もちろんゼロ。連絡先の電話番号にも当たりゼロ。でもめげない。まだ一校目。

（３）市内公立中学校②F 中にて

「名門F 中，気合で乗り切れ」

市内２校目はF 中。市内中央部に位置し，有名な普天間基地より二番目に近い学校(一番目は普天間第二小)。スポーツの栄冠数知れず・・県内制覇も数知れず(よって詳細は知らない)。武勇伝も数知れず・・・

参加は私，学生２名。伺うといきなり校長室へ。熱烈歓迎！だじゃれ口撃。いい人だ。当日は授業研究会で，生徒は下校中とのこと。急ぎ営業開始。通りかかる生徒が大きい。男女とも上背も横も大きい。これで中学生かと圧倒されては困る。気合を入れ，三年の廊下にいた一番怖そうなN 君に声をかける。ここは女学生の出番。パンフを手に説明すると，意外と照れて神妙に聞き入る。取り巻きの男子５名ほども，ちゃんと聞いてくれる。人は見かけによらないものだと感心！でも男子学生萎縮しきり。通りかかる生徒に聞けば，やはり「部活」関係が多く，時間はないとの断りが多い。中学校は「部活」「塾」が多く，出来そうな生徒ほど，このコメントが返ってくる。「なるほどね」と妙に納得。外に出ると先ほどのN 君関係が十数名。面白そうと行ってみると，中の一人が大事そうに何かを持っている。「何か？」と聞くと「これ！」缶の中にはシリケンイモリが一匹。赤い腹がかわいく光ってJ ターン。近くの川で取ってきたという。いつも持って歩いているようだ。意外とかわいい奴だ。皆なんとなく納得！さて気を取り直して営業再開。通りかかる生徒は部活関係が大半。そして生徒会・・　普通にヒマな子はあまりいないようだ。公立校は部活が盛んなほど，落ち着いているという。数週間前下見に来たとき，４時をはるかに過ぎているのに大半の学級は授業中で「補習」とのこと。「部活」「塾」＋「補習」。最近の子はなかなかヒマがないものだと，実感していたが，予想以上で苦戦。N 君たちのパワーが羨ましい。でもN 君を説得するのは難しいだろうなあ。あの子たちが十数年もすると青年会の主要メンバーとなって，地域興しの活性剤となるのかなと思案。ちなみに普天間中学校区は青年会もエイサーも盛んな地域である。

さて２校目。感慨に耽る場合ではない。とにかく人探し。というわけで女子に絞って手当たりしだいに声かけ作戦。全体的に大人びた子が多く，男子学生は苦戦気味。女学生はどこでも強い。スッと中に溶け込んでいける。これこそ「生きる力」と感心しきり。結果もちろんゼロ。簡単にゲットできるはずない。振られる体験こそ，生きた授業なのかと思いたくもなるが，少し疲れ気味。学生もだんだん少なくなって，不安・・。「明日はどっちだ！」

（４）市内公立中学校③G 中にて

「今時，ピンクレディーは現役だった」

市内３校目はG 中。宜野湾中古車街道の真中に位置。市内では珍しく制服がブレザーで，その分大人しく見える。女子はスカイブルーのセーラー服で，かなり大胆な色使い。目立つ！ 参加は私，学生２名。伺うと今度はいきなりプレイルームへ通される。何でも中体連の前で，男生徒有志による「応援練習」の参観。教頭先生は胸を張って「すごいでしょう」やはりすごい，けどせっかくの昼休み，遊びたいのではな

いのかなあ。営業開始。通りかかる生徒に，いつものように声かけ。しかしいつもと違って男子学生が元気。振り向くと，何と回りを女生徒が取り囲み状態。いつから急に饒舌になったのか？前の学校では「借りてきた猫」状態だったのに。人は変わるものだと感心しきり。今日の収穫はこれで十分(では困るけど・・)。教頭先生に再会。「体育館に行ってみては？」と言う。女生徒ほぼ全員による応援練習という。「またか」と思ったが，「まあついでに」と気を取り直して体育館へ。「暑い」。校長先生・教頭先生胸を張って「見てね」「見てます！」体育館をほぼ埋め尽くす女生徒。突然大音量で「UFO」2007 年の中学校で 1978 年の流行歌が流れている。そして全員一斉のダンス。(すごすぎる・・)またまた気を取り直して営業再再開。なぜか先ほどの「UFO」が耳元から離れない。各教室を回って声かけ。しかし元気な者は男女とも「応援練習」に出払って，残りは悠々自適に学校生活を楽しむ方々か。廊下の隅にスカートの短い女生徒が５名ほど。思わず「避けたい」しかし女学生はすたすたと歩いていく。仕方なくついていくと，私の顔を見るなり皆「正座」状態。真剣に聞き入る様子にびっくりしたが，なぜ急に良い子化したのか不明。後で女学生感心しきり。しかし未だ不可解。「怖そうなので，萎縮したか？」かなり寂しい。思えば娘も中２，同じ年頃か。最近殆ど無視されている。他人の子はよく話しかけてくれるのに・・。この年頃の女の子は苦手だ。

さて３校目。先程の「UFO」ショックで，スカウトの気がだんだん失せてきた。この学校は「中体連」一色。それが終わらないと，一人もゲットできないだろう。結果は引き続きゼロ。予想してはいたが，やはり痛い。他の学校の途中経過を聞いていると，かなり落ち込む。担当の K 先生のぼやきが聞こえるようである。「附属にしておけば良かったのに」S 先生は相変わらず鷹揚に構えている。

＊G 中その後「中体連総合優勝」「応援団賞」だったそうな。

やっぱりね。すごすぎる・・

（５）市内公立中学校④K 中にて

「仮設校舎に何を見た」

市内４校目は K 中。沖縄国際大学近くに位置。隣はカトリック中学校。マーチングが有名で，全国規模の大会を総なめ！現在は新校舎に移転したが，当時はプレハブ校舎に仮住まい中。県内有数の大規模校。

参加は私，学生２名。４校目ということで，もはや瀬戸際状態。着くとすぐ営業開始。男生徒のノリが良く，説明するとすぐ人だかりができる。どこへ行っても入れ食い状態。だがだまされない。ノリのいい奴はすぐ忘れる。ただその場を楽しんでいるだけなのだ。４校目で，私も学生も自然とそう思うようになってしまった。それでノリのいい男生徒を無視して，おたく系の女生徒探しとなる。しかし居ない。殆ど部活系の健康そうな子ばかりなのだ。声かけしても「部活がある」で断られてしまう。どうする？？プレハブ校舎は，一言で言えば「快適」。以前は防音効果がなく，上下左右から盛大に音が漏れてきたが，今はそれすら殆どない。クーラーはよく効いて，我校よりよほど快適である (築２７年目) 。トイレもちゃんとした器具が設置され，匂いもれなし。昔のプレハブを体験した者には感慨しきり(クーラーなしで，屋根にススキを敷いて，散水していたっけ?)。最近妙に感慨に耽っているが，もはや待ったなし。最後の学校巡りである。それにしてもきつい。僅か４校巡っただけなのに。つくづく営業の方々の苦労を思うと，涙涙である。

ということで今回も三振。予想通りに「振られた」わけだが，それでも痛い。

それで兼ねてからの計画通り

①学校訪問を終え

②学校推薦のお願いとなった次第である。

＊後で２名の応募あり→　万歳

（６）人集めについて(その後)

「どうにかセーフ」

結局公募でＫ中から２名，学校推薦でＦ中から２名の，４名となった。他に１～２名いたが，殆ど参加なしの状態であった。学生の反応は意外と「満足」。２名しかゲットできなかったが，「足で稼いだ」２名である。これは誇りに思ってよいであろう。

現在少子化の影響で，実際に大学の人集めが大変だそうである。公立学校は黙っていても人は集まる。しかし「学校選択制」で希望する学校に行ける状態になれば，公立学校も「人集め」に多大の苦労をする時代も近い(かもしれない)。

というわけで，人はどうにか集まった。これからゼミはどうなっていくのか。続きは後程・・・

（屋良和正）

第３節　SATT ゼミの具体的活動

（１）宜野湾のイメージの出し合い・グルーピング・共有

第１回目（10 月 20 日＜土＞）の日がきた。これから２ヶ月にわたる活動が始まる。学生たちはこれまで長時間をかけて準備をしてきたが，これからが本番である。みんな緊張して待っているが，生徒はなかなかこない。２０分ほど遅れてＦ中生徒２名，Ｋ中生徒１名くる。登録生徒のうち１名は発熱で，欠席との連絡が入った。授業の進行は一人の学生がすべて行うのではなく，節目ごとに学生が交代して行った。つまり全員で分担して行ったのである。まず副校長があいさつを行い，校長が概要を説明した。SATT ゼミの由来は『すてきなぎのわん見つける子の「Ｓ」，明るいあいさつ元気な子の「Ｓ」，楽しくみんなで学べるの「Ｔ」，Ｔ地域をつなげるねたてっ子の「Ｔ」』にあること，この模擬学校では，「人を通して宜野湾を再認識する」ことを目標に，新しいスタイルのガイドブックを作成する，そのために地域に出かけてフィールドワークをして，それを宜野湾紹介パンフレットにまとめるという活動をする，ということを話し，最後に，活動スケジュール，注意事項を話した。そのあと，緊張をほぐすために学生・教員・生徒の全員で自己紹介と簡単なゲームを行った。緊張が解けたところで２つの班（１名と２名）に分かれて，それぞれに学生が数名加わり，授業の中味に入った。「宜野湾の○○をアピールしよう」という課題を提示して，それぞれのグループで思いつくまま○○を付箋紙に書き出していった。まだ緊張があるのか，それともこのような作業に慣れていないのか，生徒からあまり出ない。学生がそばについてアドバイスをして，なんとか様々な考えを引き出すことができた。考えを付箋紙に書き，それを黒板に貼り付け，重なっていないかを確認し，そのあとで大きくグルーピングしていった。この作業は意外と時間がかかったが，あれこれ出し合い，おもしろく進めることができた。その結果，「人」（名物おばあ，おじい，かわいい人，かっこいい人，おしゃれな人，外国人，はごろも伝説，スーパー女子高校生，元気がいい子ども，すごくやさしい近所の人，ベイスターズ，アクターズスクール，安全を守る人，警察官，交番，警察署），「学校」（運動会が派手な学校，一番大きな学校，カトリック小中学校，部活の元気な学校），「食べ物」（しにせ，おかし，おいしいお店，行列のできるお店，カキ氷屋），「乗り物」（国道３３０，宜野湾をよく通る車の種類），「生き物」（動物，にゃんこ，花，魚，さとうきび，並木道，トロピカルビーチでアーサが採れる，道に生えている食べられる物），「おまつり」（エイサー，地域の祭り），「場所」（基地，普天間基地，トロピカルビーチ，嘉数高台，デートスポット，心霊スポット，森川公園，公民館，ハーブ園，映画やドラマの撮影場所となったところ，遺跡，レジャー施設，きれいな景色の場所）が大きなくくりとしてあがった。

（２）パンフレットの対象設定とコンセプト

第２回目（１０月２７日＜土＞）は，それぞれのグループの活動を始めるにあたって，誰を対象にしてパンフレットをつくるのか，どのような雑誌にしたいのか，何を取材内容にするのかをグループで話し合

った。

第１回の復習を前回参加生徒２人に説明させたあと，「誰に向けて発信したいか」を質問した。すると，外国人，観光客，県内の人（宜野湾以外の人），宜野湾市民，中学生，身近な人，学校関係者，カップル，ファッションが好きな人，オタクなど実にさまざまな対象者があがってきた。このままでは収拾がつかなくなるので，「ひとを通して宜野湾を再認識する」を意識させ，そこから対象者をしぼっていった。外国人，身近な人，カップルが残り，３者に共通しているのは「ぎのわん市民」であることに着目し，「ぎのわん市民」という大きな枠でくくった。

次に，どのような雑誌にしたいかについて，雑誌の内容，方法，雑誌のイメージ（こんな雑誌にしたい）を出し合った。こうして，次のことが決まった。

◎ぎのわん市民向けのパンフレットを作成する

・ふりがなをつける（小中学生も読めるように）

・英語のページを準備する（外国人のために）

・内容をより具体的にする

・表紙を工夫する（手にとって見たくなるようなもの）

→写真を入れる，地図を載せる，よくある場所の紹介など

そのあとグループに分かれて，テーマ（取材内容）を設定した。Ｋグループは次回までにテーマを決定してくる，Ｆグループは友だちリレー（小中学校，友たちを取り上げる）に決めた。取材対象者や取材内容を考えることを宿題にして終えた。

（３）グループに分かれてのテーマ・取材内容・紙面構成の決定

第３回（１１月１０日＜土＞）は，グループに分かれてテーマ・取材内容を決めていった。テーマ・取材内容の決定において，何か注意事項のようなものが必要だと考えて，授業者のほうで「インタビュー虎の巻」のプリントを用意した。

「インタビュー虎の巻」は，聞きたいことの観点（①どうしても聞きたいこと，②できれば聞きたいこと，③時間が余ったら聞きたいこと，④その他気になること），「インタビュー心得十か条」（相手の話に相槌を打つべし，取材目的を説明すべし，順序だてて説明すべし，会をのキャッチボールを遵守すべし，記録を怠るべからず，大きな声ではっきりと，時間厳守を徹底せよ，口だけでなく目で会話せよ，笑顔で話すべし，相手の話は最後まで聞くべし）を示し，これをよく読んでインタビューの内容を考えていった。

第４回（１１月１７日＜土＞）では，前回では取材内容が終わらなかったので，二つのグループに分かれて，取材のときの質問を具体的に作成した。複数の取材者があるときには「共通質問があったほうがよい」などとアドバイスをした。そして，アポ取りの計画を立てた。そして，地域探検をしながら取材の練習をした。お互いの地域を紹介しながら，取材の練習を行った。

第５回（１１月２４日＜土＞）では，各グループの進行状況を報告し，そのあと，パンフレットの構成を考えた。つまり，グループで，①紙面の数を決める（何ページの紙面にするかを決める，表紙の構成を考える），②紙面の構成を話し合う（必要な写真を決める，記事内容の構成を考える）ことを行った。そのさい，JTA の機内誌を見本として見せて，紙面の構成の参考にさせた。そのあと，今後の予定について話し，取材の手順を確認し，１１月中に取材を終えるようにすることを話して終わった。

（４）各グループの取材活動

①Ｆグループ

Ｆグループは，「ぎのわんちゅ取材リレー」をテーマとし，地元の友だちや小中学校，地域の人を取り上げて，“人”に焦点をあてて取材を行うことにした。

取材のアポ取りは生徒たちが行った。このアポ取りに際しては，実は授業者グループからは，小学校長

あてに，「後日，中学生が取材協力のお願いを電話にて申し上げることになっておりますので，ご協力くださいますようにお願い申し上げます」旨の依頼状を学校長に送ってあった。母校の小学校にて，校長先生，恩師の先生，後輩をインタビューした。校長先生とは１時間も話しこんでしまった。

②Kグループ

ワークショップであげられた宜野湾市の特徴の中から，パンフレットに盛り込む項目を選定した。その結果，宜野湾のおいしいお店，安全を守る人々，道に生えている食べられる草，の３つになった。そのあと，「宜野湾のおいしい店」の調査のために，琉球大学構内で学生たちに突撃インタビューを行った。それを参考にして，インタビューであげられたお店へアポ取りを行った。そして，インタビューの質問項目をあげ，質問の優先順位をつけていった。宜野湾市内の２つのお店（食事処「大京」，キングタコス）でインタビューを行った。インタビューを記録に取り，写真も撮影した。日頃気づかないことがたくさんあり，おもしろい発見をした。この時期に那覇市の奥の山公園で沖縄の産業祭りが開催されることを思い出し，「そうだ，産業祭りに行こう」ということになった。「宜野湾市の特産品」という項目を新たに追加し，田芋パイの製造・販売を行っている「田芋パイ・なかとみ」さんにインタビューを行った。

インタビューを終えたあと，記事づくりにとりかかった。パソコンのイラストレーターを使って，「大京」「キングタコス」「なかとみ」の記事の作成・訂正・推敲に取り組んでいるところである。

（５）パンフレット発表会

12 月は，大学生は卒論で，また中学生も期末試験で忙しく，中断してしまった。しかいほぼできあがっており，パンフレットが印刷されてくる２月中旬に，パンフレット発表会を開催し，取材協力していただいた方などを招いてお披露目を行う予定である。

第４節　SATT ゼミの報告――模擬学校最終報告会（12 月 22 日）――

他の３学校とあわせて「最終報告会」をしなければならず，SATT ゼミは 11 月にはいってその準備に取りかかった。これまでの記録，授業実施で使った資料をもちより，パソコンで送信し，プレゼンテーションソフトを使ってプレゼンテーション資料を作成した。この作成には，卒業生のメンバーが大活躍し，わかりやすく，かつ説得的にまとめてくれた。前日に予行演習をしたが，手持ちのパソコンでは容量不足で作動せず，急遽，Y 先生のパソコンを借り，ようやく一通り流すことができた。そのあと，不充分な点を指摘し，ナレーション等を修正して予行演習を終えた。

発表会当日，発表担当の学生が直前まで来なくて，教員はやきもきしたが，発表はなんとか無事に映像を見ながら３名の学生が交代でナレーションを説明した。当日の質問としては，「参加した子どもの思いと学んだについて語ってほしい」で，学生たちは「子どもたちはこの取り組みをとおしてコミュニケーション能力がついた。また，主体的に参加するようになった。」と答えていた。発表の最後に，担当教員を代表して，宜野湾市立志真志小学校教頭の屋良先生が SATT ゼミの特徴として，「①学校に出向いて生徒に話しかけ，SATT ゼミへの参加を誘った，②このゼミでは，実施前の準備，とくにコンセプトづくりに時間をかけた。自分たちで見本を作ったり，ブレインストーミングをしたりして，作成の過程を体験した。③学生たちも学びながら生徒を導いていくことができたのでではないか。④自分で足を運んで現場リポートをしていった。」の４点を話した。

発表を聞きながら，時間をやりくりして様々な困難を乗り越え実践してきたことが，この SATT ゼミの準備にかかわり実際の授業につきあった者として実感できた。

第５節　学生による SATT ゼミの評価

デジタルペンで授業ごとに評価し，その変化によって学生の成長を見ることになっていた。デジタルペ

ンを使った評価については，評価体制がきちんとしていなくて回を追うにつれてデータ入力が少なくなった，データ分析ができなかったこともあり，このたびの報告において活用できなかった。そこで，報告を書くにあたって実施に携わった学生に簡単なアンケート調査を行った。このアンケート調査への回答をあげることで，長期間にわたるSATTゼミの評価に代えたい。

(1)　SATTゼミの活動で得たこと・困ったこと

●準備段階において，コンセプトをまとめ，興味がもてる企画・広報を行うことの難しさを学んだ。また，生徒を集めることの大変さもわかった。

●準備段階において，生徒集めに時間がかかってしまったので，活動計画はぎりぎりまで決定できなかった。しかし，毎時間の進行状況に合わせて，うまく活動の計画を変更したり調整したりすることができていたと思う。

●活動をとおして，徐々に役割分担をしながら準備や計画を練ったりすることができ，グループ活動になったら個々の特性を生かしながらグループをまとめていたと思う。

●はじめの段階では，学生の中で，生徒との距離がある人とそうでない人とがいたが，生徒と一緒に考え意見を出し合う中でコミュニケーションが生まれ，打ち解けていこうという姿勢ができていた。

●話し合いがスムーズに行くようにつねに心がけたので，ファシリテーション能力が向上したと思う。

●生徒の数が少なく，一人当たりの負担が大きいので困った。

(2)　SATTゼミを通しての，教員としての自分の資質・能力についての自己認識と認識の変化

①子どもや同僚とのコミュニケーションについて

●生徒とは1，2度しか会っていないためわかりません。同僚とのコミュニケーションについては，意思の疎通が図りにくいと感じることがあった。

●初期段階では，発言しない生徒への配慮が不十分だったと思います。他人からの評価で気がつき，それ以降は改めました。

●子どもとのコミュニケーションについては，自分から積極的に話しかけたり，意見を聞くように心がけました。ただ，しゃべりすぎるところがあったので反省です。

●同僚とは話し合いを密に重ね，役割分担をするように努力しました。活動計画においては，一人ひとりが意見を出し合って納得がいくまで話し合いをしました。

●子どもとうまくコミュニケーションが取れない同僚に対しては，生徒と関われるように次回の教師役をお願いしたりして，生徒と私たちがうまく関わる機会がみんなにいきわたるように配慮しました。

②子どもや同僚との協働性について

●同僚との協働性について，分業をする上で，反応のなさ・遅さなどにとまどった。しかし，それは社会人として私たちがアドバイスをすべきところだったと思い，反省している。また，反応は遅いと思われたが，直前に意見を活発に交わし，詰めるなど，行動力に感心した。もっと，意思の疎通を図ることで，お互いの長所を活かした活動ができたのではないかと感じる。

●ほとんどの作業を生徒と協力して行ったので，とくに問題があるとは思いません。

●生徒とは，グループ活動において，インタビューの準備や取材に行ったりすることで協働性が生まれたと思います。SATTゼミの活動時間以外に集まって計画立案や取材をしたので，自然とお互いに協力して活動ができていたと思います。

●各時間の活動が円滑にいくように，教師役以外のメンバーも進行状況を見ながらサポートしたり，授業後に反省会等でアドバイスを出し合ったりしました。

③授業における教材内容の工夫について

●ワークシートを毎回作成して，毎時間の内容をまとめたり，復習することに役立てるようにしました。

●グループでの意見交換等の時間をできるだけ確保するようにして，より多くの生徒の意見を引き出せる世にしました。
●後半になるにつれて創意工夫が見られなくなった気がしました。
④指導計画と指導の実際について
●指導計画を立てていない回もあり，計画をきちんと行い進める必要があったと思う。計画を立てていれば，毎時のすべきことがはっきりし，発表までに作品が仕上がり，活動の様子がもっとプレゼンテーションに生かせたのではないかと感じる。
●当初の計画よりもだいぶ遅れをとってしまいました。進行のやり方が悪かったというよりは，計画作成のほうに問題があったと思います。見通しが甘かったため，計画に無理があったのではないかと思います。
●指導計画どおりにはなかなか進めることができませんでした。その中で，生徒の状況に合わせて進めたりして，臨機応変に対応していたと思います。
●できなかった部分に関しては，宿題にしたり，後日集まったりして各自対応しました。
⑤子どもの実態把握について
●グループ活動の中で，一人ひとりの特性を理解する機会ができたと思います。
時間外でのグループ活動にはすべて参加するようにして，状況の把握に努めました。また，毎時の活動内容をまとめ，写真で記録することで，より個々人の様子を理解することができました。
(3)　デジタルペンを用いた評価システムについて
●準備段階が評価されない，評価項目が実際とずれている，ペンの用途がよくわからないなど，疑問が多かった。
●デジタルペンでの評価で，自分の実態把握のまずさに気づくことができ，改善できたと思います。
●他者からの評価は必要ですが，デジタルペンをわざわざ使う意義がわかりません。
●手間がかかって面倒。
●自己分析や振り返るができて，今後に反省を生かしていくことができたと思う。相互評価をすることで，客観的に自分を捉えることができ，自己分析に役立ったと思います。
●評価に関して，項目が多いことで評価が曖昧になったり，適当になったりしている面があると思います。評価項目については，少し厳選して，わかりやすくしたほうがいいのかなと思いました。
(4)　SATT ゼミの活動についての感想
●SATT ゼミに参加したことで，学生との感覚のちがいを実感することができた。意思疎通を図り，お互いの長所を生かし助け合うことや，お互いがもっているノウハウを引き出し，教えあうことがもっと必要だったと感じる。また，子どもと触れ合うことはとても楽しく，子どもと触れ合う仕事がしたいと再認識できた。
●生徒の集め方ですが，学校推薦で集めてもよかったと思います。生徒に配ったパンフレットも中途半端な数で少なすぎました。カラーでなくてもよいので，生徒全員に配布すべきだったと思います。
●個人的には，観光協会やNPO，地域振興課などの協力もあったらよかったように思います。
●１つのものをともに作り上げるという活動の中で，生徒・教師の枠を越えて同じグループのメンバーとして協働することができ，私自身たくさんの刺激をもらうことができました。先生－生徒という関係よりも，おねえちゃんと子どもたちみたいな近い関係で活動できて，楽しく参加することができました。
●今回の事業で，自分の欠点やよいところなどを自分自身で再確認することができました。このことは教師を目指すのみならず，今後の人生において役に立つだろうし，生かしていくことができると思います。自分の長所を伸ばしていくような教育であったり，人との付き合いであったり，そのような生き方をしていきたいと思います。

第6節　教員によるSATTゼミの感想

SATTゼミの準備は8月下旬から開始し，10月20日の授業開始まで，宜野湾パンフのイメージづくりに時間をかけた。また，「学校推薦にすると簡単だが，それではおもしろくない」という理由で，生徒に呼びかけたものの思うように集まらず，再募集，学校長への依頼など，かなりの労力を費やした。毎回の授業案，授業で使う学習シートの作成は，1・2回目はよかったが，後は準備が足りなかったように思う。授業の本番にいたるまでに全体の構成をしたのだが，実際の場面になるとちがうのかもしれない。活動開始前にある程度はやったつもりではあるが，特に今回のような長期にわたる取り組みの場合には，全体の活動計画の見通しをもう少し綿密にしておく必要があった，全体の活動計画の明確化とその共有が不十分だった，と反省している。

また自力での生徒集めにこだわったために参加した生徒が少なかった。このことが活動の性格を規定した。人数が少ないために集団把握というよりは個別指導的関係になってしまった。個別指導にも特有の難しさがある。生徒とのコミュニケーションにおいて，教えすぎてもいけないし，かと言ってほおっていてもいけない。生徒の気持ちを考えて，適切な間合いを取る必要があるが，間合いの取り方は経験的にしか学べない。学生たちはこの難しさを認識し，回を重ねるにつれ，アドバイスの仕方にも慣れていったように思う。この点では成果があったように思う。長期間の取り組みにおいて個々の時間内でできずに終わったことも多かったが，その分，宿題にしたり，後日集まって対応したりしたと学生の一人は書いている。おそらくこのような臨機応変の対応は，パンフレットづくりのような長期的活動の場合には避けられず，学校カリキュラムで言えば総合学習のような授業においてどのように関わるかを学ぶことができたのではないかと考えている。それだけに，このような対応を，どの程度学生たちの間で共有できたのかの検証が必要ではないかと思う。また，長期にわたる活動では，日程をきちんと決める，連絡する，確認するという基本的なことが大切になるが，このことも十分にはいかなかった。社会人の参加学生が「反応のなさ・遅さ」という形で指摘しているが，この種の共同制作活動の場合これらの実務をきっちりすることが協働の上で大切になるが，この点で不十分であったと指摘できる。課題が残ったように思う。

デジタルペンによる評価は，SATTゼミのような少人数の学生と生徒が対象であっても難しかった。項目数が多く，「評価が曖昧になったり，適当になったりしている面がある」。「手間がかかって面倒」という側面もある。また，デジタルペンによる評価に気をとられて授業での様子の観察が不十分になったきらいがある。項目数を少なくし，もっと簡便に使えるような評価システムに改善する必要があるように思う。

一回切りの単発の授業の積み重ねとはちがって，長期間のとりくみで何かを制作していく場合の「デジタルペンによる評価」は「評価項目が実際とずれる」ことも起きるので，評価項目等の見直しが必要であろう。4年次という卒論で忙しい時期の学生には，単発の（1回きりの）授業であればまだしも，長期にわたる制作活動の経営をするのはやはり厳しいといわざるを得ない。しかし長期にわたる制作活動の経営も教員としては必要な力量の1つであり，どのようにしていけばよいかは今後詰めていくことが求められよう。また今回のSATTゼミでは，見守る教員の側もそれぞれ出張等が入り，参加できない回が多々あり，継続的に観察・指導することが困難になってしまった。教員側の連携を含めて大きな反省点である。

（藤原幸男）

第６章　「コックさん学校」の実践

第１節　設立と理念

「コックさん学校」とは，国語（こくご）と算数（さんすう）の学校であることを意識して参加学生たちが考えた呼称である。

このたびの教員養成改革モデル事業では四つのプラクティススクールが設けられたが，他の三校は学生たちが自主的に出したアイディアによって設立されたものであり，比較的企画性やレクレーション性が強い学校だと言える。しかし「コックさん学校」だけは，実際に「教職実践演習」として実現されることを想定した場合「教科」を意識したスタンダードな学校も作ったほうがよいという意向により，学部教員WGのほうから予め「国語と算数の学校を創る」という枠組を示したうえで参加学生を募集し，設立された学校である。

上述のような事情で，「コックさん学校」の理念についても世話役の学部教員が予め大枠を提示したわけだが，児童集めの段階で各小学校に配布する第一次案内文書を作成する際に，学生たち自身が校長を中心にわかりやすく理念をまとめたものがあるので，以下に引用する。

このたび琉球大学教育学部では，学生有志が「先生」となり，10 月から 12 月にかけて，いくつかのプラクティススクール（模擬学校）を運営することになりました。

そのひとつが，７週にわたり土曜日の午前中を使って，国語と算数を楽しく勉強する「コックさん学校」です。料理教室のような名前ですが，「コック」は「国語（こくご）」・「さん」は「算数（さんすう）」，合わせて「コックさん」です。

「コックさん学校」は小学校四年生の皆さんを対象に，四年生前期までの学習事項をふまえて，遊びの要素を取り入れながら，楽しく国語と算数の授業をおこないます。楽しみながらも，今まで習ってきた国語と算数の知識を確認し，それを応用する力を育てていきたいと考えています。20～25 名くらいの子どもに 12 名の先生（学生）がつき，親身で丁寧な指導をしたいと思います。

参加費は無料です。国語や算数が得意な子だけでなく，苦手な子も「大歓迎」です！　土曜日のひとときを，やる気いっぱいの先生（学生）たちと一緒に過ごしてみませんか？

第２節　活動の全容

(1) 校務分掌

国語担当	内間　清香（うちまきよか）	国語科４年	校長先生・ＰＴＡ係
	上江洲貴代（うえずたかよ）	国語科４年	教頭先生・国語主任
	池田　書人（いけだふみと）	教育学３年	美化・衛生主任
	岩田　友紀（いわた　ゆき）	国語科３年	保健・交通安全主任
	楳田　千尋（うめだちひろ）	国語科３年	学務主任
	小菅　美咲（こすげみさき）	国語科２年	会計主任
	土井　智康（どいともやす）	数学科４年	副校長先生・ＰＴＡ係

算数担当	外間　博樹（ほかまひろき）	数学科４年	算数主任・生徒指導主任
	中村　倫子（なかむらりんこ）	数学科１年	児童会＆レクレーション担当
	仲本　琴美（なかもとことみ）	数学科１年	児童会＆レクレーション担当
	平敷ひなた（へしきひなた）	数学科１年	児童会＆レクレーション担当
	吉里恵理子（よしざとえりこ）	数学科１年	児童会＆レクレーション担当

(2) 活動内容（準備から事後処理まで）

月	日	内　容	活動者(※学部教員)
8		参加学生の募集・申込み	
9	1	各小学校に配布する宣伝ポスターの作成	全員
	7	宜野湾市立嘉数小学校で宣伝活動，第一次募集	内間 上江洲 ※萩野
	10	宜野湾市立志真志小学校で宣伝活動，第一次募集	土井 外間　※吉葉
	12	宜野湾市立長田小学校で宣伝活動，第一次募集	１年次４名 ※萩野
	20	第一次応募者に入学案内を配布，最終申込み受付け	※萩野
	28	最終申込み締切，参加児童の確定	
	29	全体会議①（授業の内容について）	全員　※萩野
10	3	全体会議②（学校ロゴの決定，授業日程について）	全員　※萩野※吉葉
	8	全体会議③（学校目標の決定，指導案の検討）	全員　※吉葉
	10	全体会議④（学校通信の内容決め，指導案の検討）	全員　※萩野
	13	コックさん学校①（開校式･算数１）　放課後会議	全員　※萩野
	20	コックさん学校②（国語１･算数２･特活）　放課後会議	全員　※萩野
	27	コックさん学校③（国語２･算数３）　放課後会議	全員　※萩野※吉葉
11	3	全体会議⑤（中間総括，後半の指導案検討）	全員　※萩野
	6	沖縄タイムス教育欄にコックさん学校の記事掲載	
	10	コックさん学校④（国語３･算数４）　放課後会議	全員　※萩野※吉葉
	17	コックさん学校⑤（国語４･算数５）　放課後会議	諸行事あり一部欠席
12	1	コックさん学校⑥（国語５･算数６･特活）　放課後会議	全員　※萩野※吉葉
	4	卒業証書作り（７日まで）	全員
	8	コックさん学校⑦（国語６・卒業式）　放課後会議	全員　※萩野※吉葉
	12	全体会議⑥（最終反省会）	全員　※萩野
	22	プラクティススクール報告会	池田，岩田

第３節　児童集めの経緯

本学校は当初，宜野湾市内の４つの公立小学校および教育学部附属小学校から児童（4年生）をそれぞれ5名程度，計20～25名の規模を想定して，募集を開始した。ところが3公立小学校で宣伝活動を行い第一次応募者を把握した段階で予想以上の反響があることがわかり，宣伝活動の調整がついていなかった１公立小学校と附属小学校からの募集を取りやめることにした。

３公立小学校の第一次応募者を対象に学校の内容を具体的に紹介した「入学案内」を配布，保護者による送迎のお願いや500円の傷害保険加入の案内等をし，最終申込みを募った結果，44名の児童（男子14・女子30）の参加が決定した。

第４節　具体的活動

４－ｉ）日程と授業・活動内容

		１校時	２校時	３校時
第１回	10／13	開校式 初めて会う先生・友達に慣れるため自己紹介をゲーム形式で行う。	算数「21を言ったら勝ち！」（外間） 「割り算と余り」の法則性を応用したゲームに挑戦。	
第２回	10／20	国語「絵本を作ろう！」（内間） 白黒の絵から成る元本に文章や色彩を加えてオリジナル絵本に。	算数「サイコロ」（中村） 六面体のサイコロ作りを通して各面＝正三角形の性質を理解。	特別活動（すごろく）
第３回	10／27	国語「詩を楽しもう！」（楳田） 題名当てや隠した部分の言葉の想像を通して詩を身近な存在に。	算数「ピラミッド」（仲本） 各自が展開図から立方体を制作，それらを組合せピラミッド作り。	
第４回	11／10	算数「水時計を作ろう」（土井） ペットボトル２本を繋ぎ合わせて水を入れ，５秒が測れる時計に。	国語「書写 点画の接し方を知ろう」(池田)　「口」の中の点画の有無で終筆が違う…丁寧に書いてみよう。	
第５回	11／17	国語「新聞漢字ゲーム」（小菅） 新聞記事から指定の部首を持つ漢字を探す…漢字が楽しいものに。	算数「三角形の３つの辺」（平敷） 様々な長さのストローを使い，いろいろなタイプの三角形を発見。	
第６回	12／1	国語「漢字カルタを作って遊ぼう」(上江洲) 部首・部首名・漢字例を組み合わせた漢字カルタの制作。	算数「円の世界」（吉里） 円周と直径を測り円周率＝約３を発見。無限の円周率に驚きが！	特別活動（漢字カルタ）
第７回	12／8	国語「絵本かんしょう会」（岩田） 第２回で創り始めた絵本の完成品を読み合い，感想を交流し合う。	卒業式 一人一人に手作りの卒業証書が授与され，別れを惜しみました。	

４－ii）学校開催日のタイムスケジュール（２校時の場合）

08:30　出勤&会場設営
09:00　ミーティング
09:30　児童のお迎え＆授業準備
10:00～10:05　朝の会
10:05～10:45　１校時
10:55～11:35　２校時
11:35～11:40　帰りの会
11:40　児童の見送り＆会場片付け
12:00～13:30　リフレクションシート記入＆職員会議

４－ⅲ）授業の内容――指導案からの抜粋――

（紙幅の都合上，単元名／単元目標／単元について―教材観のみを紹介する）

国語（全６時）

第1時&第6時『絵本をつくろう』『絵本かんしょう会』

単元目標

①考えたことや想像したことを言葉に表し，人に伝わるように表現上の工夫をすることができる。（書く力）

②生活や体験を通して，絵とタイトルから物語を想像することができる。（想像する力）

③友達の作品を読み，自分の考えや表現の方法との違いを楽しみ，その良さに気付くことができる。（読む力）

④発表として，自分の作品を読み聞かせすることができる。また，自分の作品と比べながら友達の読み聞かせを聴くことができる。（話す・聴く力）

単元について―教材観

本単元は「絵本をつくろう」という教材を設定し，想像を広げ順序よく絵に対応した物語をつくり，最後にみんなで観賞会をする構成にした。絵本に文字はなく，絵と，最初の『○○を探しに』というタイトルの設定しか決まっていない。そのため，自分で想像を広げながら絵にあった文章を組み立てて，書き込んで楽しむ教材となっている。この教材を通して，書くことについての四学年の目標である「段落相互の関係などを工夫して文章を書く」力や，相手や目的に応じて「適切に表現しようとする態度」を身に付けさせることができるのではないか。

絵本に描かれているキャラクターはシンプルなもので，自由に名前を付けたり，何かに見立てたりすることができる。このキャラクターが『○○』を探して旅をするのだが，『○○』の部分は子ども達に考えてもらう。探しているものとは，手にいれたいもの・欲しいものなどの象徴として，子ども達は自らの生活経験を反映させて物語をつくることができる。なぜ『○○』を探しているのか，どこを探せば見つかるのか，など想像を膨らませる。最後のページは空白になっており，探し物が見つかった様子を絵とことばで表す構成となっている。何かを探しているというテーマはみんな同じだが，最後に何を見つけたかで個性が現れるようにした。

最後の授業で鑑賞し合うという学習活動を展開するにあたって，読み手にストーリーが伝わるよう，書く内容を整えたり，字を丁寧に書いたりする児童の姿が期待される。さらに，自ら進んで工夫しながら取り組む態度も期待される。この活動を通して友達の良さを発見し，友達と知り合う喜びや，友達の考えを認め合いながら活動する楽しさも体験する事ができるであろう。

第2時『詩を楽しもう』

単元目標

①詩独特の抽象化された表現やリズムを楽しむことができる。

②短く凝縮されたことばからイメージを広げることができる。

③詩の内容から情景を思い浮かべ，詩の一部を創作することができる。

単元について―教材観

本単元では，詩の中にあることばの表現やリズムの面白さに着目するため，まど･みちおの『タンポポ』と『メモあそび』『けしつぶうた』からの数編を用いる。

『メモあそび』『けしつぶうた』のシリーズは対象を作者が独自の視点から捉え，30 文字程度で表し

た短い詩である。抽象的に描かれた内容から一つ一つのことばの意味やイメージを捉え，自分の中で再構築し，具体的なものの名前へつなげていくことに適しているといえる。ことばへの感覚を敏感にするとともに，行間を読むことや内容の中心を読むちからを身につけさせていきたい。もう一方の『タンポポ』では，動物という他者になりきって対象を捉える活動を行う。タンポポということばのもつ音の響きと，動物の鳴き声や名前の音（『テン・トウ・ムシ…タン・ポン・タン』など）に着目させる。簡単なことば同士の掛け合いを楽しみながら創作することができるだろう。最終的には全員の作品を一行ずつ繋げ一編の詩に仕上げる。学校全体で一つのものを創る一体感と達成感を味わってもらいたい。

第3時『点画の接し方を知ろう！』

単元目標

①基本的なポイントを知ることで，他の字はどのようになっているのか興味を持つことができる。

②『口』と『田』を書き，終筆の違いを意識して書くことができる。

③『口』の中の点画の有無で，最終画の接し方が違うことを知ることができる。

単元について—教材観

本単元では，普段何気なく書いている文字の点画や接し方などの基本的な書き方を知ることにより，今までと違った文字の見方が出てくると思われる。そこから文字を意識して書くことにより，普段書く字もよりていねいに書くことができると思われる。

単元の中で，『口』と『田』を書くことにより，『口』の中に点画があるのとないのとでは，終筆の書き方が違うなど，文字の基本的な決まりを知ることにより字形が整ってくるなどを意識させ，普段書く字も点画や接し方などを意識して書かせるようにしたい。

第4時『新聞漢字ゲーム』

単元目標

①漢字の組み立てについて理解する。

②指示された部首を持つ漢字を，新聞の中から探し，書き取る事ができる。

③漢字を探し，書くことにより，漢字の特徴について認識を持つ事ができる。

単元について—教材観

本単元は，新聞という身近な材料を使って，ゲーム形式で，漢字の持つ特徴を，児童に認識させていけるような内容にした。指示する内容に従って漢字を探していくことで，学習指導要領に記載されているような，漢字の組み立てについての知識をもつことができる。

本単元は，個人作業が中心となる。新聞から漢字を探し，見つけた漢字に印をつけ，ワークシートに探した漢字を書き込む，といったように一人ひとりが，探す・書くといった作業を行うことが出来るので，目標の達成に繋がる。今回は，漢字を覚える事が目的ではないので，習っていない漢字も対象とする。

第5時『漢字カルタをつくってあそぼう』

単元目標

①漢字のへん，つくりなどの構成に着目し，理解することができる。

②漢字辞書の使い方を理解し，部首から漢字を調べることができる。

単元について—教材観

漢字は表意文字で，一文字ずつにその意味がこめられている。そして，部首にも意味があり，たとえ

ば「さんずい」など，その部首を持つ漢字は水のイメージをもつように，部首からもその漢字のイメージを読み取ることができる。４年生までに学んだ漢字の構成についての知識を得ながら，こうした漢字の「へん」，「つくり」，「かんむり」，「あし」，「にょう」，「たれ」などの意味を理解していくことは，今後の漢字の学習にも大いに役立つものである。漢字の学習というととっつきにくく思う児童もいると思われるが，漢字カルタ作りを通して楽しく漢字を調べ漢字の構成に着目し，さらにカルタで遊ぶことによって様々な部首も学んでいけると思われる。

本授業の山場であるカルタ作りでは「部首の名前」，「部首の特徴」，そしてその「部首仲間の漢字」を漢字辞書で調べることにより，漢字の構成についての知識を身につけて行く。また，漢字辞書を実際に利用しながら調べていくことで，辞書を引く力も身につけさせたい。

算数（全６時）

第1時『21を言ったら勝ち！！』

単元目標

ゲームに「必勝法」があることに気付き，自らその方法を探し，積極的にゲームに取り組むことができる。

単元について—教材観

ゲームに「必勝法」が存在することで，生徒もそれぞれ算数の授業と意識せずに算数が苦手な生徒も興味・関心が持てることを目指した授業である。

最初にみんなの前で生徒代表と教師が勝負して先手でも後手でも（少なくとも先手なら）生徒に勝てることを見せることで，児童同士でゲームを始める前に「どうすれば勝てるのか？」という疑問を芽生えさせるようにして，興味・関心が芽生えるように授業を展開していき，グループ学習の時間内に必勝法が見つからないようであれば，「勝っている人はいつもどんな数字を言っている？」というような質問を投げかけて，「１７」を言えば勝てることに生徒が気づいたならば，どうすればかならず「１７」を言えるのかを考えさせるような展開に持ち込む。

第2時『サイコロづくり』

単元目標

①児童がサイコロ（六面体）に興味を持つことができる。

②正三角形の性質（辺の長さや角の大きさ）について理解することができる。

③サイコロの面を観察し，その図形を構成する要素に着目することができる。

単元について—教材観

本単元は児童の身近にあるサイコロを用いることにより知的好奇心を喚起させることができる。また，サイコロを作るため六面体の面を画用紙に写し取る作業を通してサイコロを構成する面の特徴に自然に触れ，四学年の目標である「図形を構成する要素に着目する」力を身につけることができる。さらに，四学年で扱われる正三角形の性質（辺の大きさや角の大きさ）について理解することができる。

第3時『ピラミッドをつくろう』

単元目標

①展開図から立体図形を完成させる作業の中で，立体図形について興味・関心を持って取り組むことができる。（興味・関心）

②立方体を作り，それらを組み合わせる作業の中で，図形の構成要素に注目することができる。（考察）

③一人一人が作った立体図形を組み合わせて，５つの段からなるピラミッドを完成させるには，何個の立方体が必要なのか理解し，積み上げることができる。（理解・表現）

単元について—教材観

図形についての観察や構成などの活動を通して，図形についての理解を深めることができる。自分の体よりも大きなピラミッドを完成させるので，児童らの関心を高め，楽しみながら取り組むことができ，また，全員の力を合わせてひとつのものを完成させるので，協調性を養うことができる。その中で，三学年で学んだ箱の形を復習し，応用として平面から立体への構成について学ぶことができると共に，図形の構成要素に着目できる。また，ピラミッドを完成させるのに立体の個数，規則性を考慮する必要があるので，自然に数と計算についても学ぶことができる。

第４時『水時計を作ろう』

単元目標

①時間を計るということが，かさを量る，重さを量る，長さを測ると比べて，どのように異なり，なぜ困難なのかを学ぶ。

②実際に時間を正確に計る方法を進んで調べ，考えようとする。

単元について—教材観

本教材は第三学年で学習した時計についての学習である。時間を実際に計るとはどのように行うのかという身近な疑問について考えることにより，ある量を他の量に置き換えて計るという関数についての考え方を学ぶことが出来る。また正確に時間を計るための方法が何か，推論を交えながら予測する力を学ばせたい。

第５時『三角形の３つの辺』

単元目標

①三角形を自ら表すことで，三角形の特に辺，ないし辺の長さに興味・関心を持ち，学習の発展へとつなげることができる。

②自ら自由に三角形を作りだしたり，三角形を種類によって分別したりしていくことで，図形に関する数学的な思考力・考察力を向上させることができる。発展的な学習として三角形が成り得ない辺の理解も促し，更なる思考の向上をはかる。

③三角形を種類分別する際に，辺の長さに着目すればよいということを理解し，発表を通して数学的な考えを表現することができる。

単元について—教材観

ここでは平面図形の中でも基礎的で，かつ平面的思考の基盤となるであろう三角形を扱う。三角形は辺，角，面で構成されている。自らストローを辺として，図形を紙面に表すことで自然と辺，角，面を認識しながら平面図形を頭の中で描き出すことができる。それは，更に発展的な図形に進んだ際に，理解の手助けとなるだろう。

また，自ら描いた図形（三角形）を種類別で分別することで様々な三角形があることを理解し，これには辺の長さが深く関係していることを実感するだろう。このことは他の平面図形，更には立体にも関係することなので，これからの学習においての礎となるはずだ。

第6時『πの世界』

単元目標

①小学校第４学年で習う，円の直径，半径，中心をおさえたうえで円周に興味をもつ（興味）。

②実際に円周を工夫して計る（技術）という作業的な算数的活動を通して円周の規則性にきづく（思考）。

③円周率の数字と音符を照らし合わせて楽譜を完成させることができる（表現）。

単元について―教材観

直径と円周の関係をおさえることで，直径の長さから円周の長さを，あるいは，円周の長さから直径の長さを予測することができるようになる。さらに，楽譜を紹介することで，円に興味をもたせ，小学校第５学年で習う「円周率」へつなげることができる。

まず，半径と直径と中心を大きな円をつかって視覚的に復習させる。次に円周を教え，意味をしっかり理解させたうえで，大きな円の円周はいくらか予測させる。そこで，直径から円周を予測できる技があることを伝え，作業の動機づけにする。作業では，ワークシートを使い，具体物を計って得られた数字を記入していく形にする。その数字を見ながら規則性を見つけさせ，その規則が円周率であることを理解させる。

さらに，その円周率というものは割り切れない小数であり，非常に複雑な数字の並びである事を印象つけさせた上で，それで音楽ができることを教えて，円周率に対する興味を強めさせたい。

写真10　コックさん学校の様子

4－iv）学校通信

（毎回の帰りの会で配布し，教員と児童そして保護者との通信・交流の場とした。）

（オモテ）

YOKKORASHO！	コックさん学校通信 No．２ 平成19年10月20日 担当✿楳田　千尋

やる気　本気　いきいき！

コックさん学校の記念すべき第１回を無事に終えることができました。多くの保護者の方々にも参観していただけて，うれしく思っています。ありがとうございました。

初めての試みにどうなるか予想がつかず，前日も緊張で眠れない…という先生もいたりしたのですが，いざ当日を迎えてみるとなんとも和やかな雰囲気で安心しました。進んで応募してきてくれた子どもたちだけあってそのやる気は挨拶や姿勢など端々から伝わってきます。猛獣狩りや算数のゲームに取り組む真剣な表情，楽しそうな様子…。まだまだ，元々のお友達同士，同じ学校の子同士で集まりがちではありますが，「学校」としての輪（和）が早くもでき始めていることに初回から感動をもらいました。これからこのメンバーで国算（コックさん／たっくさん！）学んでいきたいです！

「２１」　を言ったら　勝ち！！

かつてこんなに２１を求めたことがあっただろうか。いや，ない！というくらい真剣に取り組む姿が印象的でした。最初はとりあえず数字を言い合っていただけだったのが，だんだん考える時間が長くなり，勝つためにはどうすればいいのか悩んで悩んで…。ゲームという活動を通して知らない相手とも自然に会話したり，真剣に勝負したり，本気で悔しがったり喜んだり…。全力で楽しみながら，「これは算数なんだぞー！」と意識させなくても，数学的な思考を働かせることができていたのではないでしょうか。

あれから一週間経ちましたが，お家で対戦が行われたりしたでしょうか？あるいは学校で小さなブームになっていたり…？コックさん学校の子どもたちは必勝法を知っているのできっと負け知らずで，最強伝説を築いている…のかな？

（注・現物はこの部分に子ども達の授業風景の写真。）

（ウラ）

●今日のできごと

①　国語　＊『絵本をつくろう！』　きよか先生

（注・現物はこの部分に，担当教員の手書きのコメント。）

②　算数　＊『サイコロ』　りんこ先生

（注・現物はこの部分に，担当教員の手書きのコメント。）

③　特別活動　＊『すごろく』

２時間目に自分たちが作ったサイコロを使ってすごろく遊び。

●来週の予定

① 国語 ＊『詩を楽しもう！』 ちひろ先生

（注・現物はこの部分に，担当教員の手書きによる予告と持ち物連絡。）

② 算数 ＊『　　』 ことみ先生

（注・現物はこの部分に，担当教員の手書きによる予告と持ち物連絡。）

今日のかんそう
保護者様から

教員から

（注・子ども達・保護者からのコメントに対して返信。朝の会で通信ファイルを回収，手の空いている教員が返信を記入し，帰りの会で返却。）

第５節　成果と課題

５－ｉ）学生教員へのアンケートから

今回のプラクティススクール参加学生に対する共通アンケートも別途行われたが，スタンダードな学習にこだわったこと，児童を複数の小学校から集めたこと等，「コックさん学校」だからこそ尋ねられる要素も多くあるため，学生たちの本音をできるだけ聞いておき，次なる実施に向けての反省材料としたいと考えた。

学生たちは面倒がらずに答えてくれ，一人一人の言葉に聞くべき意味を感じた。そこで，煩瑣ではあるが，アンケートの全容と全員の回答状況を，世話役（学部教員）の一人である萩野の愚見を【コメント】として添えつつ，報告したい。

アンケートの回答者は，「コックさん学校」に参加した学生12名（４年次＝４名，３年次＝３名，２年次＝１名，１年次＝４名）全員である。無記名アンケートだったが，内容から学年は特定できたので，記述回答については４年次のものから並べるようにした。基本的に表記等を含めて原文のまま（明らかな誤字脱字のみ修正）である。

Ｑ１）４年次後期の開講であることについて，どう思いますか？（下級生の皆さんも想像して回答してください。）

〔Ａ 妥当である　Ｂ まあ妥当である　Ｃ あまり妥当ではない　Ｄ まったく妥当ではない〕

Ｑ２）Ｑ１でＣまたはＤを選択した場合，その理由を教えてください。

【回答】　Ａ＝２名　Ｂ＝３名　Ｃ＝５名　Ｄ＝２名

【記述（一部）】

・子どもと接することも卒業論文も，どちらも手を抜けないものなので，どちらか一つに集中したい。

・４年次前期でないと，卒業研究が入ってしまって大変。３年次後期からの準備でいいと考える。

【コメント】

回答は一見万遍なく分布しているようにみえるが，４年次・３年次は全員がＣまたはＤと回答している。（逆に言えば２年次と１年次は全員がＡまたはＢと回答。）実際にその学年になってみないと大変さがわからないということであり，結論的には４年次後期の実施はきわめて学生にとって負担であることがわかる。

Ｑ３）２単位科目であることについて，どう思いますか？

〔Ａ 妥当である　Ｂ まあ妥当である　Ｃ あまり妥当ではない　Ｄ まったく妥当ではない〕

Ｑ４）Ｑ３でＣまたはＤを選択した場合，その理由を教えてください。

【回答】　Ａ＝１名　Ｂ＝５名　Ｃ＝５名　Ｄ＝１名

【記述（一部）】

・これまで受けてきた授業や実習から考えると，２単位ではとても少なく感じる。実習と同じ単位数あって良いと思う。

・準備も含めて，とっても大変なので。（同意見あり）

【コメント】

こちらもやはり上級生であればあるほど，ＣないしＤを選択する傾向が高い。また，学部教員から見ても，下準備的な仕事の負担には学生間で（残念ながら）軽重が生じてしまっていたため，それを多く請け負った学生にとっては「２単位」は少なすぎると感じたようである。

Ｑ５）「コックさん学校」の活動に対する学部教員の協力体制・支援について，どう思いますか？
〔Ａ妥当である　Ｂまあ妥当である　Ｃあまり妥当ではない　Ｄまったく妥当ではない〕

Ｑ６）Ｑ５でＣまたはＤを選択した場合，さらにどのような協力・支援があればよかったか，教えてください。

【回答】　Ａ＝８名　Ｂ＝４名　Ｃ＝０名　Ｄ＝０名

【コメント】

今回の「コックさん学校」に関しては，学生の負担が重くなることは十分に予想されたので，学部教員としても，学校の枠組を作るための支援は極力惜しまなかった。公校務で抜ける以外は，学生の活動はすべて見守るようにし，予算が絡むことや児童を送り込んでくれる小学校・保護者とのやりとりは，学生たちと連絡・連繋をとりながらも，ほぼ学部教員が担うよう努めた。そのぶん，学校の中身（授業や活動で何をするか，等）については，相談を受けた際に助言する程度にとどめ，ほとんど口を出さずに本人たちの意思を尊重し，観察者（および保護者？）に徹するようにした。自分としては，今回のスタンスは，これでよかったと思っているし，Ｑ６の空欄を利用して，何人かの学生が感謝のメッセージをくれた。

Ｑ７）「コックさん学校」の活動のうち「（他の学生教員と協力して）学校を運営する」という面において，困ったこと（どうすればよいかわからない，イメージがわかない，等）があったら，教えてください。

【回答（一部）】

- これまでの知識や経験では，本物の学校の組織や会議の運営が分からない。ゼロから学校をつくるにしても，実際を知ってから行わないと，「現場で使える力」が養えたかどうか，自信がない。
- 困った時，誰と話し合うかの連絡がトップダウン式になってしまった。そのせいで一部の学生教員に負担が大きくかかってしまった。
- 仕事上の役割分担をし，後輩に仕事をまかせるのはよいけれど，まかせっきりにするのが恐いので，時々進行具合を確認するが，仕事をまかせている以上，どこまで意見を言っていいのか……が難しかった。
- 教員間の連携が難しい。学年が違えばそれはさらに難しい。元々学校運営についての具体的な役割というのを把握していない。
- 初めはぼんやりしてイメージがわかなかったが，何回か実施していくうちに，理解することができた。
- 「学校を運営する」というのがあいまいで，何から始めればよいのか，どうすればよいのかがわからなかった。

【コメント】

「模擬学校」ということで，校長以下校務分掌も割り当てたのだが，最初に「校務分掌を決めるように」と指示したところ，学生たちは具体的にどんな役割があるのか，まったくわからなかったようである。そこでインターネットで，校務分掌を紹介している小学校のＨＰを幾つか参照して，今回の「コックさん学校」に必要だと思われるものを抜き出し，考えていったという経緯があった。

また，毎回の学校のあと「職員会議」と称して実質反省会（リフレクションシートへの記入を含む）を行っていたのだが，Ｈ大学の先生が参観されたとき，「君たちがやっているのは職員会議ではない。職員会議とは，そのように一つの授業についてあれこれと感想を述べ合うものではなく，事務的な報告が中心の，もっと機能的な場だ。君たちは，職員会議を見たことがあるかい？」とおっしゃった。Ｈ大学では，附属学校の職員会議を学生たちが参観する機会を設けているとのことであり，この指摘には学生だけでなく学部教員も虚を突かれる思いであった。（もちろん，学生たちのレベルでは，時間をかけて授業の振り返りを行うことにも一定の意義ありと考えるが。）

校務分掌とはなにか？職員会議とはどういうものか？そういったことを学ぶ場を，教職実践系の授業に設定していただければ，あるいは，模擬学校の開始にあたって観察や講義の機会を設けるなどしていければよいと思う。

Q８）「コックさん学校」の活動のうち「授業を実施する」という面において，困ったことがあれば，教えてください。

【回答（一部）】

・当初の予定より人数が増えたので，教具の準備がおそろしく大変だった。

・子ども達の学習面における実態があまりよくわからなかったので，学習の手だてが立てにくかった。

・指導案の書き方がまだしっかりできていないので，それが一番大変でした。４年生にとてもお世話になりました。

【コメント】

上述のほか「実習で学んだことを活かす，またはできなかったことをリベンジできる良い機会になった」（４年次）・「授業はみんなが協力してくれたのでよかった」（３年次）という前向きな回答もあった。実習経験のある上級生は授業の実施について不安はなかったようだが，（今回対象とした）小学４年生後期の時点で，どの程度の学習の積み上げがあるのかを把握するのには苦労していたようだ。

Q９）「コックさん学校」の活動のうち「子ども達と接する，保護者と接する」という面において，困ったことがあれば，教えてください。

【回答（一部）】

・私自身は，この期間は「先生」という自覚で活動しているが，保護者の中には「先生」として見る方と「学生」として見る方がいるので，自分の意識が揺らぐ時があった。

・初めは名前が分からないことがあったので，顔写真の名簿があると良かったかもしれないです。

・保護者の方の厳しい視線を時々感じ，苦しくなったこともあった。子ども達との会話に困った。

・とてもなついて甘えてくる子の対処をどうすればいいか困った。（同意見あり）

【コメント】

40 数名の子どもの顔と名前を一致させることについては，全７回の学校ではなかなか困難だったはずである。初回の学校についての話し合いの折に，デジタルカメラで子どもの顔写真を撮るように示唆を与えたつもりだったが，学生たちは聞き流した（忘れてしまった？）ようである。校長を務めた学生は，最終回にはほぼ全員の顔と名前を一致させていた。一方で，１年次の学生たちは，あまりよく覚えていなかったようであり，ここにも経験と責任感の差が出ていると感じた。ちなみに，子どもとの接し方に悩むコメントはいずれも２年次以下の学生のものである。

なお，欠席の連絡など保護者への対応は，基本的に学部教員側が請け負った。

Q10）３年次・４年次の皆さんにお尋ねします。「コックさん学校」の活動を行うにあたって，今まであなたが受けてきた教育学部提供の授業や実習は，十分に役に立ちましたか？

〔A 十分だった　B まあ十分だった　C 十分でないところがあった　D 役に立たなかった〕

Q11）Q10 で C または D を選択した場合，その理由を教えてください。（「このような授業や実習があればよかった」など具体的にあれば，ぜひ書いてください。）

【回答】　Ａ＝１名　Ｂ＝４名　Ｃ＝２名　Ｄ＝０名　（回答対象学生は７名）

【記述（全）】

・学校の組織や校務分掌のありかた。実習中に職員会議や校務分掌を経験したい。個人情報のとりあつかいについて。

・実習では授業実践が中心で，教師同士の連繋や校務の仕事が具体的に学べず，コックさん学校でそこ

が実践できなかった。校長先生が仕事をほぼ引き受ける形になり，校長の負担が大きかった。

【コメント】

Ｃと回答したのは，今回の模擬学校に対して特に責任を強く感じていた４年次２名であった。Ｑ７に関わる点について，経験値の不足を感じたようである。その点以外は，現在学部が提供しているカリキュラムに対する満足度は高いと思われる。

Q12）「コックさん学校」では 12 人の学生教員がユニットを組みましたが，この人数をどう思いますか？

〔 A 妥当である　B まあ妥当である　C もっと大人数がよい　D もっと少人数がよい〕

Q13）Q12 で C または D を選択した場合，その理由を教えてください。

【回答】　Ａ＝５名　Ｂ＝５名　Ｃ＝１名　Ｄ＝１名

【記述（全）】

・（Ｃと回答）40 人強の人数ならば，今回は 15 人ほしかった。子どもの数を減らせるならば，12 人は動きやすい人数で良いと思う。

・（Ｄと回答）一人一回しか授業ができなかったので，もっと減らすか，時間を増やすべきかと思った。

【コメント】

当初，コックさん学校は，学生教員 12 名・参加児童 25 名程度を予定（予想）していた。ところが思いがけず反響が大きく，結局は一部の希望者をお断りすることになった。学生教員は 12 名だったが，実習と重なっての不参加や風邪の流行もあり，全員揃うことがほとんどなかったことによる負担感もあったかと思う。

また，今回は一人一時間の授業を担当することになったが，二時間は担当したい（授業の流れを作るため，前回の反省を活かしてよりよい授業をするため，等の理由から）という思いは，どの学生にもあったようである。

Q14）「コックさん学校」には結果的に 40 名強の子どもたちが参加しましたが，この人数をどう思いますか？

〔 A 妥当である　B まあ妥当である　C あまり妥当ではない　D まったく妥当ではない〕

Q15）Q14 で C または D を選択した場合，その理由を教えてください。

【回答】　Ａ＝２名　Ｂ＝７名　Ｃ＝３名　Ｄ＝０名

【記述（全）】

・20～30 人が望ましかった。教具や事務作業の準備がやや大変であったので。

・40 人はちょっと多すぎる気がします。

・少し多いと思った。会場設営が難しい。

【コメント】

前のコメントに記したとおり，当初の予定より多い人数となったわけであるが，実際の現場では 40 名クラスは十分にあり得るわけなので，学生のクラス全体を掌握する能力を測るには，実は学部教員側からみれば，ちょうどよかったという気がしている。ただ，通常の学校とは違う「こまやかさ」を売りにするのであれば，やはり学生教員１人あたり児童２人という当初のプランが良いのかもしれない。今後検討していきたい課題である。

Q16）「コックさん学校」は土曜日の午前中に二時間で設定しましたが，それについてはどう思いますか？

〔 A 妥当である　B まあ妥当である　C あまり妥当ではない　D まったく妥当ではない〕

Q17）Q16 で C または D を選択した場合，その理由を教えてください。

【回答】　Ａ＝３名　Ｂ＝７名　Ｃ＝１名　Ｄ＝１名

【コメント】

多くが妥当としたように，参加する児童および参加させる保護者にとっても，土曜の午前（で終わる）というのは適当な時間だったのではないかと思う。担当授業時間を増やしたいという記述回答については，参加学生の人数やカリキュラムの組み方，回数増など，別の手段で対応できるだろう。

なお，「まあ妥当」としながら，「アンケートにもありましたが，たまにはお弁当持ちの日があっても良かったです」と記述した学生がいた。最後に行った保護者アンケートにあった意見に賛同したものである。この点については，最後の反省会でも「野外でお弁当を食べる機会などがあってもよかった」と話題になっていた。

Q18）「コックさん学校」は小学四年生を対象にしましたが，それについてはどう思いますか？

【回答】（具体的なコメントのあるもののみ）

・（個人として）中学年と接したことがなかったので，良い機会となった。（客観的に）小学校では，中・高学年が良いと思う。勉強の好き嫌いが分かれてくる，理解の差がひらいてくる時期の，良い支援になれたら…と思う。

・四年生は四年生で，実習の時とは違った感触があった。生徒の男女の境界があいまいでもあったと感じた。

・グループ活動もでき，皆を引っ張っていくタイプの子どももいたので，ちょうどよい学年だと思う。

・どの学年でもコックさん学校は開校できたと思うが，丁度中学年ぐらいが子どもの成長にばらつきが見られる時期であると思うので，それを考えれば，様々な成長過程を見ることができたので，良かったと思う。

・ある程度の理解力があるのでよかった。

Q19）「コックさん学校」の活動を通して，自分の教員としての資質・能力について，どう感じましたか？
以下の八つの各項目について自己評価してみてください。選択と，あればコメントをお願いします。

① 子どもや同僚とのコミュニケーションを取ることについて

〔Ａ十分にできた　Ｂまあまあできた　Ｃ あまりできなかった　Ｄ まったくできなかった〕

【回答】Ａ＝１名　Ｂ＝９名　Ｃ＝２名　Ｄ＝０名

【記述（一部）】

・一対一のコミュニケーション，全体でのコミュニケーションはできたが，人と人を結ぶ役割を果たせなかった。

・子どもとの会話ネタに困ってしまう時もあった。余りしゃべらない子ともコミュニケーションの取り方を考えなくてはいけないと感じた。

・40 人と多かったので，一人一人と充分に関わることができなかった。

・１～４年生全員で何かやることってあまりないのでよかった。

・一人でオロオロしていた。

・グループ指導が大変だった。

【コメント】

Ｃと答えたうちの一人（最初の記述回答）は，目標設定そのものが高いところにある学生であり，自己省察も厳しい。が，全体として，教員間の連携はうまくとれていたように思う。一方で，子どもとの接し方については，学部教員の目から見ても，やはり得手不得手があるとは感じた。

② 子どもと一緒に活動することや同僚と協力しあうことについて

〔Ａ十分にできた　Ｂまあまあできた　Ｃ あまりできなかった　Ｄ まったくできなかった〕

【回答】Ａ＝２名　Ｂ＝８名　Ｃ＝２名　Ｄ＝０名

【記述（一部）】

・同僚との連繋では，準備段階で率先して進めるのが難しかった。（人が集まった状態では，誰かが動いた。）

・校長に仕事をまかせっきりになってしまった。（同意見あり）

・子どもと一緒にたのしく活動できたと思う。学生との協力は，手伝えた人とそうじゃない人もいたので，「Ｂ」にしました。

・それぞれが自分の仕事をこなしながら，協力できたと思います。授業での活動は子どもたちと一緒にできたけれど，休み時間もあれば良かったかな，と思います。

【コメント】

教員が全員集まる場での協働性は，学部教員の目から見ても問題はなかった。ただ，その蔭で校長の学生が相当な仕事をしていることに気づいているかいないかで，回答の選び方が変わったように思う。その「気づき」度の高低は，学年の上下に対応しているようであった。

③ 子どもに対する愛情について

〔Ａ十分に持てた　Ｂまあまあ持てた　Ｃ あまり持てなかった　Ｄ まったく持てなかった〕

【回答】Ａ＝10名　Ｂ＝２名　Ｃ＝０名　Ｄ＝０名

【コメント】

学校の性格上「やる気！本気！いきいき！（←コックさん学校の校訓）」な児童が集まっていたので，学生たちは彼らがかわいくて仕方がないようだった。子どもたちもよく懐いていた。なお１年次の一人が「心のどこかで恐れもあった」という正直な回答を寄せていた。

④ 「コックさん学校」の一員としての使命感や責任感について

〔Ａ十分に持てた　Ｂまあまあ持てた　Ｃ あまり持てなかった　Ｄ まったく持てなかった〕

【回答】Ａ＝６名　Ｂ＝５名　Ｃ＝１名　Ｄ＝０名

【記述（一部）】

・子どもと接する時は，どんな時も責任を感じる。みんながケガもなく，元気に終えたことが，一番うれしいし，安心している。

・実際に学校を動かし，子どもを指導するということで，責任はとても重く感じ，冷静に動こうとした。

・言われたことだけ，任されたことだけでなく，もっと自分から動ければよかったです。

・安全確保だけは毎回注意していました。

・今までよりは使命感や責任感を持てたと思う。

【コメント】

１年次の使命感や責任感については本人たちの自己評価は高かったのだが，客観的に見るとまだまだ（どうしても視野が狭くなりがち，など）という印象である。が，全体的には高い意識で動いていたと思う。

⑤ 授業における教材内容の工夫について

〔Ａ十分にできた　Ｂまあまあできた　Ｃ あまりできなかった　Ｄ まったくできなかった〕

【回答】Ａ＝０名　Ｂ＝９名　Ｃ＝３名　Ｄ＝０名

【記述（一部）】

・課題はある。でも，今，自分にできることはやりきれたと思う。

・もう少し授業の狙いをしぼって，改善できる余地があったのではないかと感じた。

・ただ楽しいだけではなく，学びの場も取り入れようとしたが，なかなかその両立がむずかしかった。

・もっと発展につながる内容にできれば良かったです。

【コメント】

学生たちの自己評価は厳しいようだが，参観や評価にいらした他大学や現場の先生方には，教材の工夫についてはかなり好評であった。ただ，今までの記述回答にもあるように，もう一時間担当できれば，さらに工夫ができたのだろうと思う。

⑥ 授業における計画性・指導の実際について

〔Ａ十分にできた　Ｂまあまあできた　Ｃあまりできなかった　Ｄまったくできなかった〕

【回答】Ａ＝２名　Ｂ＝７名　Ｃ＝３名　Ｄ＝０名

【記述（一部）】

・ばたばたした。絵本づくりは，意外と仕上がりが良く，子どもたちの感性におどろかされ，周りの学生教員のサポートに感謝している。

・国語と算数，共に一貫した目標（子どもにつけさせたい力）がなかったので，何を学ばせようとしたのかは薄くなってしまった気がする。

・実習でやったこともあったので，計画性をもってできたと思う。

・計画はできた。実際は，全く計画通りに行えなかった。

【コメント】

二番目の記述回答にあるように，「何を学ばせるのか」という意識を浸透させるには至らなかった観はある。事前打ち合わせの段階で，たとえ模擬学校といえど「カリキュラム」を意識してほしいと注文をしたことがあったが，それを実現するには回数的にも難しかったかと思われる。ただ，全体的には，子どもの反応が良かったこともあり，満足した学生が多いようだ。

⑦ 子ども一人一人の実態をつかむことについて

〔Ａ十分にできた　Ｂまあまあできた　Ｃあまりできなかった　Ｄまったくできなかった〕

【回答】Ａ＝０名　Ｂ＝９名　Ｃ＝３名　Ｄ＝０名

【記述（一部）】

・学習に遅れのある子に気付き始めたのは，第６回頃からだった。もっと早く気付きたかった。

・子どもの名前を覚えきれなかったのが残念。（同意見，他にも複数あり）

・よく関われた子については，まあまあつかめたと思うけれど，あまり関われなかった子については，つかめなかった。

【コメント】

実態をつかみきるのは，全７回程度では難しいだろう。ただ，実態をつかみたいという思いから，子どもに積極的に関わろうとする姿勢は，ほぼ全員が持っていたように見えた。

⑧ クラス全体を掌握することについて

〔Ａ十分にできた　Ｂまあまあできた　Ｃあまりできなかった　Ｄまったくできなかった〕

【回答】Ａ＝０名　Ｂ＝６名　Ｃ＝４名　Ｄ＝０名　（回答し忘れ２名）

【記述（一部）】

・グループとしての把握はできた。雰囲気の違いに気付くことができる。

・誰がどのグループに誰がいるか掌握できなかった。

【コメント】

この①～⑧は基本的にリフレクションシートに掲げた八つの評価項目を意識して設けた質問なのだが，この⑧「集団の掌握」ということについては，記述回答を見るかぎり多くの学生が，質問の意図そのものを掴み損ねていた。ここで問うたのは「場に応じた適切な発声（声量，抑揚等）や表情，身体の動きおよび話のスキルを用いて，集団の一人ひとりを掌握し，その動静をコントロールしている」（本

事業で作成した評価項目における Excellent から引用）かどうかだったのだが，⑦の質問との混同が見られた。質問の意図を掴み損ねていることじたいに意識の低さが感じられ，今回の実践において彼らが最も苦戦したところであるかもしれない。

やはり上級生であればあるほどスキルが高く，ただ大きな声を出すだけが子どもの耳を引く方策ではないことが経験的にわかっている。校長の学生は児童を自分に注目させたいとき，静かな声で「みんなと目が合うまでは，先生は待つよ」と言って，しばらく沈黙の時間をつくり，自然に40人を掌握することができていた。

Q20）「コックさん学校」の活動を振り返って，どのような思いがありますか？　次のうち当てはまるものをすべて選んでください。

〔 A　教員としての自分に自信が持てた　　B　教員としての自分に自信をなくした
C　教員としての自分の課題が見つかった　　D　十分に楽しむことができた
E　まずまず楽しむことができた　　F　あまり楽しむことができなかった
G　参加してよかった　　H　参加しないほうがよかった
I　自分自身成長できた　　J　あまり成長は実感できなかった　〕

【回答】Ａ＝４名　Ｂ＝１名　Ｃ＝12名（全員）　Ｄ＝９名　Ｅ＝３名　Ｆ＝０名
Ｇ＝11名（ほぼ全員）　Ｈ＝０名　Ｉ＝12名（全員）　Ｊ＝０名

Q21）ここまでのアンケートで書けなかったことで，プラクティススクール事業について改善したほうがよいと思うところがあれば，教えてください。

【回答（一部）】

・学生がどこまで責任をもつのか，明確に。
・他学校との情報交換。今回は友人がいたので「食べごと」と「体育系」と情報交換ができた。できないと不安がある。
・子どもの実態について，もう少し保護者にくわしく訊ねてアンケートすると良いだろう。
・２時間分は授業したかった。２時間分できるようＴＴ（協力態勢）にしたら良いか？（授業１時間では物足りないとの回答は，他にもあり）
・子どもを見るのが精一杯で，同僚の先生方の様子まで見る事が出来なかった。→彼らに対する評価がうまくできない。（同意見あり）
・授業を行う場所は，毎回同じ所で行ったほうがよい。もう少し，学校現場での先生方の仕事（授業だけでなく，職員会議の仕方や校務分掌の内容）や，学校という組織としてのあり方を，しっかりと勉強してから，今回のプラクティススクールで実践していけたらよかったのでは…と思った。
・準備期間をしっかり設けてほしいです。募集期間と開始にも少し期間をおいた方がおちついてできると思いました。校務分掌，いかしきれなかったので，その役割を勉強する機会がほしかったです。
・事前に準備する期間と実際に学校をはじめる期間をわけたらどうか？バタバタしてしまう。
・あまりに何もない状態から始めたので終始バタバタしていた。せめて，学校経営に関することをもう少し学んでからやってみた方がよいのでは。会場設営にも課題あり。
・一年生では少しきついところがある（経験不足）と思いました。準備期間をもっと長くとりたい。（同意見あり）
・季節を感じさせるプログラムも欲しかった。秋の遠足とか，音楽発表会など。なので，みっちり半年間やりたい！！

【コメント】

学生たちが挙げてくれた事柄は，そのまま（実施が続くならば）来年度以降の我々の課題となろう。

学校づくりにイロハのイから立ち会った者の目から見ても，半期２単位では負担が大きすぎると思う。

以下は，例えばこうしてはどうかという個人的な意見である。半期２単位×２とし，第一段階は学校を立ち上げるための準備段階（何の学校とするか，校務分掌の決定，日程とカリキュラム・時間割の決定，指導案の作成，児童生徒の募集，児童生徒への具体的な案内，など），第二段階（こちらを「教職実践演習」とする）が実際に学校を開く段階（10 回程度，各２時間？　事後処理も含む），とするのが理想かと思われる。児童生徒を集めることを考えれば，第二段階はやはり今回くらいの期間が適当だと思われる（12 月にはかからないように。９～11 月で実施が望ましい）。卒業論文・卒業研究と重なるという問題点は依然として残るが，準備期間を４年前期に移行させることにより，負担は軽減できるかと思われる。

一人の学生が挙げた会場の問題については，今回はどうしても一箇所に統一できなかった。学生には申し訳なかったが，会場をその都度手配した学部教員としては，精一杯やったつもりである。

Q22）デジタルペンを用いた評価システムについて，感想や気づいた点などがあれば，書いてください。

【回答（一部）】

・正直……今のままなら使いたくない。評価表が見にくい。ペンの具合が悪い。グラフならエクセルでもできる。評価シートを書く時間がもったいない。○をつけるだけだが，時間がかかる。それより，生の声での反省会をきちんと行いたい。→評価の観点を決めることは，機能的で，比較や成長の過程を一目で見ることができて良い。しかし，観点が定められることで，見えない部分もでてくる。

・デジタルペンは書きづらい上，データの入力がパソコンに入れるのが難しかった。

・正直，子どもにばかり集中して同じグループの人を見ることができず，他人への評価がおろそかになってしまった部分がある。また，パソコンとの互換性がよろしくなく，あまりよいシステムとは思えなかった。

・トラブルがたくさんあって大変でしたが，項目を設けて，はじめからずっと同じように評価をつけていくのは良かったです。

・使うことが悪いとは思わないが，データがおくられないなどシステムがあまりよくなかった。正直，自分で書きこんだ方がよいのではないか。

・毎回の記入はめんどうでしたが，大事なことだと思いました。

・評価する基準が本格的すぎて，よくわからなかった。（←１年次）

【コメント】

厳しい意見が並んでいるが，システムおよび方法の改良によってクリアできそうに思う。デジタルペンを用いずシステムのみを活かすことにし，各自が時間のあるときに評価ページにアクセスして，評価を書き込むというのが，トラブルもなく効率的なのではないか。

さらに学生の立場を考えてみると，確かに「学校をつくる」ことにエネルギーを注ぐので，自己評価は出来ても仲間の評価までは追いつかないだろうことは，十分に理解できる。この問題を，いかにして「教職実践演習」が要求するものに照らしてクリアしてゆくか，大きな課題である。

学部教員は，全員の評価を毎回行ったが，これもなかなかに大変であった。評価担当者を増やして，一人が見る人数を四人程度にするのがよいと思うが，それでは多くの動員が必要になり，ジレンマに陥ってしまう。さらに言えば，できれば「学校をつくる」ことを支援する教員と評価する教員とは，分けたほうがよい。何か起きたときの責任を取るのは学生ではなく，学部教員である。学生の学校づくりを支援する教員は，子どもたちの安全を含めた学校の全体に目配りをする必要があり，どちらかといえば学生たちより子どもたちのほうを見るのに必死になってしまう。ここは，ぜひとも改善していきたい点である。

Q23）「コックさん学校」を終えての感想や今後に向けてのメッセージなどがあれば，自由に書いてください。

【回答（一部）】

・普段知り合うことのない人とも同じ活動を通して仲良くなれた。人と協力し合うことは，とても楽しいことだと実感した。８月，みんなのスケジュールが合わなくて，一人で準備を進めている頃，とても不安で不安で，ストレスが大きかったが，９月，全員集まって顔合せをした時，ものすごく安心した。みんなやる気が（私以上に）あって，12 月まで頑張ろうと思った。大学生活最後の良い思い出になった。自らの課題も見つかり，これから勉強したい。この活動に参加できて良かった。

・子どもとの会話の持ちネタや引き出しを増やすべきだと感じた。→自分自身の教師力，人間としての魅力を増やすべきだと感じている。人と接するのは，自分の全てが試されるものとして考えるべき。

・大学の授業では，あまり子どもとふれ合う機会もなく，自分の教師としての実践的な指導力がためせないので，今回のプラクティススクールは，自分自身の指導力や教師としての向き不向きを確かめ，伸ばそうと動機づけさせられる，とてもいい機会となった。ただ，校長先生が，ほぼ全ての仕事をひきうけるような形になってしまい，校務分掌が十分に生かせたとはいえなかった。なので今後は，教員どうしの連携の仕方や，学校運営の仕方を，もう少し全員で考え，協力して準備できるといいなと思った。授業も，もう少し「子どもに身につけさせたい力」というのを視野に入れながら展開していけたら良いと思った。でも，全体的にとても楽しくて，充実していた。やってよかったと思う。この事業はとてもやりがいのある，いいものだと思うので，ぜひ後輩たちにもやってもらいたいと思った。ただし４年の後期はキツイかも。なお，先生方の協力が厚く，とても頼りになって感動した。

・最初は毎週土曜日がなくなるというのが「げ～～」と思っていたが，やっていくと全然苦にならず，すごく楽しめたと思います！子どもがほんとにかわいく，自分の子どもに対する思いを改めて感じることができたと思います。授業をしてみて，いろいろな反省がでて，早くその反省を活かしたいと思いました。とてもためになるものだったと思います。

・準備などはとても大変でしたが，やって良かったです。毎週の早起きも，学校通信も，苦にならないくらい楽しかったです。さまざまな学校から子どもたちを集めたことで，「学級づくり」から経験できたのも良かったです。先生たちも見守りながら，基本的に学生に任せてくれたので，手さぐりだったけれど，自分たちで作っていくことができました。本当に参加して良かったです。

・とても充実してすごせたのでよかった。自分たちがやったことが，来年・そのあとと参考になればうれしい。参加できてよかった。

・四年生対象ということなので，もっと四年生が参加できるような声かけを行った方が良いと思う。今回は，一年生に対する負担がとても大きいなと感じてしまった部分がどうしてもある。個人的には，自分自身のことを「先生」と呼ぶことが勇気いりました。

・自分自身のこれからの課題を見つけることができて本当によかった！！１～４年次協同で作業できたのがとてもよかった。

・学校を作るのに，こんなに話し合いするんだ！！とビックリしました。なので，介護等体験のように「準備期間」と「実施期間」を設けて，しっかりやったら，もっと長くできるし，やる事がわかってきてるので，とまどいも無かった（少なかった）と思いました。実際，小学生と触れあう事ができたのは，すごくイイ経験になりました。「先生！！」って呼ばれた時，ドキっとして，先生としての自覚が芽生えはじめた気がしました。

【コメント】

以上の回答からもわかるように，半期２単位の授業としては負担が大きすぎるなど改善すべき課題は

少なからずあるが，教師としての総合的な力量が試され，自分の資質・能力を振り返る機会となり，教師として成長してゆけるという点で，まことに「教職実践演習」の名にふさわしい実践となったと思うし，学生たちも大きな財産を得たようである。

5－ii）保護者へのアンケートから

「コックさん学校」の最終回は，多くの保護者が参観してくださった。学生教員も自主的に保護者を対象にしたアンケートを作成・実施していたが，それと質問事項が重ならないようにしながら，学部教員サイドとして尋ねておきたい事柄をアンケートとし，回答していただいた。

アンケートは無記名，17 名からの回答を得た。その全容と回答状況を，世話役（学部教員）の一人である萩野の愚見を【コメント】として添えつつ，報告したい。

Q１）この試みは，大学生が教員としての資質・能力を身につけるうえで，役立つと思われますか？

〔1．おおいに役立つ。2．ある程度は役立つ。3．あまり役立たない。4．まったく役立たない。〕

【回答】　１＝11 名　２＝６名　３＝０名　４＝０名

Q２）Q１で「１」「２」を選んだ方にお尋ねします。どのような面で役立つと思われましたか？　＊複数回答可

〔1．コミュニケーションの力が伸びる。　2．子どもや同僚と共に何かを成し遂げる力が伸びる。
3．子どもに対する愛情が深くなる。　4．子どもに対する理解が深くなる。
5．創造力や開発力が伸びる。　6．授業のテクニックが上達する。
7．社会人としてのマナーが向上する。　8．その他（　　）〕

【回答】　１＝14 名　２＝８名　３＝７名　４＝14 名　５＝３名　６＝５名
７＝１名　８＝「自分が本当に教員になりたいのかがわかったのではないかと思われます」

Q３）お子様を参加させたい模擬学校は，どのような内容ですか？　＊複数回答可

〔1．基幹科目である国語と算数の学校。2．主要四教科（国算理社）を万遍なくなく扱う学校。
3．子どもの不得意な科目に応じた単科学校。4．子どもの得意な科目の力を発展させる単科学校。
5．子どもが体力をつけられるような運動系の学校。6．音楽や美術などの芸術系科目の学校。
7．子どもが自然体験・社会体験できるようなアウトドア系の学校。
8．小学生向けの英語の学校。　9．その他（　　）〕

【回答】　１＝８名　２＝４名　３＝５名　４＝３名　５＝４名
６＝９名　７＝12 名　８＝８名
９＝「考える力を身につけることができる学校」「自ら考える力を養う学校」

【コメント】

次の質問事項にも関わるが，保護者はいわゆる「塾」的な性格を求めていない。「国語と算数」「芸術系」「アウトドア系」「英語」に関心が多く寄せられており，全体に子どもの人間形成にかかわる基礎的な学力を身につけたり豊かな体験をしたりする機会が多く求められているように思われる。

Q４）「コックさん学校」のような模擬学校では，「学び」の目的をどこに置くべきだと思われますか？

〔1．遊びの要素を取り入れて楽しく学ぶ。　2．学校の授業でわからなかったところを補う。
3．学校の授業より高いレベルを目指す。　4．教科にこだわらず総合学習的な体験をさせる。
5．その他（　　）〕

【回答】　１＝16 名　２＝0 名　３＝0 名　４＝４名
５＝「『知る』『わかる』喜びを教え，学習する事はけして強制されてするものではないとい

う事を，教師ではなく，お兄さんお姉さんである教師予備軍の学生さんが子供に伝える，といった感じでいいと思います」「個人の学力のレベルに合わせて，学習意欲がでてくるような体験をさせる」

「他校の生徒ともコミュニケーションをとれるように。勉強は“楽しい”と思えるように！」

「基礎から応用まで発展できるような学習を期待」

【コメント】

学校で学ぶことの補強であれば「塾」でよい，模擬学校には学校とは違う「学び」の体験を期待する，という保護者の考えが，まことに顕著に現れる結果となった。圧倒的多数の保護者が「遊びの要素を取り入れて楽しく学ぶ」すなわち「学ぶ」ことの楽しさを実感・体感できるような模擬学校を望んでいるということを，我々としてはぜひとも念頭に入れておきたいと思う。

Q５）お子様の学力・学習にかかわることで，ご心配やご不安があれば，（よろしければ）お聞かせください。

【回答】

・教科にかかわらず，文章問題が苦手な様で，計算式は解るのに，文章になると解らなくなるようです。もっと読解力が身につくといいかと思います。

・読解力が不十分。

・くり返しドリルのような学習はするのですが，少し考えなければならない問題になると放棄してしまうようです。いつも時間がなく，ていねいな作業，ゆっくりした読書などせず，いいかげんな気がします。

・わからない問題を解く努力をしようとしない。

・学校の授業の中では，やる気がわかないみたいです。

・字が汚い！寝ころんで宿題をしようとする！など，学習態度の方が心配です。

・何かを自分で考えて，作ったりすることは好きですが，時間がかかるのが気になる点です。

・基本的なことは理解しているが，ケアレスミスが多々あるので，それをなくしたいと思っています。

【コメント】

読解力の低さ，学習意欲の低さ，と，保護者の不安・心配は，ここのところ一般的に言われる子どもの学力にかかわる危機意識と，ほぼ一致しているようだ。

Q６）琉球大学教育学部の教員や学生に期待したいことがあれば，お聞かせください。

【回答（一部）】

・このような学校は，是非毎年続けて欲しいと思います。子供達はもちろん，学生さんも一緒に成長できると思います。（同意見，多数あり）

・今回の試みは大変楽しく参加でき，子どもが喜んでいました。どうしても熱心な親の子の参加が中心になってしまうのが残念です。もう少し小学校と連動した，参加呼びかけの工夫ができないかな～と思います（→工夫・教師の協力）。どんな子も，とてもいい可能性や力を持っていると思うので，その発見の場にしてほしいです。それができる教員の養成を，期待したいと思います。

・分け隔てなく，親しい姿勢が良かったです。苦手なことに進んで挑戦できるような，上からではなく「一緒にする」ということを考えてほしいな，と思いました。

・子供に「学び」を遊びながら教え，それが将来，現場で教員となる学生さんにとっても，貴重な体験になる事だと思います。やはり実際に子供と接する機会が，従来の２週間程度の教育実習だけでは足りないと思います。おおいに地域の子供達あるいは学校に協力を求めてもかまわないと思います。参加する子供も，普段足を踏み入れることのできない大学の施設で学べるという機会を得る事によって，

将来の自分の進路について考えるチャンスになるのでは？と思います。

・できれば子供達の通っている学校に来てくれて，みんなにこの楽しさ（勉強の楽しさ）を教えて頂けたらいいなと思います。

・一人一人の子供の「わからない」ところがどこからなのか見極める目を持って欲しい。できるようになる努力は個人個人でちがうと思うので，どの位の努力がその子に必要なのか，それに合わせて宿題の量を決めれる力をつけて欲しい。

・学校現場は，とても多忙で，授業が充実しているかどうかは，教員の資質にかかっていると思われます。子どもたちが全員，基礎的なことはもちろん，応用に発展できるような授業，生徒との関わりを愛情もって対応できる教員が増えることを期待しています。

・心の面も教えてくれる先生になってほしい。

【コメント】

学生が用意したアンケートに「来年もこのような企画があれば，お子様を参加させたいですか？」という質問項目があり，回答者全員（20名）がYESであった。今回の全7回という回数については「少ない」という回答が多く，子どもの反応を問うた質問項目（複数回答可）には，全員が「楽しそうだ」に○をつけていた。学生たちの努力の甲斐あって，今回の「コックさん学校」が好評であったことを示すとともに，このような場に対する地域のニーズの高さが，改めて実感された。

現在，我々には確かな力量を持つ教師を育てることのほか，地域への貢献，子どもの学力問題への何らかの支援，が求められている（はずである）。「コックさん学校」のような模擬学校は，それらの要素を包括しうる取り組みであり，そのことが，今回の保護者の方々の反応・意見から十分に確認できた。

第6節　むすびにかえて－世話役（学部教員）による総評－

～～～～～～～～吉葉研司（教育学部児童教育専修　准教授）～～～～～～～～～

教職実践演習としての初めての取り組みということで，教員の側も試行錯誤の半年であった。学生たちが学校を開講し，その教育目標から学生自らがつくらねばならない。この高いハードルに対し学生たちは積極的に，挑み自らを成長させていったといえる。これは，今回が希望者を募り，あるいは教員が力のある学生を募り，といった目的意識の高い学生の集まりからつくられたことが大きいといえる。

これが，必修化される際，今回と同じような運営ができるかというと，世話役としては以下の不安が残る。第1に学生たちに任せたときに子ども達や父母たちとどこまで責任ある対応ができるかという不安である。第2に運営もふくめた今回の模擬学校が教職実践演習の評価基準となれば，この高いハードルをこえられない学生がかなりの数ででてしまうのではないか。第3に，となれば，学生評価もふくめた教員の指導体制をどう確立するかが大きな課題となる。その数も問題ではあるが教員指導の質の面でも大きな課題となろう。

とはいえ，その時，与えられた授業だけでなく，1日全体を見越したクラス運営を考えなければならない今回の取り組みは，教員を目指す学生にとって，実習とは異なる成長の場を保障したことは間違いない。一人一人の子どもの姿を学校運営全体から捉え，対応のあり方を模索するそのあり方は，日々高まっていった。この点を全学的に共有し，教員の共通理解の輪を広げることが必修化に向けての鍵になるといえる。（あと，萩野先生！あまり手伝えなくてごめんなさい）

～～～～～～～～～萩野敦子（教育学部国語教育専修　准教授）～～～～～～～～～

コックさん学校の実践結果に関する所見は，前項のアンケート報告の「コメント」欄でほぼ述べ尽くしたので，そちらを参照されたい。ここでは世話役という立場について思うところを語ることにする。

私の専門は日本古典文学でガチガチの内容学ゆえ，私自身は教員養成・教職指導に関しては素人に近い。しかし，いま本学部にとって「学校教育系・教科教育系の教員に集中しがちな仕事を，いかに教科専門系の教員に割り振るか」というのは大きな命題であり，そのサンプルを務めるつもりで，今回の仕事を引き受けたのである。さて，その結果はというと，学生が模擬学校を実施するうえでの事務的な面での支えには，それなりになれたと思う。しかし，彼らの（指導案づくり等の準備を含めた）授業実践に対しては，評価するにせよ助言するにせよ，自分の中にその方法論がないことに忸怩たる思いをするばかりであった。特に小学生を対象とした今回，評価者としての私はニンではなかったと思う。（「コミュニケーション能力」や「協働性」といった，教員に限らず社会人として求められる資質については，それなりに評価できるのだけれども。）そもそも，模擬学校に関する事務的な仕事と学生に対する評価との両方を一人ないし二人の担当者でカバーするのは，これを継続していくとすれば難しいだろうというのが，現在の実感である。評価は，学生のためにも，それをするに相応しい教員によってなされたほうがよい。そして模擬学校の実施面にあたっては，できるだけ教科専門系の教員を動員するように務めればよいと思う。（ことは言うほど簡単でもないかも知れないが……。）具体的な提案をすれば，実施担当教員（教科専門系教員）２名・評価担当教員（学校教育系・教科教育系教員）２名・地元の小中学校教員（助言者兼評価者）１名の，合計５名程度でチームを組むのが，体制としては望ましいように思われる。

とまれ，上述の課題をクリアして継続的に実施できるならば，プラクティススクールは，教員養成の質を高め，地域にも貢献でき，うまくやれば学力問題の克服にも寄与することの可能な，優れた取り組みとなるであろう。

最後になりましたが，参加児童を集める段階から幾度となく足を運ばせていただき，その都度快く応対してくださった，嘉数・志真志・長田の三小学校の皆様に心より御礼申し上げます。ご協力ありがとうございました！　★「卒業」の日，手作りの証書を手に，笑顔の子どもたち　平成19.12.08★

写真11　コックさん学校卒業時の様子

付．参考資料

ｉ）各小学校校長あてに配布した協力依頼

琉大教育第■号
平成１９年９月１８日

■小学校 校長
■■ 殿

琉球大学教育学部
学部長 ■■

平成 19 年度教員養成改革モデル事業・プラクティススクール「コックさん学校」につきまして，ご協力の御礼及び更なるご協力についてのお願い

時下ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。平素は，本学部の学生教育・教員養成に対するご理解とご協力を賜り，深く感謝申し上げます。

さて，先般宜野湾市教育委員会教育長を通して貴校に文書をさしあげましたが，今年度文部科学省が着手している教員養成改革モデル事業に本学部の「教員養成最終段階におけるプラクティススクールによる総合的力量の形成とその明示的な確認に資する事業」が採択されました。それを受けて本学部では，学生有志が「先生」となり，本年の 10 月から 12 月にかけて複数のプラクティススクール（模擬学校）を運営することになりました。

そのひとつが，７週にわたり土曜日の午前中を使って，国語と算数を楽しく勉強する「コックさん学校」です。（「コック」は「国語（こくご）」・「さん」は「算数（さんすう）」の略で，参加学生が考案した学校名です。）「コックさん学校」は，近郊の四つの小学校（本学部附属小学校・嘉数小学校・志真志小学校・長田小学校）の四年生児童を対象とする学校であり，すでに貴校において学生たちによる最初の募集活動をおこなわせていただきました。今後さらに保護者の皆さまへの詳細な説明などをいたしまして，参加児童を確定し，魅力ある学校づくりに取り組む所存です。

貴校・貴殿のご理解により募集活動にご協力いただきましたことを感謝申し上げるとともに，今後実際に学校を運営していく段階においても，何卒ご協力を賜りますよう，重ねてお願い申し上げる次第です。

初の試みでもあり，何かと至らぬ点も出てくるかと存じますが，お気づきのことがありましたら，忌憚ないご意見ご助言を賜りますよう，お願いいたします。

プラクティススクール運営担当教員　萩野敦子・吉葉研司
コックさん学校 学校長　内間清香
〔本件に関する問い合わせ先〕　琉球大学教育学部准教授　小林稔

ii）各小学校に配布した第一次案内

平成19年９月７日

■■小学校
第四学年　児童の皆さん
　　保護者の皆さま

琉球大学教育学部　プラクティススクール運営担当教員
参加学生一同

プラクティススクール「コックさん学校」のご案内

このたび琉球大学教育学部では，学生有志が「先生」となり，10月から12月にかけて，いくつかのプラクティススクール（模擬学校）を運営することになりました。

そのひとつが，７週にわたり土曜日の午前中を使って，国語と算数を楽しく勉強する「コックさん学校」です。料理教室のような名前ですが，「コック」は「国語（こくご）」・「さん」は「算数（さんすう）」，合わせて「コックさん」です。

「コックさん学校」は小学校四年生の皆さんを対象に，四年生前期までの学習事項をふまえて，遊びの要素を取り入れながら，楽しく国語と算数の授業をおこないます。楽しみながらも，今まで習ってきた国語と算数の知識を確認し，それを応用する力を育てていきたいと考えています。20～25名くらいの子どもに12名の先生（学生）がつき，親身で丁寧な指導をしたいと思います。

参加費は無料です。国語や算数が得意な子だけでなく，苦手な子も「大歓迎」です！　土曜日のひとときを，やる気いっぱいの先生（学生）たちと一緒に過ごしてみませんか？

日程：10月13日，10月20日，10月27日，11月10日，11月24日，12月1日，12月8日
10時00分 ～ 11時40分
（なお，上記のうち２回は時間を１時間ほど延長し，お楽しみイベントをおこなう予定です。詳しい時間割などは，改めて参加してくださる皆さんにご連絡します。また，用事などがある場合には，全部の回に出席できなくてもかまいません。）
会場：琉球大学教育学部校舎内の教室
（予定。来校のしかたについては，改めて参加してくださる皆さんにご案内します。）

参加を希望される場合は，下の申込書に必要事項を記入のうえ９月14日までに，担任の先生にお渡しください。希望する児童の保護者の皆さまには，追って詳細をお知らせいたします。

なお，ご質問やご不明の点がございましたら，吉葉（よしば・琉球大学准教授・■■－■■）または萩野（はぎの・琉球大学准教授・■■－■■）にお問い合わせください。

（キリトリ）

「コックさん学校」に参加を希望します。
■■小学校４年（　　）組　　児童氏名（　　）
保護者氏名（　　）　保護者連絡先〔電話番号〕（　　）

（萩野敦子、吉葉研司、徳村恵子）